

博士学位論文

乳児保育における新たな保護者支援研究

～連絡帳をツールとして～

Research on New Parent Support System in the Field of Infant Day Care

～ Utilizing Communication Notebooks between Parents and Childcare Workers ～

大阪総合保育大学大学院

児童保育研究科 児童保育専攻

博士後期課程 平成 26 年入学

丸目 満弓

論文の要旨

本研究の目的は、保育所の乳児クラスを中心に古くから行われている連絡帳に焦点をあて、保護者支援、さらに保育ソーシャルワークを行うツールとして意味づけを行い、活用できる可能性を検討することにある。

核家族化が進んだ結果、子育て不安や負担の増大から少子化が起こり、その少子化対策の一つとして 1990 年代ごろより保護者支援、子育て支援などの概念が誕生した。そして子育てに関する専門性を持ち、子どもや保護者の最も身近に位置する保育所や保育士に、保護者支援の役割や機能が期待されるようになった。

しかし、慢性的な施設不足、人手不足など厳しい保育現場の状況により、また保護者支援を行う際に用いるソーシャルワークの理論が保育士の専門性と異なるために実践しづらいなど様々な要因が重なり、求められる役割と実践にギャップが生じている現状が先行研究でも指摘されている。

また昨今の保護者や家庭が抱える問題は複雑化、多様化する一方であり、保育士にとって関われる限界が生じている。就学期で導入が進んでいるスクールソーシャルワーカーのような外部専門職が導入され、保育士と他職種との協働により保護者支援を行うことが望まれる。

そこで保育士が担う役割を考えた際、保育士にしか行えない、保育の専門性を活かした支援、そして今より業務の負担を増さない支援として、保育業務の一つとして長らく行われてきた連絡帳に着目した。連絡帳業務は新人からベテランまでキャリアを問わず行われているため、全ての保育士にとって取り組みやすい。連絡帳に保護者支援という新しい視点を持ち込み、保育ソーシャルワークのツールとして活用する意義は大きいと考えられる。

第 1 章、第 2 章で、主要な概念である「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」「連絡帳」に関する制度的枠組みや先行研究を概観したあと、第 3 章、第 4 章において連絡帳に関する二つの調査を行い、その結果、連絡帳を保護者支援、保育ソーシャルワークの支援ツールとして活用可能であることが実証された。さらに第 5 章では、連絡帳という

間接的なコミュニケーション以外の方法である直接的な対面コミュニケーションに関する調査も行い、保育現場における保育士—保護者間のコミュニケーションの現状も明らかにした。

全体を通じた総合的な考察として得られた知見は、図 終章—1 の通りである

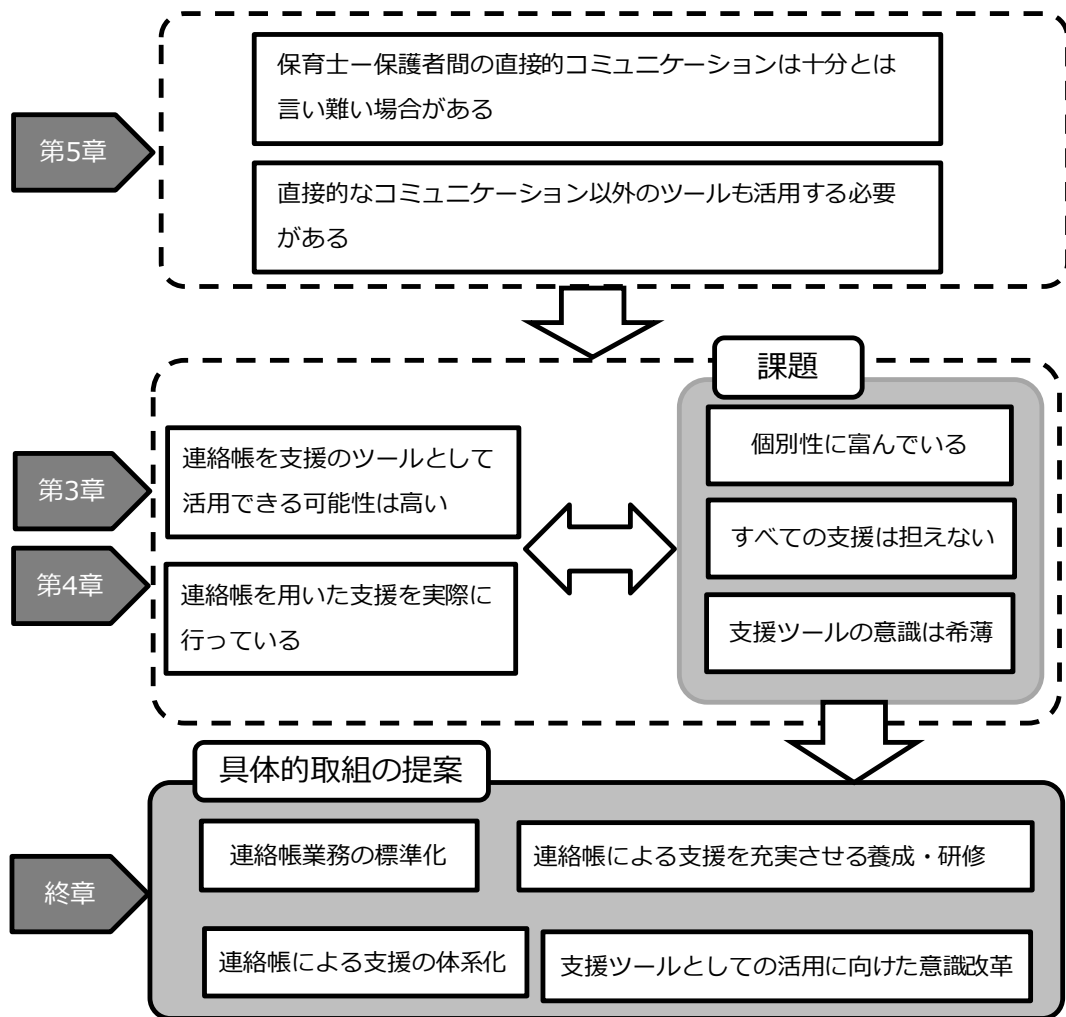


図 終章—1 総合的考察

まず第5章で明らかになったこととして、保護者は何らかの不安や悩みを抱えながら日々子育てをしており、保育士に対する一定の支援ニーズが認められるものの、保育士—保護者間のコミュニケーション状況は必ずしも十分なものとはいえなかった。そのた

め、直接的なコミュニケーション以外の手段、すなわち連絡帳を保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとして活用する可能性を模索する必要性が出てきた。第3章の保育士に対する意識調査においても、連絡帳を支援のツールとして活用することは可能だと考えている保育士は多く、第4章で連絡帳の記述を分析した調査においても、実際に連絡帳を通じた保護者支援が行われていることが確認された。

しかし、連絡帳が保護者支援のツールであるという認識はまだ希薄であり、保育士による個人差も大きい。今後、連絡帳を用いた支援が専門性をもった業務として確立するためには、今後の課題として提示した図 終章—2 の通り、1. 連絡帳業務の標準化、2. 連絡帳による支援の体系化、3. 連絡帳による支援を充実させる養成・研修の構築、4. 保育士の意識改革などに取り組む必要がある。

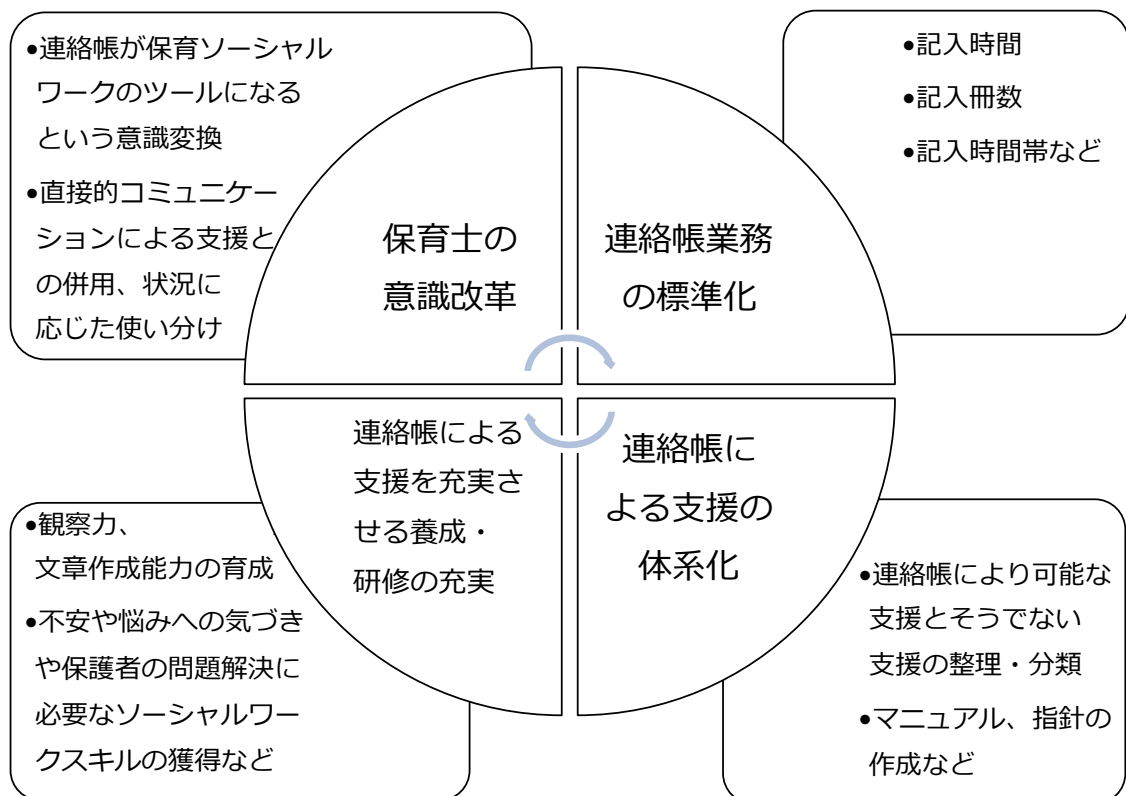


図 終章—2 連絡帳による保護者支援をより充実させていくための取り組み

目次

序章	1
第1節 本研究の背景	1
1. 「保護者支援」概念の誕生	1
2. 「保育ソーシャルワーク」概念の誕生	2
3. 問題の所在	4
4. 期待される役割と現場実践にギャップが起こる原因の整理	6
第2節 本研究の視点および目的	7
第3節 基本概念の定義	10
1. 保護者支援	11
2. 保育ソーシャルワーク	11
3. 連絡帳	13
4. 本研究における保護者支援、保育ソーシャルワーク、連絡帳の関係性	13
第4節 本論文の構成	14
第1章 保育士に求められる「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」	16
第1節 保育所保育指針における位置づけ	16
1. 保育所保育指針における保護者支援の位置づけ	16
2. 保育所保育指針における保育ソーシャルワークの位置づけ	16
第2節 保育士養成カリキュラムにおける「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」 の位置づけ	19
1. 保育士養成カリキュラムにおける「保護者支援」の位置づけ	19
2. 保育士養成カリキュラムにおける「保育ソーシャルワーク」の位置づけ	19
第3節 先行研究に見る視点・論点の推移	21
1. 保護者支援の研究における全体的な傾向の把握	21
(1) 保護者支援研究における全体的な傾向の把握	21
(2) 保育領域における保護者支援研究の概要	22
(3) 「保育所」「保護者支援」研究に関する視点や論点の推移	23
2. 「保育ソーシャルワーク」に関する研究の動向	27
(1) 保育ソーシャルワーク研究における全体的な傾向の把握	27
(2) 「保育」「ソーシャルワーク」研究に関する視点や論点の推移	28

第2章 連絡帳をツールとした保護者支援、保育ソーシャルワークの可能性	33
第1節 連絡帳に着目した理由	33
第2節 保育所保育指針における位置づけ	33
第3節 先行研究に見る連絡帳活用の可能性	35
1. 連絡帳の研究における全体的な傾向の把握	35
2. 保育領域における連絡帳研究の概要	36
3. 保育士—保護者間の関係性に焦点化した研究	36
第4節 まとめ	42
第3章 連絡帳に対する保育士の意識調査	43
第1節 研究の目的	43
第2節 調査方法	43
第3節 調査結果	44
1. 調査を行った保育所について	44
2. 回答者の属性について	44
3. 日常的なコミュニケーションについて	44
第4節 まとめと考察	56
1. まとめ	56
2. 考察	57
第4章 連絡帳における保護者支援の実態調査～記述内容に関する分析を通して～	59
第1節 研究の目的	59
第2節 研究の概要	59
1. 調査対象	59
2. 倫理的配慮	60
第3節 調査結果	62
1. 記述文字数	62
2. 記述内容のカテゴリー分類	67
3. 保育士—保護者間の応答性	70
4. 保育ソーシャルワークのツールとしての連絡帳による支援	74
第4節 まとめと考察	87
1. まとめ	87

2. 考察	88
第5章 保護者支援の前提となる保育士—保護者間のコミュニケーションの現状	91
第1節 研究の目的	91
第2節 研究の概要	91
第3節 研究結果	92
1. 分析1の調査結果	92
2. 分析2の調査結果	108
第4節 まとめと考察	112
1. まとめ	112
2. 考察	114
終章	116
第1節 連絡帳を活用した保護者支援の可能性に関するまとめ	116
第2節 総合的考察	117
1. 第3章の考察	117
2. 第4章の考察	117
3. 第5章の考察	117
4. 総合的考察	118
第3節 文字を媒体とする支援の限界	120
第4節 本研究の限界と今後の課題	121

序章

第1節 本研究の背景

1. 「保護者支援」概念の誕生

保護者支援、子育て支援など、子育てに関わる保護者もしくは家族を援助するという概念が新しく誕生したのは1990年代である。1980年代ごろから子育ての孤立感や子育て不安の高まりが問題視されるようになったが、それは核家族化が進行した結果、家庭における子育てに関する経験や知識の不足によって引き起こされたものであった。その影響が少子化現象につながり、「1.57ショック」を契機に国が本格的に少子化対策を始め以降、この保護者支援は重要なキーワードとなっている^①。

このような時代の変化を受け、子育てに関する専門性を持ち、子どもや保護者の最も身近に位置する保育所や保育士に保護者支援の役割や機能が期待されるようになった。この新しい役割が、いかに急速に保育士や保育所に課せられたかが表 序章-1にも表れている。

表 序章-1 保育士が保護者支援を担うまでの流れ

1997年	<u>児童福祉法改正</u> 「保育に関する相談に応じ、助言を行うこと」が “努力義務”に（第48条の2）
2000年	<u>保育所保育指針改訂</u> 保護者に対する子育て支援・助言指導に対して“積極的な取り組み” が求められた
2003年	<u>児童福祉法改正</u> 「保護者への保育に関する指導」を 保育士の“業務”として新たに追加
2008年	<u>保育所保育指針 第3次改訂</u> 「地域の子育て支援」は保育所の 役割 であると明記

※筆者作成

まず保育士の根拠法である児童福祉法において、1997(平成 9)年の改正の際、「保育に関する相談に応じ、助言を行うこと」が努力義務として位置づけられた。その 3 年後に保育所保育指針の改定が行われたが、“努力”から“積極的”へと、取り組むべき姿勢が強まっている。それからわずか 2 年後の 2003(平成 14)年の児童福祉法改正の際には、保育士の業務内容として「保護者への保育に関する指導」が業務の一つとして正式に位置づけられている。

児童福祉法が制定された翌年の 1948(昭和 23)年の保育士養成課程(当時は保母)の整備から 70 年弱、さらに遡ると明治時代に日本で初めての保育所が誕生して 150 年弱という長い保育士の歴史の中で、保護者支援という新たな業務が加わるまでの期間はわずか 5 年である。後述するように、先行研究にもその戸惑いや困惑が表れている。

2. 「保育ソーシャルワーク」概念の誕生

保育所や保育士が保護者支援を担うことになったと同時に相次いで改定された保育所保育指針解説書と保育士養成カリキュラムの改定内容から、保護者支援を行うにあたってはソーシャルワークの理論を用いると概ね理解されている²⁾。

具体的には保育士の業務内容である「児童の保育」の部分がケアワークにあたり、「児童の保護者に対する保育に関する指導」の部分がソーシャルワークであると解釈される。両者は並列で規定されているものの、保育士は主要な業務としてケアワークを行いながら、状況に応じてソーシャルワークを担う。

このような経緯から、保育とソーシャルワークという言葉から成る保育ソーシャルワークが生まれたわけであるが、大きく「保育所で行われるソーシャルワーク活動」と「保育士が行うソーシャルワーク活動」の 2 通りが考えられる。保育ソーシャルワークの定義については、第 1 章にて詳しく述べる。

しかし本来、保育とソーシャルワークは、同じ福祉職としてクライアントの自己実現をめざす点など共通点も多いものの、それぞれ別の学問基盤、専門性を背景にした資格、職名などを持つ(表 序章-2 参照)。保育業務のメインとなるケアワークが「子どもの日常を基盤とする生活そのものへの支援・援助をはかる」のに対し、ソーシャルワークは「子どもを巡る諸問題・諸課題に対して、その社会的背景や原因を究明し、その解決・緩和をはかる」ものであり、アプローチも異なる。

実際、保育士と同じくケアワークを担う介護福祉士は、働く機関や施設内にソーシャ

ルワーカーが配置されていることがほとんどであるため、二つの役割を同時に求められることはない。対照的に多くの保育士が働く保育所においては、配置すべき職種や職員数を定めている「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」にソーシャルワーカーは存在しない。実質的にソーシャルワークを担う存在が保育士以外にないゆえに、保育士がソーシャルワークも担わざるをえない状況が作り出されているのである。

表 序章－2 保育とソーシャルワーク

	保育	ソーシャルワーク
専門性	保育	福祉
職名	保育士	ソーシャルワーカー
資格	保育士	社会福祉士
根拠法	児童福祉法	社会福祉士及び介護福祉士法
業務内容	専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うこと	身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連絡及び調整その他の援助を行うこと
アプローチ	ケアワーク(養護を基盤とした教育・保育)	ソーシャルワーク
従事する領域	児童	児童・高齢・医療・障害・司法など
目的	子どもの最善の福祉	人間の福利(ウェルビーイング)の増進

※筆者作成

※子どもの最善の利益は、保育所保育指針における保育所保育の目的の中で言及されている

このように保育とソーシャルワークという言葉から成る保育ソーシャルワークが生まれたわけであるが、「この十数年、保育所によるソーシャルワーク、あるいは保育士によるソーシャルワーク(以下、総称として保育ソーシャルワークと記載)に関する研究が蓄積」されてきたとする鶴・中谷・関川(2016)の表現にもあるように、ソーシャルワークが行われる領域を意味する前者と、その役割を担う職種を意味する後者の、大きく2通りの考え方がある。

なお、ケアワークとソーシャルワークの関係については、土田(2006)による保育ソーシャルワークについての各論点(表 序章 - 3)からも分かるように、当初からケアワーク

がソーシャルワークの一部である、反対にケアワークとソーシャルワークは専門性が異なるなど、諸論が見られている。本論文においては、養護を基盤とした教育である保育をケアワークとし、ソーシャルワークとは分けて捉える立場をとる。保育士が行うソーシャルワークについては後述する。

表 序章-3 保育ソーシャルワークについての各論点

	石井哲夫	民秋 言	野澤正子	網野武博	山本真実	柏女霊峰
保育ソーシャルワークの主体	保育士	園長,主任保育士	社会福祉士資格をもった保育士	社会福祉士資格をもった保育士	ソーシャルワーカー	家族ソーシャルワーカーが、地域単位で実施
ケアワークとの関係	ケアワーク自体がソーシャルワークの一分野、ケアワークの基盤の上でソーシャルワークが可能	ケアワークとソーシャルワークは異なる専門性であるが、研修によりケアワーカーがソーシャルワーク技術を習得することが可能	保育技術は、音・図・体の保育技能を手段としてもつ。ソーシャルワーク技術とケアの技術という二重構造をもった援助体系	保育士のソーシャルワーカーとしての基盤整備は進んでいるが、ソーシャルワークとケアワークの専門性は異なる	ソーシャルワークとケアワークの専門性は異なる	ソーシャルワークとケアワークの専門性は異なる
保育士の位置づけ	ソーシャルワークの一部である、児童の生活実態を理解するケアワークを実施	現状の保育士の専門性に加え、研修によりソーシャルワークの技術を習得	ソーシャルワークを実施するには、保育士が社会福祉士の資格をとることが望ましい	一般保育を行う保育士と社会福祉士資格をもちソーシャルワークを実施する保育士	今後は対人援助職として地域子育て支援の主体となることが望まれるが、ソーシャルワーカーとはいえない	子育て支援の担い手、地域と連携して、子育て環境の改善に努める
保育士の実施するソーシャルワークの機能	個人と社会との適切な結びつきを形成する	社会福祉援助技術を用いた援助	子ども・保護者・保育者のトライアングル関係を基に社会福祉援助を行う	問題をもった保護者への支援・問題をもった児童へのトリートメント・保護者に対する相談・援助	地域子育て支援	保育士に求められるのは、子育て支援(ソーシャルワーク)ではない

出典：土田美世子「エコロジカル・パースペクティブによる保育実践」ソーシャルワーク研究第31巻第4号より引用、2006年、35頁

3. 問題の所在

前述したように、保育士は時代や社会の変化に大きく影響を受け、従来の保育に加えて保護者支援という新たな役割が課せられることになった。加えて、ソーシャルワークという、自らの専門性とは異なる専門的知識や技術を用いながら実践を行うことは容易でなく、期待される役割と現場実践にギャップが生じていることは、ある意味で当然の帰結といえる。

以下では、先行研究における指摘について述べた後、ギャップが生じる要因の分類・整理を行う。

大津(2010) は、児童福祉施設入所児が抱える問題の多様化、さらに障害児保育、長期療養が必要とされる子どもの保育など、保育士に求められる専門性が高度化・多様化

しているにもかかわらず、保育士不足が大きな問題となっていることを指摘している。宮里(2008)も、各保育施設において既に子育て支援は積極的に取り組まれているが、保育所保育指針が求めている「地域における支援機能(保護者への直接支援、保護者の組織化に向けた支援、地域における子育て家庭への他機関連携による包括支援)」については、特に課題が多いことを示唆している。一方で望月ら(2008)の子育て中の父親・母親に行った調査によると、「母親の約40%、父親の約30%が、保護者と保育者が落ち着いて話せる場所と時間を確保できるように改善すべきである」と感じている、というように、保護者が保育所へ保護者支援に関するニーズを抱いている実態を明らかにしている。

これらの隔たりを生み出しているのは、保育所の設備面や保育士不足等の問題も大きいものの、一方で保育士自身の意識や取り組み方との指摘もある。鈴木敏彦・横川(2010)は、保育所保育士の保護者支援のマインドの高さと保育所保育指針が求める支援が、内容によっては必ずしも噛み合っておらず、保護者に対する保育指導については、児童福祉法に定められた保育士の業務であるのにもかかわらず、その認識や取り組みには保育士によって温度差があるとしている。また土田(2010)の研究からも、保育所保育士にアンケート調査を行った結果、「子育て支援に保育所が積極的に関わるべきである」という設問に「そう思う」「思う」と回答している保育士が9割を超える一方、「地域の保育に欠ける子どもを見つけて援助したことがない」と回答している保育士が6割弱と、理念と意識・実行面が一致していないことをうかがわせる結果となっている。つまり地域子育て支援・保護者支援・他機関との連携の必要性について、理念としては保育所の役割と捉えているが、実際に対応する段階の意識・実行面では揺れがあることを示唆している。さらに「複雑な問題を抱えた保護者への支援は所長(園長)の役割である」と考えている保育士が8割を超え、保育士は実際に日々保育で接する子どもの支援である「保育所内の保育業務」を保育所の役割としてより強く意識していることも明らかとなった。

ただし、それは保育士として働く前段階である保育士養成課程カリキュラムに関連があるとするのが高野(2013)である。高野は先行研究において様々に取り上げられている保育ソーシャルワークに関する知見の整理・分析を行い、養成課程において「習得しうる内容と確保できる時間数が必ずしも十分といえない」と質的、物的な問題があるとしている。

一方で、原因が保育士側だけにあるのではないという見方もある。山本(2014)は保育所において特別な配慮を必要とする子どもと保護者への支援をめぐる地域連携に関する

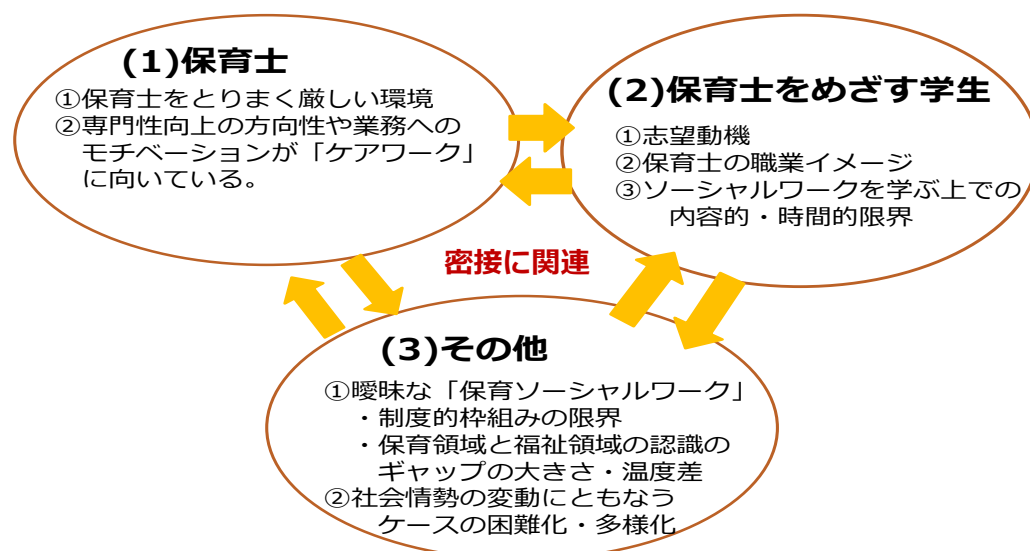
研究の文献レビューを行う中で、「多様な支援ニーズに保育士の持ちうる専門性によって対応を図ることは極めて困難」としている。つまり、子どもや保護者、家庭が抱える問題は、もはや保育所だけで支援が完結できるレベルを超えており、「保育所側の力量の形成に期待するのみ」ではなく、むしろ外部機関と連携するための仕組みや人材の検討が課題として挙げられている。

このように様々な要因が影響し、保育士や保育所に課せられたソーシャルワークに対する現場の戸惑いは、今なお続いていると推察される。

4. 期待される役割と現場実践にギャップが起こる原因の整理

前項で述べた先行研究に加え、筆者がこれまで行ってきた研究を通して、保育所や保育士に期待される役割と現場実践にギャップが起こる原因について、大きく(1)保育士、(2)保育士をめざす学生、(3)その他の領域に分類し、領域ごとに原因の整理を行った。

(図 序章－1 参照)



出典：日本保育ソーシャルワーク学会編『保育ソーシャルワークの世界—理論と実践』
2014年、113頁を加筆・修正

図 序章－1 保育士に期待される役割と現場での実践にギャップが生じる原因

ギャップが生じる原因として、(1)保育士の領域では、①保育士をとりまく厳しい環境が最も大きな要因の一つに挙げられる。解消の見通しがたない待機児童問題や保護者

側のニーズがますます多様化する一方で、厳しい労働条件や高い離職率により、保育現場は慢性的に人手不足の状態が続いている。そのような中で、ケアワークに追われ、ソーシャルワーク業務に取り組む余裕がないのが現状である。また②保育士にとって専門性向上の方向性や業務へのモチベーションがケアワークに向いていることも根強い。そのことは(2)学生の領域とも深く関連しており、既に保育士をめざす学生の段階から、①志望動機、②保育士の職業イメージがケアワークの部分に大きく偏っていることと大きな関連がある。さらに、保育士養成カリキュラムの中で、ソーシャルワークに関する学びも、内容的・時間的に限界があり、保育ソーシャルワークに関する具体的イメージが持てないまま養成課程を終えるので、保育現場においてもソーシャルワーク実践が行えないという連関があると予想される。この点については、次章で述べる。

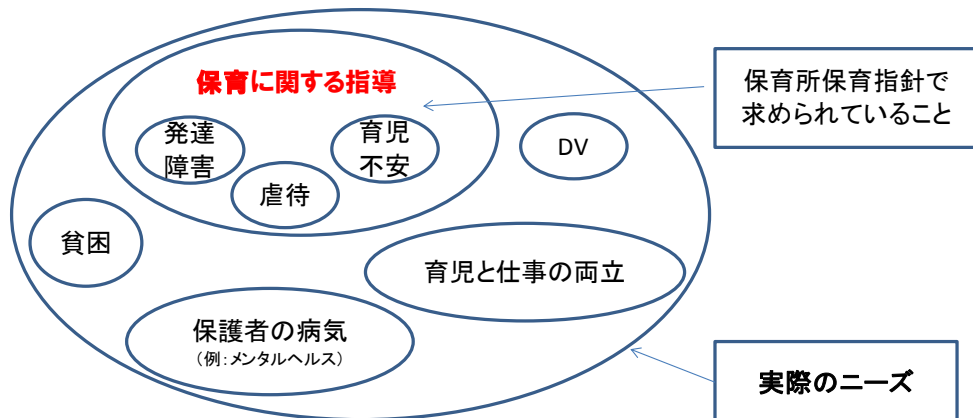
その根底にあるのは、(3)その他で挙げた、①曖昧な保育ソーシャルワークであると考えられる。この点についても次章で詳しく述べるが、保育士がソーシャルワークを行う根拠となる保育所保育指針解説書において、保育ソーシャルワークは極めて曖昧な表現にとどまっているために、現場での具体的な実践に結びつかず、保育士養成教育におけるソーシャルワークの教授内容も明確化できないという悪循環が起こっている。

その他の領域で挙げたもう一つの要因は、②社会情勢の変動ともなうケースの困難化・多様化である。これだけは、これまでの要因とは性質が異なる。つまり保育士や保育士養成という支援者側の理由ではなく、支援を受ける側、社会の側の要因といえる。

そもそも保育士に求められているのは「保育に関する」指導である。しかし、保護者が抱える問題は、もっと広範であり、むしろ図 序章-2 のように子どもの問題ではなく、「保育に関しない」問題、つまり保護者自身の問題が子育てに重大な影響を与えていることも少なくない。いいかえれば、そもそも制度が想定していないニーズにこたえることは保育士には困難である。

第2節 本研究の視点および目的

そこで本研究では、「保育現場で行う保護者支援を保育士のみで担うことには限界がある」という視点のもと、具体的には、就学期で急速に導入が進みつつあるスクールソーシャルワーカーのように外部専門職が保育現場に入り、保育ソーシャルワーカーとして



出典：日本ソーシャルワーク学会編『保育ソーシャルワークの世界—理論と実践』
2014年 114頁

図 序章－２ 保育所保育指針で求められている保育士の関わる範囲と実際のニーズとのギャップ

保育士との協働体制を構築して保護者支援を行うことが現実的かつ有効なアプローチであると考えている。その場合、保育士がどのような役割・業務を担うべきかを具体的に考える必要があり、保育士にしかできない“固有性”“専門性”を持つもの、加えて保育士にとって取り組みやすく、負担を感じにくい役割を探ることを研究の目的としている。

中村ら(2012)は、医療や福祉、教育、作業といった様々な領域において他職種や同職種との「連携」「協働」は非常に重要視され、それらをキーワードとした研究論文が数多くあるにもかかわらず、共通の定義や概念が定着していないとして概念整理を行った(表序章－３参照)。

先駆的に概念整理を行った Germain(1984)以降、Andrew(1990)、渋谷(2002)、津川・岩満(2011)など、様々な論者による定義づけが行われているが、表現は異なるものの、互いの役割を考える上で専門性を活かした役割分担が重要であることを複数の研究者が論じている。

表 序章-4 「コラボレーション」の定義・概念

Germain (1984)	協働とは、単独の分野(あるいは個人)だけでは達成できないあるいは充分には達成できないヘルスケアに関連した特定の目標や職務を遂行するために、二つあるいはそれ以上の分野(また、場合によっては同じ分野の二人あるいはそれ以上の個人)がコミュニケーション、計画、行動を交換する交換する協力的プロセスである (p.199)
Andrew (1990)	専門職間連携は、異なった専門職が共通の目標を達成するために、独自の知識・技術・組織の展望・個人的態度を駆使して問題解決を行う時に起こる。(pp.175-176)
Abramson& Rosenthal (1995)	多様だが各自自立した行為者(組織あるいは個人)で構成されたグループが、共同主導権を持ちながら、共有された問題を解決するあるいは共通の目標を達成する流動的なプロセスである。(p.1479)
Hayes.R.L. (2001)	コラボレーションの定義は、お互いが利益を得ることを目的として、相異なる組織に属する個人が親密に交わること。 コラボレーションの基本的要素 1.相互性(mutuality), 2.目標の共有(Shared Goals), 3.リソースの共有(Shared Resources), 4.見通しを持つこと(Perspective Taking), 5.対話の発展(Ongoing Dialogue)(p.108)
亀口 (2002)	所与のシステムの内外において異なる立場に立つ者同士が、共通の目標に向かって、限られた期間内にお互いの人的・物的資源を活用して、直面する問題の解決に寄与する対話と活動を展開すること(p.7, l.21)
渋沢 (2002)	コラボレーションについて、「協力」は、専門家、あるいは組織がそれぞれ個別の目標を達成するために他の専門家あるいは機関と共同で作業をすることを意味し、コーディネーションは、職種・組織間で情報を交換しあい、作業を計画することを示すとし、コラボレーションは、協力とコーディネーションの延長にあるもの。 コーディネーションの要素 1)共通の目標の設定と同意, 2)目標達成の責任の共有, 3)それぞれの専門知識を駆使して一緒に作業することである(p.271, l.5)
藤川 (2007)	コラボレーションとは、異なる専門分野が共通の目標の達成にむけて、対等な立場で対話しながら、責任とリソースを共有してともに活動を計画・実行し、互いにとって利益をもたらすような新たなものを生成していく協力的行為であると定義することができる。(p.18, l.22) 〔援助活動の主体〕 援助チームのメンバー(対人援助の専門家、時に利用者自身や非専門家) 〔援助活動の内容〕 チームで利用者に対する援助の目標と計画を立て、メンバー間で相互にコンサルテーションをしながら、それぞれのメンバーが利用者に対して直接的援助を行う。 〔援助目標と援助計画の形成のしかた〕 チームのメンバー間で形成され、共有される。 〔援助活動の責任〕 チームが追う 〔援助活動のリソース〕 チームのメンバーが持つリソースの共有。

野坂 (2008)	コラボレーション(collaboration)とは、複数の主体が何らかの目標を共有し、どちらが上でも下でもない関係の上で、双方がエンパワーされた状態でなされる活動を言う。(p.192, l.2)
吉池・栄 (2009)	「協働」とは、同じ目的をもつ複数の人及び機関が協力関係を構築して目的達成に取り組むこと。
津川・岩満 (2011)	多職種による協働とは、①例えば、精神科であれば、医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、臨床心理士など、がん治療であれば、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、臨床心理士など、多職種でチームを構成する。②チームとしての共通の目標に向かって、各職種がそれぞれの専門性をもって、お互いに連絡をとりながら、患者を治療、援助する。(p.763, l.5)

出典：中村・岡田・藤田「『連携』と『協働』の概念に関する研究の概観」

鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要(7)より引用

2012年,10頁

そこで本研究においては、保育ソーシャルワーカーとの協働体制を前提とした上で、保育士にしかできない“固有性”“専門性”を持つもの、加えて保育士にとって取り組みやすく、負担を感じにくい役割の一つとして連絡帳に焦点をあて、保護者支援や保育ソーシャルワークのツールとして意味づけを行い、保護者支援に活用できる可能性を検討することを目的とする。

連絡帳は、既に保育現場において保育業務の一部として長らく、そして広く実施されているものであるため、新しく業務が増えるということもなく負担は増さない。記入にあたっては、経験年数を問わず、新人からベテラン保育士まで広く関わりのある業務である。このように保育士の負担、実施されている度合の高さ、そして業務に関わる人数の多さを考えた際、保護者支援や保育ソーシャルワークの観点から、連絡帳に新たな意味づけを行い、捉え直すことは、保育士の業務改善および保護者支援の質的向上に大きくつながると考えた次第である。この点については第2章において詳述する。

第3節 基本概念の定義

本研究においては、保護者支援、保育ソーシャルワーク、そして連絡帳が主要なキーワードとなる。次章以降でそれらの概念について様々な観点から詳述するものの、以下では語句の説明と互いの関係性を簡単に述べる。

1. 保護者支援

児童福祉法によると、保育士の行う保護者支援とは「児童の保護者に対する保育に関する指導」を意味し、保育所保育指針解説書では「子どもの保育の専門性を有する保育士が、保育に関する専門的知識・技術を背景としながら、保護者が支援を求めている子育ての問題や課題に対して、保護者の気持ちを受け止めつつ、安定した親子関係や養育力の向上をめざして行う子どもの養育(保育)に関する相談、助言、行動見本の提示その他の援助業務の総体」と規定されている。つまり、その根底に保育の専門性を活かした支援であることが求められている。

ただし本研究における保護者支援は、さらに概念を拡大し、保育所保育指針で求められている「保育に関する指導(保育指導)」に加え、第1節で述べたように、図2における「実際のニーズ」部分、つまり保護者や家庭が抱える生活問題に対するソーシャルワーク対応までも含めたものと定義する。

2. 保育ソーシャルワーク

保育所保育指針解説書の中に「保育所においては、子育て等に関する相談や助言など、子育て支援のため、保育士や他の専門性を有する職員が相応にソーシャルワーク機能を果たすことも必要となります」という文言があること、また保育士養成カリキュラムにおいて保護者支援を行うために「相談援助」「保育相談支援」という科目が位置づけられていることから、保育士が保護者支援を行う際の理論的枠組みとしてソーシャルワークが用いられると解釈されている。

保育ソーシャルワークの定義については、保育・ソーシャルワーク関係者の間で一致した見解はなく、表 序章-5のように、様々な捉え方がある。保育ソーシャルワークを二つの立場から整理している鶴(2009)によると、表中の第一の立場は、「保育所における実践全体、あるいは実践そのものをソーシャルワークとして捉えようとする立場である。つまりソーシャルワークの視点や方法から保育を捉え直す立場である」。第二の立場とは、「保育分野におけるソーシャルワークという立場である」という。

第一の立場の中で、さらに限定して保育士が担うことが前提とされている場合を見ると、伊藤(2012)や山本(2014)の定義からも分かるように、ソーシャルワークそのものではなく、ソーシャルワークの「応用」をさしている。さらに鶴(2009)自身も、保育ソーシャルワークを狭義と広義に分け、保育指導の際に「部分的にはソーシャルワークを担

っている」役割を狭義の保育ソーシャルワークとしている。そこで本研究においても、保育士が保護者支援の一つとして連絡帳を活用する場合のように、筆者が保育士が行うソーシャルワークを意味するときは、第一の立場の中でもさらに狭義の視点となる、「ソーシャルワーク的支援」という表現を用いる。

ただし、本研究において出発点となっている「保育士と他職種の協働体制の構築」を考えた際、保育ソーシャルワークの主体は保育士に留まらない。鶴による「広義の保育ソーシャルワーク」が想定する「子どもを取り巻く環境全体、あるいは保護者のもつ社会関係も視野に入れ、それらを対象とした援助」を行う際は、保育士が中心的役割を果たしつつ、他職種の協働体制の中で、両者の専門性を発揮しながら、子どもや保護者、家庭の抱える問題に広く対応することをイメージしている。

表 序章-5 保育ソーシャルワークの定義

保育ソーシャルワークの定義の一例

論者	保育ソーシャルワークの定義	
日本保育ソーシャルワーク学会 ホームページ	子どもの最善の利益の尊重を前提に、子どもと家庭の幸福(ウェルビーイング)の実現に向けて、保育とソーシャルワークの学際的領域における新たな理論と実践	
伊藤良高(2012)	子どもと保護者の幸福のトータルな保障に向けて、そのフィールドとなる <u>保育実践及び保護者支援・子育て支援にソーシャルワークの知識と技術・技能を応用しようとするもの</u>	第一の立場
山本佳代子(2014)	子どもに対する <u>日常の保育、子どもの保護者への支援等においてソーシャルワークを応用した実践</u>	
櫻井慶一(2016)	児童及びその保護者等を対象に、保育士等により保育所や子育て支援センター等を基盤として行われる総合的な自立支援をめざす福祉的活動	
倉石哲也(2008)	保育ソーシャルワークを「保育における社会福祉援助技術」として、①すべての子育て家庭を対象とし、②子育て家庭で起きる子育てに関する心理的・社会的諸問題について、③保育所、子育て支援センターなどの児童福祉施設が中心となり、④多様な保育および子育て支援活動を通して、⑤同時に地域社会に子育て環境づくりを広めながら、⑥問題の解決、軽減および予防を目的として行われる	
伊藤利恵・渡辺俊之(2007)	子どもの福利のために児童福祉政策があり、そこには「子どもの保護者への保育に関する相談・助言」が明示されている。そして、それに基づく社会福祉援助活動の実践として家族支援があり、保育ソーシャルワークとはその総称	第二の立場
柏女霊峰(2009)	個別援助活動、社会資源の開発、福祉的地域社会作りの3つがソーシャルワーク援助のポイントとなります。いわゆる保育ソーシャルワークは、その一連の活動を保育分野において行うもの	
鶴宏史(2009)	保育指導は保育技術を基盤とした専門性に基づいており、子ども-保護者の関係性を対象とした援助であるが、部分的にはソーシャルワークを担っていると考えられ、 <u>狭義の保育ソーシャルワーク</u> といえる。一方、 <u>広義の保育ソーシャルワーク</u> は、子ども-保護者のみならず、子どもを取り巻く環境全体、あるいは保護者のもつ社会関係も視野に入れ、それらを対象とした援助が想定される。	

出典：日本保育ソーシャルワーク学会「初級保育ソーシャルワーカー養成研修2016(平成28)年12月3日(近畿地区)資料」
(作成者は鶴宏史氏)に、筆者が鶴(2009)の引用及び各論文等の刊行年、本文中の下線などの加筆を行った

3. 連絡帳

本研究において、保護者支援、保育ソーシャルワークのツールという新たな意義づけにより、捉え直しを試みる連絡帳には、明確な定義が存在するわけではない。「保育園では昔から、口頭でのやりとりの不足を補うために連絡帳が活用されてきた」(二宮,2010)と、補助的なツールとして捉えられることが多かった。しかし実際には、日本保育協会が2000(平成12)年に行った「保育所における家庭保護者との連携に関する調査研究報告書」において「家庭・保護者との連携で重視していること」として連絡帳を選択した回答が74.3%と最も多かったことや、「保育士と保護者の親睦を深める場」、「用途は多岐にわたる」(西脇,2006)とあるように、「保育者と保護者を結びつけ、相互の情報の共有を図る重要で、もっとも活用されてきたツール」(剣持,2005)であり、保育現場における連絡帳の存在は非常に大きいと考えられる。

4. 本研究における保護者支援、保育ソーシャルワーク、連絡帳の関係性

これまで述べてきたように、保護者支援の方法としてソーシャルワークの手法が取り入れられていることを考えると、保護者支援という概念は保育ソーシャルワークを内包する。さらに本研究の目的は、連絡帳を保護者支援、保育ソーシャルワークを行う際、実際の支援ツールとして活用する可能性を探ることにあるため、これらの関係性を表すと、図 序章-3の通りとなる。

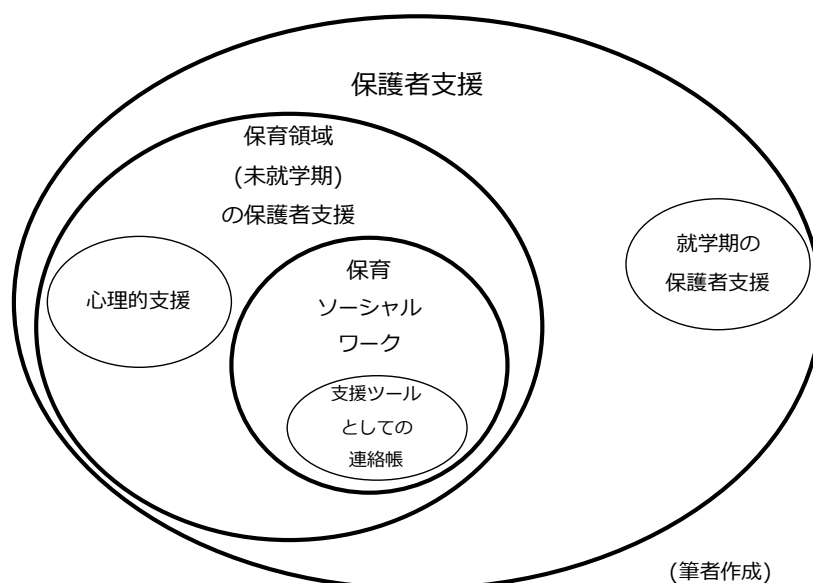


図 序章-3 各概念の関係性

第4節 本論文の構成

本論文は、以下の6章から成る。

第1章では、「保育士に求められる『保護者支援』『保育ソーシャルワーク』」という、本研究の主要なキーワードとなる二つの概念について、制度上の枠組みやこれまでの研究における位置づけなどを確認した。

第1節で保育所保育指針における位置づけ、第2節で保育士養成カリキュラムにおける位置づけを確認した。第3節では、先行研究において、どのような視点や論点で研究が行われてきたかの推移について整理・概観した。

第2章では、「連絡帳をツールとした保護者支援、保育ソーシャルワークの可能性」として、本研究のメインのテーマとなる連絡帳について、前章と同様に整理・概観を行った。

第1節では、連絡帳に着目した理由として、保育の専門性を活かした、保育士にしかできない保護者支援とは何かを考えた際、現状での加重的な勤務負担を強いられている保育士の負担感をこれ以上増さないという観点から、保育業務の一環として行われている連絡帳に着目した理由をはじめ、連絡帳を活用する上でのメリットをいくつか挙げた。

さらに前章同様、第2節で保育所保育指針における位置づけを確認し、第3節で先行研究においてどのような視点や論点で研究が行われてきたかの推移について整理・概観した。

第3章では、「連絡帳は保護者支援のツール、保育ソーシャルワークのツールとして活用できる可能性がある」との仮説を検証すべく、①連絡帳の記入業務についての実態、②連絡帳に対する保育士の意識、③連絡帳の記入内容におけるソーシャルワーク機能について明らかにすべく、保育士を対象としたアンケート調査を行い、結果について分析した。

第1節で研究の目的、第2節で研究の概要を述べた後、第3節で調査結果を述べ、まとめと考察を行った。

第4章では、保育士が連絡帳を通じて行っている保護者支援、保育ソーシャルワークの実態把握を行うために、実際の連絡帳の自由記述についての分析を行った。

具体的には、①記述文字数、②記述内容のカテゴリ分類、③保育士と保護者の応答率、④記述内容におけるソーシャルワーク的関わりの有無の四つについて明らかにした。

第1節で研究の目的、第2節で研究の概要を述べた後、第3節で調査結果を述べ、ま

とめと考察を行った。

第5章では、直接的なコミュニケーションに焦点をあて、保護者を対象に行ったアンケート調査を検証することで、保育現場におけるコミュニケーションの現状を明らかにし、連絡帳による文章を通じたコミュニケーションとの関係について検討を行った。

前章同様、第1節で研究の目的、第2節で研究の概要を述べた後、第3節で調査結果を述べ、まとめと考察を行った。

最後に終章として、第3章、第4章、第5章の調査結果の総合的考察を行った後、連絡帳が支援のツールとして活用できることが明らかとなった一方で、文字を媒体とする支援の限界があることなどを述べた後、本研究の限界と課題として連絡帳を保護者支援のツールとして具体的に活用するための取り組みなどについて述べた。

<注>

- (1) 保育士及び保育所が家庭や保護者を支える役割は、歴史的に行われてきた。ただし、業務の一部と位置づけられていたわけではない。本論文で扱う保護者支援は、制度的位置づけのもとに行われ、保育士の意識等も異なるため、「新しい概念」とした。
- (2) 『『保育カウンセリング』や『保育ソーシャルワーク』という形で保護者支援の概念や方法が導入され、研究が蓄積されてきた』（鶴 2009）との言葉にもあるように、保育士が保護者支援を行う際、応用・援用する理論は、厳密に言えば、ソーシャルワークのみではないが、本論文においては、ソーシャルワークに限定して論を進める。

第1章 保育士に求められる「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」

第1節 保育所保育指針における位置づけ

1. 保育所保育指針における保護者支援の位置づけ

保育所保育指針において保護者支援に関連する言及が見られるのは、1999(平成 11)年の改訂以降である(表1-1参照)。「第13章 保育所における子育て支援及び職員の研修など」の項に、相談援助実践の必要性や、ソーシャルワーク理論を用いたコミュニティワークを示唆する内容が示されている。続く2008(平成20)年の改訂では、「第6章 保護者に対する支援」が独立した章として位置づけられ、保護者支援が保育所と保育士の役割であることを明確にした。また支援の対象も地域の子育て家庭だけでなく、本研究が対象とする入所児童の保護者も含まれた。さらに2008年の改訂以降、局長通知から厚生労働大臣による告示となり、法令としての意味合いを持つ。児童福祉法の規定と合わせ、保育士は制度的な枠組みとして保護者支援を担っていることがわかる。

2. 保育所保育指針における保育ソーシャルワークの位置づけ

保育所保育指針の中にソーシャルワークの語句は見られない。ただし、保育所保育指針解説書において、見出しやタイトルを含めて12箇所見られる(表1-2参照)。

「相応にソーシャルワーク機能を果たす」、「理解を深めたうえで援助を展開」「ソーシャルワークの知識や技術を一部活用」、「ソーシャルワークやカウンセリング等の知識や技術を援用」、「ソーシャルワークの原理を踏まえることは非常に大切」(注：太字、下線は筆者が加筆)という非常に曖昧な表現が並んでいる。上村(2009)は「指針においては既存の保育の枠組みをこえない中(その特性をいかした)で、ソーシャルワーカーの知識・技術を用いた保護者・地域支援を積極的に取り入れていくことをめざすことが強調されているが、実践の場では、誰が、どのようにという部分が曖昧になるのではないかという疑問は残る」としている。井上(2010)も、保育所保育指針や解説書、及びその中のコラムなどを取り上げて分析した上で、「結局、保育士等が、『ソーシャルワークとは?』で示されているソーシャルワーク機能のどの部分を担うのかは不明確なままである」としている。この戸惑いは養成課程においても同様である。ソーシャルワークの「何を」「どこまで」「どの程度」を教えるべきかが定まらないため、教授内容が担当者により専門職として一定の質やレベルを確保することは困難である。

表1-1 保育指針における「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」

時期	保護者支援		保育ソーシャルワーク	その他
	保育指針	保育指針解説書		
1965(昭和40)年 制定				※目次に関連する語句はなし
1990(平成2)年 (2度目の改訂)				※目次「第12章 健康・安全に関する留意事項」中に「8 家庭、地域との連携」
1999(平成11)年 (3度目の改訂)	・相談援助実践の必要性 ・ソーシャルワーク理論を用いたコミュニケーションワークを示唆			※目次「第13章 保育所における子育て支援及び職員の研修など」
2008(平成20)年 (4度目の改訂)	・保育所、保育士の役割として保護者支援を明確化 ・入所している子ども、保護者、地域における子育て家庭を支援対象とする	保護者支援の語句は17箇所(目次含む)	保育指針解説書に「ソーシャルワークの語句」は文中に12箇所(目次含む)	※目次「第6章 保護者に対する支援」(独立した章として位置づけ)

※保育指針に「ソーシャルワーク」の語句はなし

表1-2 保育所保育指針解説書における「ソーシャルワーク」

1	第6章 保護者に対する支援 1. 保育所における保護者に対する支援の基本 (5) 相談・助言におけるソーシャルワークの機能 (目次タイトル)
2	保育所においては、子育て等に関する相談や助言など、子育て支援のため、保育士や他の専門性を有する職員が 相応にソーシャルワーク機能を果たす ことも必要となります。
3	ただし、保育所や保育士は ソーシャルワークを中心に担う専門機関や専門職ではないことに留意し 、
4	ソーシャルワークの原理(態度)、知識、技術等への理解を深めた上で、援助を展開 することが必要です。
5	ソーシャルワークの原理(態度) には、保護者の受容、自己決定の尊重、個人情報取扱いがあります。
6	保育所におけるソーシャルワーク では、一人一人の保護者を尊重しつつ、ありのままを理解し受け止める「受容」が基本的姿勢として求められます。
7	コラム： ソーシャルワークとは (生活課題を抱える対象者と、対象者が必要とする社会資源との関係を調整しながら、対象者の課題解決や自立的な生活、自己実現、よりよく生きることの達成を支える一連の活動をいいます。)
8	保育所においては、保育士等がこれらの活動をすべて行うことは難しいといえますが、これらの ソーシャルワークの知識や技術を一部活用 することが大切です。
9	地域子育て支援においても、 ソーシャルワークの原理 を踏まえることは非常に大切です。
10	保育所における個別的な支援は、個々の保護者の思いや意向、要望、悩みや不安などに対して、保育士が培ってきた知識や技術、保育所保育の専門性を中心としながら行う援助活動です。ただし、その内容によっては、 保育の知識や技術に加えて、ソーシャルワークやカウンセリング等の知識や技術を援用 する必要があります。
11	保護者と子どもとの関係に心を配り、 ソーシャルワークの機能を念頭に置いて 、関係機関との連携のもとに、子どもの最善の利益を重視して支援を行うことです。
12	地域子育て支援においても、 ソーシャルワークの原理を踏まえることは非常に大切 です。

※下線、太字は筆者によるもの

第2節 保育士養成カリキュラムにおける「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」の位置づけ

1. 保育士養成カリキュラムにおける「保護者支援」の位置づけ

保護者支援の概念が出現した 1990 年代以降、保育士が新たに担うことになった役割に関して、保育所保育指針の改定に連動する形で 2001(平成 13 年)、2011(平成 23)年の 2 回に渡り、保育士養成カリキュラムの改定が行われている(表 1-1 参照)。

2001 年の改定では、「家族援助論」が新設され、保育士の役割の拡大に対応するため、家族を取り巻く環境の変化を踏まえ、保育士が保護者支援を行うためのスキルを学ぶ科目が設けられた。

また 2011 年の改定では、児童福祉法第 18 条の 4 における保育士の定義や、保育士に求められる今日的課題などを踏まえ、子どもの保育と保護者支援を担う保育士の専門性について学ぶために「保育者論」が新設された。また家庭や地域などを視野に入れた支援のあり方や支援体制を学ぶ科目となるよう、「児童福祉」を「児童家庭福祉」と科目名を変更している。さらに、家庭や地域などを視野に入れた支援のあり方や支援体制を理解することが必要であるとして、「家族援助論」も「家庭支援論」に科目名が変更されている。

それまでの保育を中心とした学びから、保育士が関わる対象を子どものみならず、保護者や家庭、地域にも広げるための学びへと転換しているのがわかる。

2. 保育士養成カリキュラムにおける「保育ソーシャルワーク」の位置づけ

厚生労働省による会議資料「保育士養成見直しの経緯」(2009)によると、保育士養成課程が 1948(昭和 23)年に開始された時点において、「社会事業一般」「ケースワーク」「グループワーク」がそれぞれ 40 時間設けられていたことからわかるように、専門職としての養成が始まった当初からソーシャルワーク教育は保育士にとって必要な教育内容であると位置づけられてきた経緯がある。

しかしながら 1962(昭和 37)年の改定以降、幼稚園教諭資格の同時取得の流れから、ケアワークに重点がおかれたカリキュラム編成へと変化し、その流れは現在まで続いている。

一方で、保護者支援の概念が出現し始めた 1990 年代以降、保護者支援を行う際に用いるソーシャルワークに関連する科目は 2001(平成 13 年)、2011(平成 23)年といずれも改

定されている(表1-1参照)。

具体的に2001年の改定では、ソーシャルワーク的機能を学ぶために「社会福祉Ⅱ」から「社会福祉援助技術」(2単位90時間)に科目名を変更している。続く2011年の改定では、保育との関連で相談援助の内容について学ぶことが重要であるとして、「相談援助」を演習科目(1単位45時間)、「保護者に対する保育に関する指導」を具体的に学ぶ科目として「保育相談支援」を演習科目(1単位45時間)の二つを設定している。

これらの流れから、2001年の改定ではソーシャルワークに対する学びをより深めるために、2011年の改定では、より保育現場にとって取り組みやすい支援を学ぶために、方向性が変化していることがうかがえる。

表1-3 保育士養成カリキュラムにおける「保護者支援」「保育ソーシャルワーク」の位置づけ

改定年	運動している 保育所保育指針	保護者支援に関する事項	保育ソーシャルワークに関する事項
2001 (平成13)年 改定	1999(平成11)年 の保育所保育指針 の改定と運動	「 <u>家族援助論</u> 」の新設 目的： 家族を取り巻く環境の変化を踏まえ、 保育士に求められる家族援助や保護者支 援のスキルを修得する。保育士の役割の 拡大に対応するため	「 <u>社会福祉Ⅱ</u> 」を「 <u>社会福祉援助技術</u> 」 に科目名変更 目的：ソーシャルワーク機能を学ぶため
2011 (平成23)年 改定	2008年(平成20)年 の保育所保育指針 の改定と運動	「 <u>保育者論</u> 」の新設 目的： 児童福祉法第18条の4における保育士 の定義や、保育士に求められる今日的課 題などを踏まえ、子どもの保育と保護者 支援を担う保育士の専門性について学ぶ ため	「 <u>社会福祉援助技術</u> 」を分割 ① <u>保育相談支援</u> を新設、 ② <u>社会福祉援助技術</u> を <u>相談援助</u> に科目名 変更 目的： ①保育相談支援は「保護者に対する保育 に関する指導」を具体的に学ぶことが重 要であるため ②「相談援助」は保育との関連で相談援 助の内容や方法について学ぶことが重要 であるため
		「 <u>児童福祉</u> 」を「 <u>児童家庭福祉</u> 」に 科目名変更 目的： 児童福祉の増進とともに、児童の家庭を 含めて支援する体制や仕組みが必要とな っているため	
		「 <u>家庭援助論</u> 」を「 <u>家庭支援論</u> 」に 科目名変更 目的： 家庭、地域などを視野に入れた支援のあ り方や支援体制について理解することが 必要となっているため	

※筆者作成

厚生労働省「保育士養成課程見直しの経緯」(2009)、「保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)」(2010)
より抜粋・引用

第3節 先行研究に見る視点・論点の推移

本章では、保護者支援、保育ソーシャルワークに関する先行研究について概観するとともに、その中における本研究の位置づけ、すなわち研究のオリジナリティを明らかにする。まずは一定の手続きや条件のもとに分析対象の絞り込みを行い、研究の発行年(時期)ごとに特徴を見出すこととする。

1. 保護者支援の研究における全体的な傾向の把握

(1) 保護者支援研究における全体的な傾向の把握

国立情報学研究所の論文情報ナビゲーターCiNii(以下、CiNii)を用いて「保護者支援」をキーワード検索した結果、2016(平成28)年11月1日時点で322件が該当した。

論文・研究ノートに分類できない79件を除いた243件について、タイトルに用いられているキーワードから概観したところ、保護者支援に関する論文で一番多かったのは「障害」をテーマにしたものであり、101件で全体の42%を占めた。次に「保育」が62件で26%、「就学期」が13件で6%と続いた(図1-1参照)。

内容として、障害を持つ子どもの保護者など、特定の「対象者」に対する研究をはじめ、本研究と同じく、保育や幼稚園などに見られるような「領域」に関する研究、また食・栄養、虐待や地域、震災など特定の「テーマ」に基づいた研究、また医療や心理、ソーシャルワークなど各「専門職・専門分野」からのアプローチ、そして周産期や就学期、成人期など子どもの「成長段階」に応じた支援に関する研究などが含まれ、実に多様である。

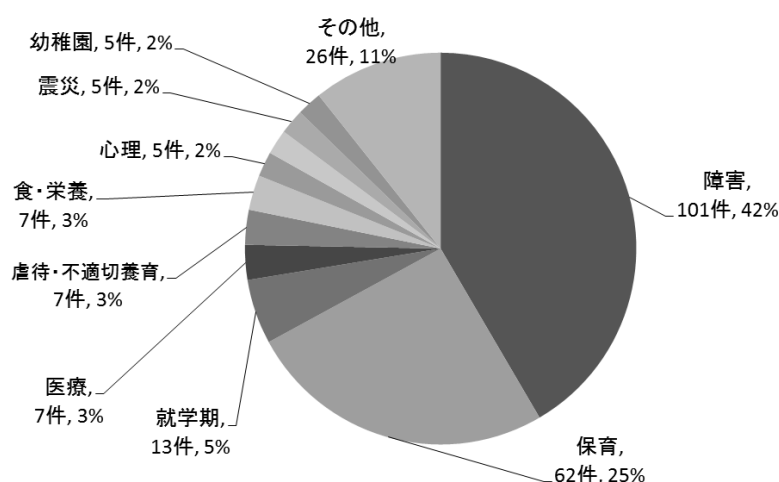


図1-1 「保護者支援」に関する論文の内訳

(2) 保育領域における保護者支援研究の概要

保護者支援に関する研究のうち、さらに「保育所」というキーワードを加えて検索したところ、53 件が該当した。その中から論文や研究ノートでない 11 件を除外した 42 件の内訳と発行年については、表 1-4、図 1-2 の通りである。

前項と同じく、特定の対象者やテーマが取り上げられているほか、養成教育に関するものや文献レビューなども見られる。2004 年と 2007 年の各 1 件を除き、保育所保育指針が改定された 2008 年以降の研究がほとんどであり、平均して 1 年に 4.5 件程度であるが、この数年は少し増加している印象がある。次項では 12 件を分析対象とし、先行研究における視点や論点の推移を概観する。

表 1-4 「保護者支援」「保育所」に該当する論文

保育所における保育士－保護者間に焦点をあてたもの	12
特定の対象者が対象（障害・気になる子、等）	7
食・栄養	4
文献レビュー	4
養成教育	3
就学期以降（小学生、成人）	3
歴史	2
医療・健康	2
保育所と保育所以外の機関との比較	2
制度	1
虐待	1
親子関係	1
除外（論文・研究ノートでない）	11
合計	53

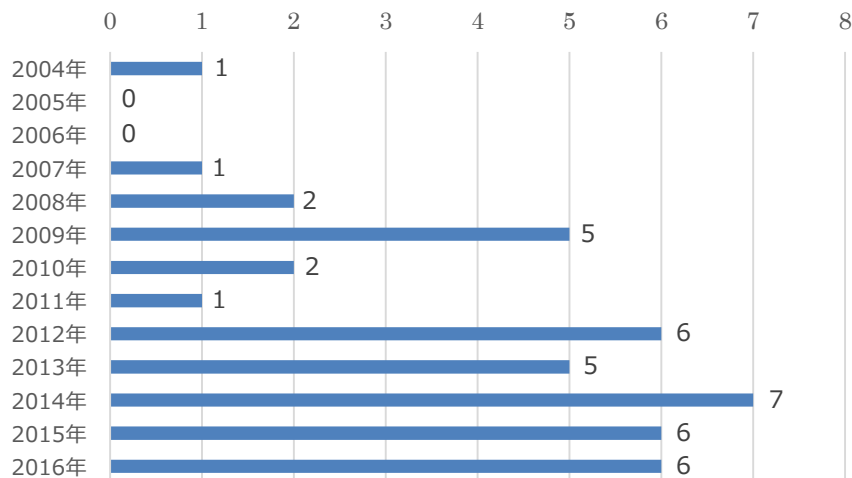


図 1-2 「保護者支援」「保育所」に関する論文発表年

(3) 「保育所」「保護者支援」研究に関する視点や論点の推移

「保育所」「保護者支援」に関する研究のうち、保育士－保護者間に焦点をあてた文献として分析対象となる12件の研究は表1－4の通りである。

さらに分析対象の論文について、問題意識、目的、方法、結果・考察、課題を抽出し、表1－5を作成した。

表1－5 分析対象となる保護者支援に関する先行研究リスト

No	文献名	著者	雑誌名、巻、号	発行年
1	保育における子育て支援の課題：求められる新しい理念と技術	宮里 慶子	保育研究 36, 15-22,	2008
2	保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究－保育所保育士の保護者支援を中心に	鈴木 敏彦， 横川 剛毅	和泉短期大学研究紀要 (30), 1-15,	2010
3	保育所保育士における「保護者に対する支援」の現状と課題	橘田 康世	東洋大学大学院紀要, 103-127,	2012
4	保育所における保護者支援のあり方に関する一考察	宮崎 つた子， 梶 美保	高田短期大学紀要 30, 131-139,	2012
5	保育所におけるソーシャルワークに関する現状と課題：弘前市内の保育士に対するアンケート調査結果を中心に	米山 珠里	東北の社会福祉研究 (8), 47-60,	2012
6	保育所保護者が望む保護者支援についての検討：育児の困り事、相談相手、相談方法に関する質問紙調査による分析	岸本 美紀， 武藤 久枝	保育士養成研究 (31), 125-134,	2013
7	保育所における保護者への子育て支援についての一考察	河村 裕次， 鍋田 耕作， 高橋 淳一郎	日本文理大学紀要 41(1), 1-8,	2013
8	保育所における保護者支援の実態に関する一考察：保育所を対象とした質問紙調査より	上村 裕樹， 坂本 大輔	社会福祉科学研究 3, 25-32,	2014
9	信頼関係の構築を促進する保育所保育士の保護者支援	中平 絢子， 馬場 訓子， 高橋 敏之	岡山大学教師教育開発センター紀要 4, 63-71,	2014
10	保育所保育士の保護者支援スキルが保護者との関係形成に及ぼす影響：保育経験年数別による比較分析	中山智哉	保育文化研究 (1), 13-25	2015
11	保育所における保護者支援についての検討：「クラスだより」の分析を通して	柴崎 正行， 会森 恵美	大妻女子大学家政系研究紀要 52, 157-162,	2016
12	事例から見る望ましい保護者支援の在り方と保育士間の連携	中平 絢子， 馬場 訓子， 竹内 敬子他	岡山大学教師教育開発センター紀要 6, 21-30,	2016

表1-6 保護者支援に関する分析対象論文の概観

著者	問題意識	目的	方法	結果・考察	課題
宮里 (2008)	子育て支援が理念として受けとめられず、必要な技術も整理されていない	入園児童、地域における保護者支援に関する具体的な取り組みを把握する	保護者支援を積極的に行っている保育所・幼稚園を対象としたアンケート調査	保護者支援というより、従来の保育のなかで取り込まれてきたことが多く、子どもの保育をすすめていくうえで望ましいこと、必要なこととして取り組んでいる意味が強い。	・保護者支援の意義について理解が行き渡っていない、ソーシャルワーク技術の応用が進んでいない
鈴木・横川 (2010)	保育の知識・技術等とソーシャルワークに知識・技術の関係が明確ではない、保育実践に援用されるソーシャルワーク機能がどの部分なのか明らかでない	保育士の保護者支援におけるソーシャルワーク機能を明らかにする、保育現場での保護者支援ニーズと保育士養成教育について検討する	保育士に対するアンケート調査	・保育所における保護者支援の全体的傾向として関心が高いものの、実際の支援がかみ合っていないことがある。 ・社会の価値観の多様化や保護者対応に難しさによる現場サイドの困惑がある	・ソーシャルワーク教育が難しい、現場で役立たないという声に、保育士養成教育と保育所での保護者支援に結びつける教育のあり方を再検討する必要がある。 ・リカレントや卒後教育を通じた現場への支援が必要である
橋田 (2012)	2008年に改定された保育所保育指針において新たに規定された保護者支援という役割が保育所や保育士に加わった	保護者支援に対する意識や現状、保育所におけるソーシャルワーク機能と保護者支援の関連性を明らかにする	保育士に対するインタビュー調査	保育所における保護者支援とは「子どもの最善の利益を保障する支援」であり、達成するにはソーシャルワークのスキルを援用することが有効な支援である そのため「7つの意識づけ」が保護者支援の実践知となる。	保育士の福祉専門職としての責任と能力向上の確立
宮崎 (2012)	子育て支援の成果が期待されるほど上がっていないのは、子育て世帯の負担感や支援ニーズの存在を的確に把握できていないことが考えられる	保育所における保護者支援の課題を探る	保育所の乳児クラス・幼児クラスの保護者に対するアンケート調査	・フルタイムの母親の方が悩みが多い ・一番目の子どもを持つ保護者のほうが悩みの記入が多い ・母親の就労形態により、園との関係に対する受け止め方が違う	保護者支援の質向上のために、保育所と保護者の双方の視点から課題の内容を定性的に分析することが必要 ・子育ての負担感なども踏まえながら継続的な保護者支援に関する研究を行っていくことが重要
米山 (2012)	保育ソーシャルワークの必要性が示されながらも、未だその定義や主体、方法が確立されていない現状がある	保育所におけるソーシャルワークの実態把握とソーシャルワーク機能に対する実情と課題を考察する	保育士に対するアンケート調査	保護者支援の実態は、保育の専門性を活かした助言が求められている ソーシャルワークを学習したものの、実践できている保育士が少なく、保育所でのソーシャルワーク機能の活用は難しい実態がある	保護者支援を積極的に行うためには、送迎時の会話や連絡帳の交換を大切にす、面談のさらなる充実をめざし、面談場所の確保や保育者の面談時間確保のための加配検討、相談業務を担当する専門職の配置、
岸本・武藤 (2013)	保育現場における保護者支援は「子育て相談」の内容と「気になる保護者」対応に二分されるが、前者は支援の内容やニーズの把握が主であり、具体的な相談内容や保護者の困っている内容についての知見が不十分である	保護者が育児に関する「困りごと」の内容、「相談相手」「相談方法」を把握する	保育所を利用する保護者に対するアンケート調査	・子どもの性別や学年で相談内容が異なっていた ・相談方法は「直接会って話す」が最も高かったほか、女児の母親は「電話」による方法が有意に高かった	保育所における保護者支援では、子どもの性別や学年によって考慮することが重要である
河村・高橋 (2013)	保育園における子育て支援研究は確立されていない	保育所に求められる子育て支援のあり方を探る	保育所を利用する保護者に対するアンケート調査	・一人っ子の保護者、核家族の保護者、パート・アルバイト・派遣社員の保護者、はそうでない保護者に比べて育児不安度が高い ・育児の悩みの相談先として保育所と回答した人が約30%と低かった	・身近に子育てに関する話ができる親族がなく、はけ口がない保護者は育児負担感や束縛感をより大きく感じってしまう ・保護者は保育所や保育士に相談できる場として認識されていない ・配偶者の子育てに関する理解や参加度合等の育児不安に影響を与えているものについての調査・分析が必要である
上村・坂本 (2014)	保護者支援の内容は複雑で多様化しており、その数も多い。また業務の整理や体系化、支援の組織化がなされていない、方法論も未発達である。保育士のスキルトレーニングも十分ではなく、改善の余地が過分にある	保護者支援業務の実施の仕組み、保護者支援の業務に対する保育士の負担感、軽減のための方法や養成課程における教育課題を検討する	保育所に勤務する保育士に対する質問紙(保護者支援)において最も印象に残った事例について自由記述で回答)	・保護者支援の実施は園長の責任のもとで判断・管理され、組織化された状況で対応されている。 ・保護者支援に必要とされるソーシャルワークスキルが保育士個人に備わっていないと言いは難しい	・全ての保育所において組織立てられ、支援のための仕組みが構築されていない、支援の実施に対する振り返りや検証が行われていない ・養成課程や研修の過程におけるソーシャルワークスキルトレーニングが必要である
中平・高橋 (2014)	多くの保育者は、保護者とのコミュニケーションに対して苦手意識を持っているが、問題が起きたときの対応は経験年数によって異なる	保育現場での保護者との関わりや対応、経験年数別における保育士のコミュニケーション能力について考察する	登園と降園時を中心とした保護者と保育士の関わりを観察し、記録したものを分析する	経験年数による経験の蓄積や保護者対応の能力が保護者とのコミュニケーションに差をもたらしている	・保育士養成課程の段階から、コミュニケーション能力の強化を行うことが必要である ・長期にわたって中堅・熟練保育士から指導・助言を行っていくことが必要である
岸本・武藤 (2014)	幼稚園と保育所ともに保護者への支援や家庭との連携は保育者に求められる重要事項であり、その点をふまえた養成教育が求められる	幼稚園、保育所それぞれの特徴を把握した保護者支援を検討する	幼稚園、保育所の保護者それぞれに対するアンケート調査	困りごとの内容、相談相手や相談方法など、幼稚園と保育所の保護者では出現率が異なる	・施設の特徴を踏まえた保護者支援を検討する必要がある ・結果を反映させた養成教育の具体的な検討が必要である
中山 (2015)	保育士の保護者支援、保護者との関係形成の難しさについては、保育者の支援スキル(カウンセリングやソーシャルワーク)の習得との関連、また保育経験年数差(熟達化)という2つの観点がある	保育経験年数が、保護者との関係性や保護者支援スキルの力量形成に及ぼす影響について検証する	保育所保育士に対する質問紙調査	「保育の専門性を活用した支援」「相談援助の専門性を活用した支援」の両方が、保護者との関係形成において有用であり、保護者支援スキルの力量形成、さらに保護者とのとりよ関係形成には、保育年数が大きく影響していた	・保護者支援スキルと保育経験年数との関係性は明らかになったが、経験した内容についての検討がさらに必要である ・保育経験年数以外の要因(保育士の年齢、育児経験、保護者との年齢差、保育士をとりまくサポート体制や研修体制の有無など)の検討が必要である
中平・馬場・竹内他 (2016)	経験年数の短い若手保育士と中堅・熟練保育士など経験年数の違いによって保護者対応に困難を抱えている場合がある	経験年数と保護者支援の関係性を明らかにする	保育士に対する聞き取り調査	・若手保育士は葛藤を抱えながら業務を行っている ・若手保育士の最優先課題はコミュニケーション能力の獲得である ・多様化する家庭環境などにより保護者対応が複雑になっているため、中堅・熟練保育士も困難を感じている現状がある	・保護者対応には経験の蓄積と先輩保育士の助言・指導等が必要になるなど、保育士間の情報共有と相互連携が重要である
柴崎・会森 (2016)	保育所は、「子育て支援」「保護者支援」と言われる以前から子育てを支えてきた。安心して子どもを送り出せること自体が子育てを支えることになり、保育者が保護者に保育実践を伝えることも保護者支援といえるのではない	日々の保育の中で発行されたクラス便りや保育者支援になるのかについて検討する	クラス便り及びクラス便りに関して言及した連絡帳を分析対象としてKJ法による分析を行う	保育者の目を通して子どもたちの姿を知らせることで、保護者は保育者と思うを共有し、信頼関係が築けている ・保護者の子どもを見るまなざしが重層的になっていくことを助けている	・クラス便りは保護者支援の機能を果たしている ・今後はインタビューを含めた詳細な追跡調査が必要

表1-6から、論文発表の時期により、視点や論点に一定の共通項が見えてきた。

(1)混乱期

前述したように、2008年の保育所保育指針の改訂、それに連動した養成カリキュラムの改定により、保護者支援は保育所で働く保育士にとって業務の一つに加わった。同時にその保護者支援を行うためにソーシャルワークが取り入れられることになった。しかし宮里(2008)、鈴木・横川(2010)、米山(2012)の研究からは、特に初期段階において新しい概念である保護者支援、そしてソーシャルワークに対する戸惑いが見てとれる。一部では「否定的な認識」さえ見られ、ソーシャルワークの援用・応用が思うように進まない様子うかがえる。いわば「混乱期」である。

(2)模索期

しかしほぼ同時に保護者支援に対して改善の糸口を探る動きも見られる。宮崎・梶(2012)、岸本・武藤(2013)、河村ら(2013)は、支援の受け手である保護者側に調査を行い、「フルタイム」、「一番目の子どもを持つ」「核家族」の保護者や、また子どもの性別や学年など、世帯特性や保護者の背景、子どもの年齢や状況による要因に着目する必要性を示唆している。それはソーシャルワークでいうところのスクリーニングや個別化につながる。

また橘田(2012)は、保育士が保護者支援に関する語りを実践知として7つにカテゴリー化する中で、「保育の価値」が、行動規範として根底にあることを確認するとともに、ソーシャルワークのスキルと「近縁関係」「表裏一体」であるとしている。これらの研究からは、同じ福祉領域である保育とソーシャルワークは当然ながら共有する部分が多いことの確認や、ソーシャルワークと意識していないソーシャルワーク的支援が実際には行われている現状もうかがえる。つまり、保育とソーシャルワークの接近・融合に対する可能性を示唆しており、いわば「模索期」といえる。

(3)捉え直し期

その後、一定の時間が経過したことで保護者支援に関する実践が蓄積され、その検証を行う動きが見られるようになる。上村・坂本(2014)では、保育士に対するアンケート調査を通じて保護者支援の支援開始の判断や情報共有の範囲など実施の仕組みが徐々に組織化されつつある現状を確認している。そして保育士は保護者支援の負担感や困難さを変わず感じているものの、単に「力量や経験不足」といった個人的要因だけでなく、「仕組みの限界」「現状の変化に対応していくこと」など保育士や保護者をとりまく要因

も着目している。その上で経験的蓄積に頼って成立している現状に対して、ソーシャルワークのスキルトレーニングが必要であることを感じている点から、保育所保育指針に言及されているから、というトップダウンでソーシャルワークを取り入れようとしていた時期に比べると、導入の必要性に対する理由づけに変化が感じられる。また中平ら(2014)は事例の中から経験年数による蓄積や保護者対応の能力が保護者とのコミュニケーションに差をもたらすことを明らかにし、養成課程で学ぶ段階からコミュニケーション能力の強化をはかることや中堅・熟練保育士から若手・新任保育士への指導・助言体制の必要性を課題として挙げている。続く中平(2016)においても、若手保育士の葛藤を受け止めつつ、保育士間の情報共有と相互の連携が必要であるとしている。「1日の大半を多様な業務に従事し、基本的に余分な時間がない」現状の中で、具体的な情報共有の方法に対する立案が必要であるという課題設定からは、個人ではなく、組織単位での現状改善を探る新たな視点が見られる。さらに「保護者対応も複雑になっているため、若手保育士のみではなく、中堅・熟練保育士も困難を感じている現状がある」の記述からは、直接言及はされていないものの、保育士間で問題解決がつかない場合の、次の段階への示唆とも受け止められる。

もう一つの新たな視点といえば、柴崎・会森(2016)による、保育業務の一部として捉えられていた「クラスだより」を保護者支援のツールとして捉え直す研究である。保育士として保護者に保育実践を伝えることが保護者支援につながるという、子育て支援概念が生まれる前からの保育所・保育士の役割に立ち戻る原点回帰の意味合いも含まれている。これらを、いわば「捉え直し期」ということができる。

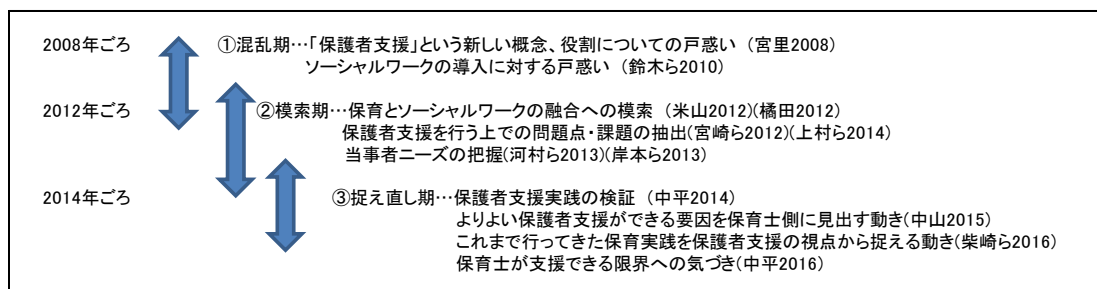


図1-3 保護者支援に関する先行研究における視点・論点の推移

2. 「保育ソーシャルワーク」に関する研究の動向

(1) 保育ソーシャルワーク研究における全体的な傾向の把握

国立情報学研究所の論文情報ナビゲーターCiNii を用いて「保育ソーシャルワーク」をキーワード検索した結果、2016(平成 28)年 11 月 1 日時点で 118 件が該当した。論文・研究ノートに分類できない 15 件を除いた 103 件について、タイトルに用いられているキーワードから概観したところ、保育ソーシャルワークに関する論文で一番多かったのは「養成教育・現任教育」をテーマにしたものであり、21 件で全体の 20%を占めた。次に「理論」が 20 件で 19%、「保育所」が 14 件、「保育所外」13 件と、それぞれ 13%を占めた(図 1 - 4 参照)。

「養成教育・現任教育」「理論」「文献レビュー」「制度」を合わせると約半数以上を占め、ここから現場実践の乏しさが浮かび上がってくる。

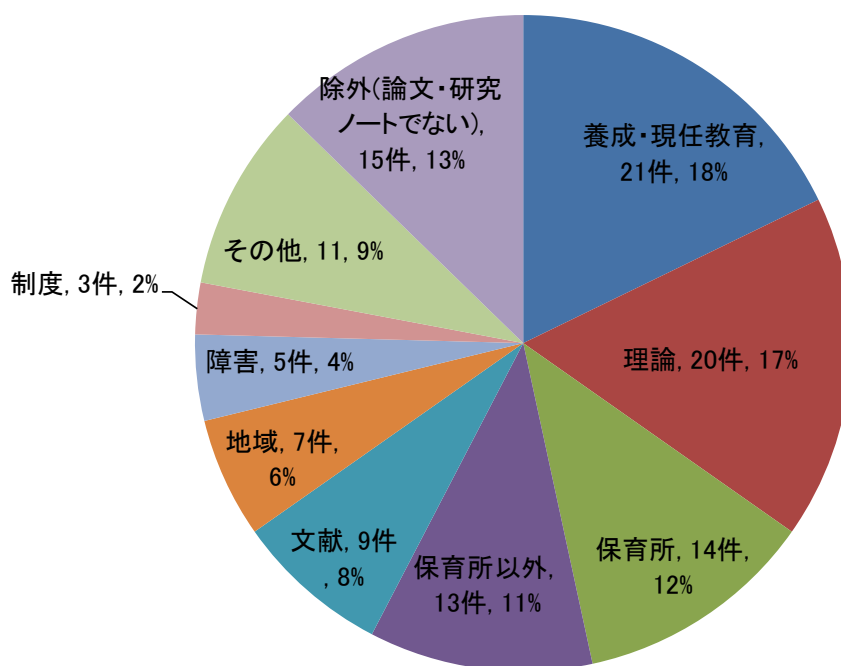


図 1 - 4 保育ソーシャルワークに関する論文の内訳

(2) 「保育」「ソーシャルワーク」研究に関する視点や論点の推移

「保育」「ソーシャルワーク」に関する研究のうち、論文や研究ノートに分類できないもの、“地域子育て支援”や“養成教育”など本研究が扱うテーマと異なるものを除く17件を分析対象論文とした(表1—7参照)。

さらに分析対象の論文について、問題意識、目的、方法、結果・考察、課題を抽出し、表1—8を作成した。

表1—7 分析対象となる保護者支援に関する先行研究リスト

	文献名	著者	雑誌名、巻、号	発行年
1	保育所機能の多様化とソーシャルワーク(特集 ソーシャルワーク実践としての家族支援)	山本 真実	ソーシャルワーク研究 26(3), 193-200.	2000
2	保育ソーシャルワーク研究: 保育士の専門性をめぐる保育内容と援助技術の問題から	今堀 美樹	神学と人文: 大阪基督教学院・大阪基督教短期大学研究論集 42, 183-191.	2005
3	保育所におけるソーシャルワーク機能の検討	福田 公教, 石田 慎二	佛教福祉学 (13), 71-81.	2005
4	エコロジカル・パースペクティブによる保育実践	土田 美世子	ソーシャルワーク研究 31(4), 285-294.	2006
5	保育所の子育て支援に対する意識とソーシャルワーク機能に関する考察	石田 慎二	社会福祉士 (13), 109-115.	2006
6	子育て支援における援助初期の面接技法に関する考察: 保育ソーシャルワーク試論(1)	鶴 宏史	福祉臨床学科紀要 1, 49-56.	2006
7	保育ソーシャルワークの展望	伊藤 利恵, 渡辺 俊之	健康福祉研究 4(1), 29-40.	2007
8	保育所保育士による家族支援: 27例のケース検討会から	千葉 千恵美, 鑑 さやか, 渡辺 俊之	高崎健康福祉大学紀要 6, 91-104.	2007
9	保育所におけるソーシャルワーク機能についての研究—テキストマイニングによる家族支援についての分析	伊藤 利恵, 渡辺 俊之	健康福祉研究 5(2), 1-26.	2008
10	保育における子育て支援の課題: 求められる新しい理念と技術	宮里 慶子	保育研究 36, 15-22.	2008
11	保育所におけるソーシャルワークの機能に関する研究—保育士の役割に焦点を当てた質的内容分析	蘇 珍伊	現代教育学研究紀要 (1), 79-88.	2008
12	保育とソーシャルワークに関する一考察	上村 麻郁	清和大学短期大学部紀要 (38), 25-31.	2009
13	保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究—保育所保育士の保護者支援を中心に	鈴木 敏彦, 横川 剛毅	和泉短期大学研究紀要 (30), 1-15.	2010
14	保育所によるソーシャルワーク支援の可能性: 保育所へのアンケート調査からの考察	土田 美世子	龍谷大学社会学部紀要 37, 15-27.	2010
15	保育所保育士における「保護者に対する支援」の現状と課題	橋田 康世	東洋大学大学院紀要 49(社会学・福祉社会), 103-127.	2012
16	タイムライン調査を中心とした保育所保育士のソーシャルワーク業務分析	竹之下 典祥, 前田 佳代子, 加納 光子 [他]	保育士養成研究 (30), 51-60.	2012
17	保育所におけるソーシャルワークに関する現状と課題: 弘前市内の保育士に対するアンケート調査結果を中心に	米山 珠里	東北の社会福祉研究 (8), 47-60.	2012

表1-8 保育ソーシャルワークに関する分析対象論文の概観

著者	問題意識	目的	方法	結果・考察	課題
1 山本(2000)	保育所機能は、従来の「保育対策」だけでなく、「一般家庭児童対策」・「地域の子育て支援」へと拡大しつつある。保育所が家庭支援を行う上で何が期待されているのだろうか。	保育機能の変化に焦点をあて、期待される保育所による家庭支援拡大について、ソーシャルワーカーの活動の重要性を考察する。	既存調査および著者が参加した全国調査の結果をもとにした、保育所の地域子育て支援の概観。	保育所保育指針の1999年の改定では保育所機能のひとつとして、地域における子育て支援が明記された。そこで保育所に必要なものは、対人援助の専門家、つまりソーシャルワーカーとしての活動である。ソーシャルワークのアプローチは、家庭というフィールドを活用しながら、いかんにして自己責任と満足が両立できる社会の仕組みを構築するための方法でなければならない。	保育士がソーシャルワーク的な仕事を行う事が現実的に可能な短期的対応であるが、現状では限界があり、社会福祉士など専門職種の配置の検討が必要である。成人相手の活動であるソーシャルワークを保育士が行えるかどうかは慎重な議論を必要とする。
2 今堀(2005)	保育士の社会福祉援助職としての専門性をどのように構築すれば良いのだろうか。	社会福祉専門職としての保育士の実践を保育ソーシャルワークとして構築する方向を模索する。	保育内容と援助技術に関する先行業績の文献調査。	保育士養成におけるソーシャルワーク教育は、保育実践にソーシャルワークの目的と機能を位置づける方向でなされる必要がある、保育内容における援助技術の問題としてソーシャルワークを捉えなおす必要がある。	保育士を目指す学生の動機の多くは「子どもが好きだから」というものであるが、それを「子どもの福祉を増進する」という社会福祉援助者としての自己形成に発展させることが必要である。保育士養成課程の見直しの意図は、学生たちに社会福祉援助職としての専門的自己形成に向けた学習への取り組みを求めるものである。子育てをめぐる問題は、親や保育士が抱え込むものではなく、他の施設や機関、地域との協働性が必要である。そのためには保育士、各機関の協働性の開発が必要となってくる。
3 福田・石田(2005)	保育所はソーシャルワーク機能を強化し、地域子育て支援施設としての役割を果たしていくことが求められる。その機能を向上させるための課題を考察する。	保育所におけるソーシャルワーク機能の必要性を明らかにし、強化させる。	①保育所の子育て支援に対する意識の向上(複数回答によるアンケート)、②保育指導に関する専門性の確立、の2点から考察した。	保育所全体の「子育て支援」に対する意識は、「子どもの保育」ほど重要視していないことがわかった。一方、地域子育て支援センター事業を実施している保育所のみ調査では、子育て支援に対する意識が高く、地域の子育て支援を保育所の機能として方向づけようとしていることがわかる。保育所がソーシャルワーク機能を強化していくためには、子どもの保育に関する専門知識や技術の習得に加え「保育指導」の習得が求められ、保育士養成施設ではこれらの内容をより一層深め、ソーシャルワークの知識と実践の強化が必要である。	本稿では「保育指導」の専門性を確立していくことの必要性を述べるに留まったが、保育所の具体的な取り組みを検討するなど、より踏み込んだ実践的アプローチを理論的アプローチと積み重ねていくことで「保育指導」の専門性を確立できると考えられる。
4 土田(2006)	保育所のソーシャルワーク機能の具体的な内容を明確にする必要があるのではないのか。	保育所が子育て支援を実践する際にソーシャルワークが必要であることを論じる。	事例研究	エコロジカル・パースペクティブに基づく保育実践とは、ソーシャルワークの実践である。保育所が独自の子育て支援機能を明確にするためには、エコロジカルパースペクティブを獲得する事が必要である。	事例研究では、保育所全体としてソーシャルワーク機能が実践されていたが、それはソーシャルワーカーによる実践ではなかった。保育士がソーシャルワークを行うかどうかはさらなる検討が必要である。
5 石田(2006)	保育所のソーシャルワーク機能を強化していくうえで課題は何か。	保育所におけるソーシャルワーク機能を強化していくうえでの課題を、保育所の子育て支援に対する意識との関連から検討する。	保育所215カ所でのアンケート調査	保育所は従来の機能(子どもの保育と親の就労支援)を重視しているが、新たに求められている機能(在宅子育て層の支援、要保護児童対策、地域福祉の拠点)への意識は高くない。育児相談については随時実施している保育所は、来園相談で約4割、電話相談で約5割にとどまった。保育所の連携意識の向上については、フォーマルな社会資源については高く、インフォーマルな社会資源については低かった。	保育所は福祉・保健以外の期間やインフォーマルな社会資源との連携に対する意識を高め、連携を図ることでソーシャルワーク機能を強化していくことが求められる。そのための保育所の子育て支援に対する意識を高めることが期待される。
6 額(2006)	保育士のソーシャルワーク習得が強調されているが、それは必ずしも体系化されているわけではない。ソーシャルワークの中で、相談援助者としての役割は必須の機能であるが、具体的にどのような技法が有効だろうか。	子どもと家族の援助に焦点を当てた家族ソーシャルワークの面接技法についてエンパワメント実践の視点から論じる。	文献調査	家族の抱える問題を、どの家庭でも経験するプロセスであるとして一般化することで、親の不安をなくし自信を高める。問題を客観化させ外在化させることで、個人から独立させ、当事者と援助者がパートナーシップ関係にあることを伝える。困った子ども=取り組む問題としてとらえる。問題の例外に焦点を当てる - 当事者は無力ではなく問題解決のスキルを持っていることに気付かせ、希望が持てるようにする。	本稿では面接初期の技法に絞って論じたが、さらに詳細なアセスメントや目標設定による援助の展開における面接技法について、また、保育とソーシャルワークの関係、基本原理については別稿で論じたい。
7 伊藤・渡辺(2007)	保育所保育指針、倫理綱領で保育士の業務が明確にされているが、保育ソーシャルワークについては明確でない。	保育ソーシャルワークの位置づけ、担い手など明確な定義づけの必要性について論じる。	文献調査	保育士のソーシャルワークの専門知識・技術を習得しやすい研修制度の確立、他の専門職種と連携できるシステムづくりが今後の課題である。そのためには各専門領域による子どもの福利の増進を目指すという共通認識が必要である。	保育所保育方針では、保育士のソーシャルワークの専門知識や技術の習得方法は「自己研鑽」とされているが、より高度な専門性が求められる状況にある中で、そのシステムづくりが今後の課題である。

8	千葉・鑑・渡辺(2007)	保育所において子どもとその家族に向けた支援は具体的にいき届かない状況である。	子どもの問題と家族の問題の関連性を中心に検討を行う。保育現場が必要とする具体的な援助内容を整理し、保育士の役割と課題を考察する。	認可保育所27施設における困難ケースを抱える保育士を対象にしたスーパービジョン	保育士の能力では支援できないケースでは、スーパーバイザーの援助が有効であった。子どもの問題行動には家族関係や家族背景が深く関与している。家族支援の必要性はますます重要になり保育士の質の向上が要求されている。子育て支援として、ソーシャルワークを基盤にした家族支援が必要である。	(保育所保育士の日常業務は、従来の保育業務に加えて、子ども虐待問題や育児不安へ対応する親支援、子どもの発達や成長に関する相談に乗るといった、周辺領域の知識や技術が必要とされてきている。)
9	伊藤(2008)	新保育所保育指針では法的に保育所の役割として「保護者に対する支援」が新たに位置づけられた。これを受けて保育士が取り組むべき改善点や課題は何か。	保育士が保育所保育指針に基づく「保護者に対する支援」を展開していく上での課題を明らかにし、保育所の改善のための素材を提供する。	保育所36施設に勤務する498名の保育士を対象にした、自由記述式の質問紙を用いた調査	ソーシャルワーク機能とされる「社会福祉援助システムと関連システムの連携・調整の原則」への意識を持つ保育士は少数であり、この意識を高める必要がある。ソーシャルワークの支援計画、他機関との組織体制づくりの認識が低く、この機能についての意識を高める必要がある。	新保育所保育指針にあるソーシャルワーク機能と保育士の家族支援の意識の持ち方は一致する傾向があったが、「調整機能」と「運営・管理機能」においては保育士の認識が低い。これらの専門知識と技術の習得が保育士には求められる。そのための実践方法は今後の研究課題とした。
10	宮里(2008)	子育て支援が理念として受けとめられず、必要な技術も整理されていない。	入園児童、地域における保護者支援に関する具体的な取り組みを把握する。	保護者支援を積極的に行っている保育所・幼稚園を対象としたアンケート調査	保護者支援というより、従来の保育のなかで取り組まれてきたことが多く、子どもの保育をすすめていくうえで望ましいこと、必要なこととして取り組んでいる意味が強い。	保護者支援の意義について理解が行き渡っていない。ソーシャルワーク技術の応用が進んでいない。
11	藤(2008)	保育所におけるソーシャルワーク機能に関する実証的研究は少なく、現在保育所が行っているソーシャルワーク機能の現状が明らかではない。	保育所におけるソーシャルワーク機能の現状を明らかにし、これからの保育所におけるソーシャルワーク機能の方向性を検討する。	保育士4人に対するインタビュー(4人の所属機関はそれぞれ別)	保育所が従来の子どもに対する保育の機能に加え、保護者への相談援助や指導は行われているが、地域における子育て支援は不十分であった。今後は保育士の地域子育て支援への認識を高め、ソーシャルワークの知識や技術を高める必要がある。	本研究は保育士4人が調査対象なので一般化とは言えない。今後より広範囲の調査を行い管理職と保育士レベルの機能を明らかにしていくことが課題。
12	上村(2009)	保育とソーシャルワークの関係は不明確な点が多い。	「保育」の社会福祉学における位置づけ、「保育」と「ソーシャルワーク」との関係性を考察する。	・保育とソーシャルワークに関する先行研究のレビュー ・保育所保育指針からソーシャルワーク機能を考察する。	・保育所におけるソーシャルワークの必要性の議論は十分行われているが、「保育ソーシャルワーク」の定義は不明瞭である。 ・新保育所保育指針では、保育ソーシャルワークについて、保育士がソーシャルワーカーの機能を担うものであると理解できる。また、既存の保育の枠組みの範囲でソーシャルワークの支援を積極的に取り入れることを強調している。(しかし現場における具体的な方法は曖昧ではないかと疑問に思う。)	保育所における子育て支援を「保育ソーシャルワーク」というのは保育現場の混乱につながるのではないかと。保育現場で、保護者支援という関わりでの保育ソーシャルワークが見出せるような分析・評価を検討していきたい。
13	鈴木・横川(2010)	保育実践におけるソーシャルワーク機能の位置づけや今後のあり方が明確ではない。	保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能について明らかにする。その中で、典型例である「保護者支援」の現状と課題を明らかにする。	神奈川県認可保育所443園の、管理職とそれ以外の者に対する無記名式のアンケート調査	・保育士の取り組みと保育所保育指針で示されている保護者支援の項目に齟齬がある。 ・保育士養成教育の社会福祉援助技術科目の概要を現場のニーズに即したものに見直していく必要がある。 ・定員が多い保育所において保護者支援を充実させるよう、現場の取り組みが求められ、研修体制の構築が必要である。 ・他機関との連携においてはクラス担当の保育士よりも管理職の意識が高かった。「外部との仕事は上司の仕事」という線引きがあるのではないかと。	夜間保育や休日保育、病児保育などニーズが高くなりつつある保育サービスについて、行政による支援システムの抜本的見直しや新たな確立が早急に求められる。 ・保育士養成校において、現在保育士が抱えている難問を解決できるように、社会福祉援助技術の知見を活かした現場への援助は重要な課題である。
14	土田(2010)	保育所で誰がソーシャルワーク機能を行うか、または、保育所ワーカーが実施するかどうかすら、明確ではない。	保育所に求められるソーシャルワーク機能の実施への意識を探り保育所でのソーシャルワーク支援の現状や実施要件について考察する。	大阪府内の保育所493か所の施設長用および保育士用の2部ずつ986部のアンケート調査。	保育所がソーシャルワーク機能を実施することについて理念としては合意しているが、実施方法や職務範囲などは、施設長と保育士の間で様々な意見があり、方針は確定していないようだ。保育所の役割意識において、保育士がケアワーク、施設長がソーシャルワーク支援に対する意識の差異がみられた。このことから、それぞれの役割分担(保育士がケアワークを、施設長がソーシャルワークを担う)が検討可能ではないだろうか。	今回の調査はあくまでも意識の調査であり、それが実際に行われているかどうかは確認できていない。施設長が必ずしもソーシャルワークの専門教育を受けているとは限らないため、保育所にソーシャルワークの専門職の配置の検討も必要。
15	橋田(2012)	2008年に改定された保育所保育指針において新たに規定された保護者支援という役割が保育所や保育士に加わった	保護者支援に対する意識や現状、保育所におけるソーシャルワーク機能と保護者支援の関連性を明らかにする。	保育士に対するインタビュー調査	保育所における保護者支援とは「子どもの最善の利益を保障する支援」であり、達成するにはソーシャルワークのスキルを援用することが有効な支援である。そのために「7つの意識づけ」が保護者支援の実践知となる。	保育士の福祉専門職としての責任と能力向上の確立
16	竹之下・前田・加納他(2012)	ソーシャルワークに関する保育所と保育士の実情把握	だれが、どのような場面でソーシャルワークを担っているか、	保育所保育士の業務分析に関するタイムライン調査	保育現場でのソーシャルワークとして限定、または明確化できる業務は約1割であった	保育ソーシャルワークに関して明確な定義がない。 ・保育士の業務が分岐し、場合によっては秒単位に変化する業務であることから、立ち現れない場合が多くある。 ・実際の臨床現場で業務としての技術を用いているのかを視認して判断することは困難を極める。
17	米山(2012)	保育ソーシャルワークの必要性が示されながらも、未だその定義や主体、方法が確立されていない現状がある。	保育所におけるソーシャルワークの実態把握とソーシャルワーク機能に対する実情と課題を考察する。	保育士に対するアンケート調査	保護者支援の実態は、保育の専門性を活かした助言が求められている。ソーシャルワークを学習したものの、実践できている保育士が少なく、保育所でのソーシャルワーク機能の活用は難しい実態がある。	保護者支援を積極的に行うためには、送迎時の会話や連絡帳の交換を大切にす。面談のさらなる充実をめざし、面談場所の確保や保育者の面談時間確保のための加配検討、相談業務を担当する専門職の配置

図1-5から、論文発表の時期により、視点や論点に一定の共通項が見えてきた。

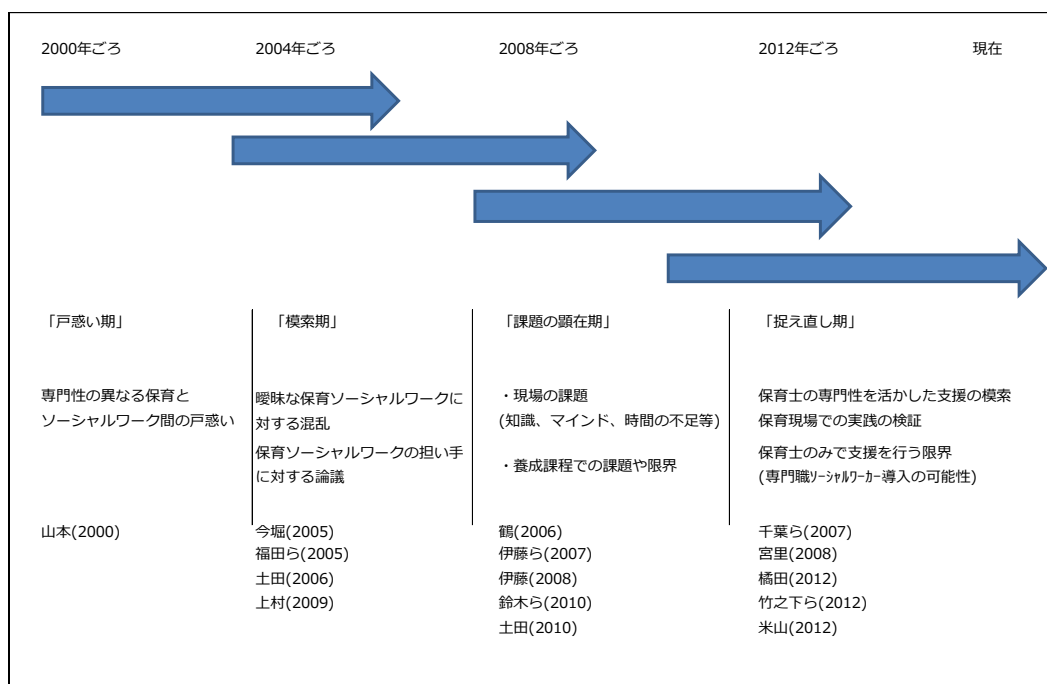


図1-5 「保育」「ソーシャルワーク」研究に関する視点や論点の推移

(1)戸惑い期

保護者支援に内包される概念である保育ソーシャルワークもまた、先行研究の中に戸惑いが感じられる。山本(2000)では、保育士がソーシャルワークを行うことにも、現段階ではソーシャルワーカーが保育領域で実践を行うことにも課題を感じている。

(2)模索期

前述したように、保育士にとって業務の拠り所となる保育所保育指針にソーシャルワークの文字はなく、保育所保育指針解説書においても、曖昧な表現がなされているため、どのように取り組みを進めていけばよいのか模索する様子が見えてくる。今堀(2005)は、保育内容の中にソーシャルワークを捉え直そうと試みている。また、土田(2006)も同様である。上村(2009)は保育ソーシャルワークの定義が不明瞭であると、その関係性を明らかにしようと模索している。

(3)課題の顕在期

模索期とほぼ同時期に、現場で顕在化する課題について取り上げる先行研究が見られるようになる。福田ら(2005)は、保育に比べると子育て支援の意識が低い傾向を指摘している。鈴木ら(2010)も、保育士の取り組みと保育所保育指針で求められていることにギャップがあると、同様に指摘する。土田(2010)も、保育所として支援の理念には合意しているものの、実際の取り組みでは施設長と保育士との間に考えの差があるとしている。

(4)捉え直し期

時間の経過により、実践が蓄積される時期でもあり、また一定の整理が出来る時期である。宮里(2008)は、現場の実践を検証する中で、現場での支援は従来の保育の中で取り組まれてきたことが多く、保護者支援という新しい概念としてではないとしている。竹之下(2012)は保育士のタイムライン分析調査を行い、本来業務である保育が大部分を占め、ほとんどソーシャルワーク業務は行われていないという結果を得ている。また米山も同様に保育所におけるソーシャルワークの実態把握を行う中で、保育の専門性を活かした助言が求められているとし、保育士の専門性を活かした支援のあり方について述べる一方、相談業務を担当する専門職の配置も課題として挙げている。

このように、保育ソーシャルワークに関する先行研究を概観する中で、概ね保護者支援と共通した傾向が見られた。保育の専門性を活かした支援のあり方を探る本研究もまた、捉え直し期にある保護者支援研究、保育ソーシャルワーク研究の一つといえる。

次章では連絡帳をツールとした保護者支援、保育ソーシャルワークの可能性を探る前段階として、保育現場における連絡帳の位置づけ、意味合いを明らかにしたいと考える。

第2章 連絡帳をツールとした保護者支援、保育ソーシャルワークの可能性

第1節 連絡帳に着目した理由

序章で述べたように、保育士が他職種と協働していくためには、先ず保育士が共同体制の中で担う役割を明確にしなくてはならない。当然、その役割は保育の専門性を活かした、保育士にしかできないものであるべきである。また加重な勤務負担を強いられている現状において、これ以上保育士の負担感を増さないことが、具体的な実践に結びつきやすいと予想される。さらにいえば、一部の保育士のみが取り組む内容ではなく、保育士の誰もが広く実践できることも、今後保育士業務の中に保護者支援、保育ソーシャルワークが浸透していくためには要素の一つとして含まれるべきであると考えます。

その意味において連絡帳は、まさに子どもの日常を見守る保育士にしか記入できない役割である。既に保育現場においてケアワーク業務の一部として、長らく、そして広く実施されているものであり、記入にあたっては経験年数を問わず、新人からベテラン保育士まで広く行われている業務である。しかも既に実践されていることなので負担が増すものではないこと、行われている度合の高さ、そして業務に関わる人数の多さを考えた際、連絡帳をケアワークとソーシャルワークの両方の意味を持つツールとして捉え直すことは、保育士の業務改善および保護者支援の質的向上に大きくつながると考えた。

第2節 保育所保育指針における位置づけ

保育現場において広く用いられている連絡帳に関して、保育士業務の拠り所となる保育所保育指針に「連絡帳」という語句の記載はないが、表 2-1 の①から⑤の通り、保育所保育指針解説書において5ヶ所見られる。

表 2-1 保育所保育指針解説書における「連絡帳」の位置づけ

	章	章タイトル	節タイトル	項タイトル	内容
①	第3章	保育の内容	保育のねらい及び内容	生命の維持	ケアワーク
②	第3章	保育の内容	教育に関わるねらい及び内容	言葉	ケアワーク
③	第5章	健康及び安全	食育の推進	特別な配慮を含めた一人一人の子どもへの対応	ケアワーク
④	第6章	保護者に対する支援	保育所に入所している子どもの保護者に対する支援	保護者に対する個別支援	ソーシャルワーク
⑤	第7章	職員の資質向上	職員の研修等	専門性を高める研修	

表 2-2 は、保育所保育指針解説書における連絡帳に関する記述部分を抜粋したものである。

表 2-2 保育所保育指針解説書における連絡帳に関する記述部分

①	送迎時の保護者との会話や <u>連絡帳</u> 、懇談会などを通し、積極的に家庭との情報交換を行いながら、24時間を見据えた子どもの生活時間を考慮し、子どもの食事、睡眠、休息、遊びなどが無理なく営まれるようにしていきます。
②	また、絵本や自分の <u>連絡帳</u> 、室内外の様々な表示や文字を見たりする中で、自ら真似て書いてみようとしたり、保育士等を書いてもらったりして文字に親しんでいきます。
③	具体的取組としては、毎日の送迎時での助言、家庭への通信、日々の <u>連絡帳</u> 、給食やおやつを含めた保育参観や試食会、保護者の参加による調理実践、行事などが考えられます。懇談会などを通して、保護者同士の交流を図ることにより、家庭での食育の実践がより広がることも期待できます。
④	保育所における個別的な援助に当たっては、保育の専門性という視点から情報収集と分析、援助方法や手段の選択等を行います。収集する情報の例としては、保護者の意向や思い、家族の状況、関わりのある社会資源等に加えて、子どもの発達や行動の特徴、生活リズムや生活習慣、そして保育所における子どもの行動特徴、送迎時や <u>連絡帳</u> の記述等に見られる親子関係等を挙げることができます。
⑤	短時間で効率的に職場内研修を行うためには、具体的な資料をもとに検討することが大切です。資料を用いることで、事前に自分の疑問や考えをまとめることができたり、研修に参加しなかった職員も内容を共有することが可能になります。その際、資料は、日常的に記録している保育日誌、 <u>連絡帳</u> 、児童票などを資料として活用することも有効です。

注：下線、太字は筆者によるもの

個々の記述を見ていくと、まず①の記述では、あくまで子どもの生活リズムを確立していくという目的のもとに、食事や睡眠、休息、遊びに関する情報を家庭と保育所で共有する、いわば情報交換ツールの一つとして連絡帳の役割を挙げている。②では、子どもが文字に対する興味を持つために、親や保育士など身近な人間が記入する連絡帳が素材の一つとなりうることが例として挙げられている。③では保護者の食育に対する関心を高めたり、具体的に食生活に関する相談に応じるためのツールの一つとして捉えられている。これら①から③までは保育の一環、つまりケアワークとしての取り組みと捉えられる。一方④については、保育士が保護者支援を行うにあたっては、様々な情報を収集することが必要で、その一つである親子関係等を把握するために連絡帳の記述が有効であると述べられている。このように連絡帳は、保護者支援を行うために活用されるツ

ールの一つであると捉えられていることは明らかであり、文中にある「情報収集や分析、援助方法や手段の選択」は、ソーシャルワークでいうところの、インテーク、アセスメント、プランニングにあたる。まさに保育ソーシャルワークのツールとしての活用が期待されているといえる。その他、⑤については、保育士の資質向上について述べられている。保育士は専門職としてたゆみなく向上し続けていくことが求められており、そのために活用される身近な資料の一つとして連絡帳が例示されている。保育士の業務内容がケアワーク、ソーシャルワークの二つで成り立っている以上、ケアワーク、ソーシャルワークの力を向上させるためのツールとして連絡帳の活用が望ましいと考えられる。

第3節 先行研究に見る連絡帳活用の可能性

1. 連絡帳の研究における全体的な傾向の把握

CiNiiにて「連絡帳」をキーワードに検索を行ったところ、2016(平成28)年12月現在で120件が該当した。連絡帳は就学期以降の特別支援学校や特別支援クラスなどでも用いられており、「保育」を加えて再び検索したところ40件となり、保育領域における連絡帳の研究が約3分の1の比重を占めていることがわかった。

論文の発行年と件数を見ると(図2-1参照)、30年以上前の1982年以来現在に至るまで、平均して年に1.9件の割合で研究が行われており、保育領域において、いかに連絡帳業務が長らく保育実践の一つとして根付いてきたかがわかる。2015年は平均件数の3倍以上である7件と増加しており、理由については後述する。

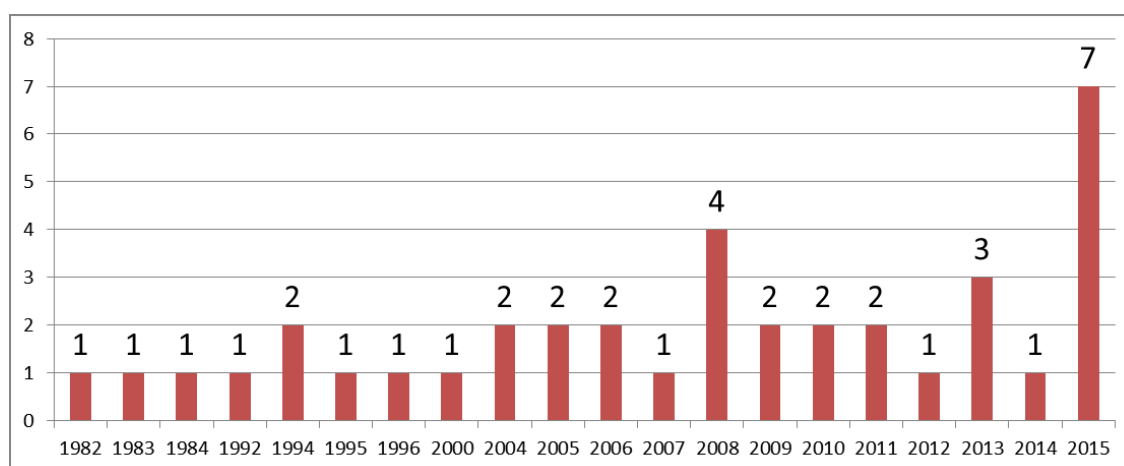


図2-1 連絡帳研究における発行年と件数 (注: 2016年は終了していないため割愛)(筆者作成)

2. 保育領域における連絡帳研究の概要

「保育」「連絡帳」のキーワード検索にて該当した40件のうち、論文や研究ノートに分類できない10件を除いた30件について、論文タイトルから研究内容を概観したところ、図2-2の通りとなった。

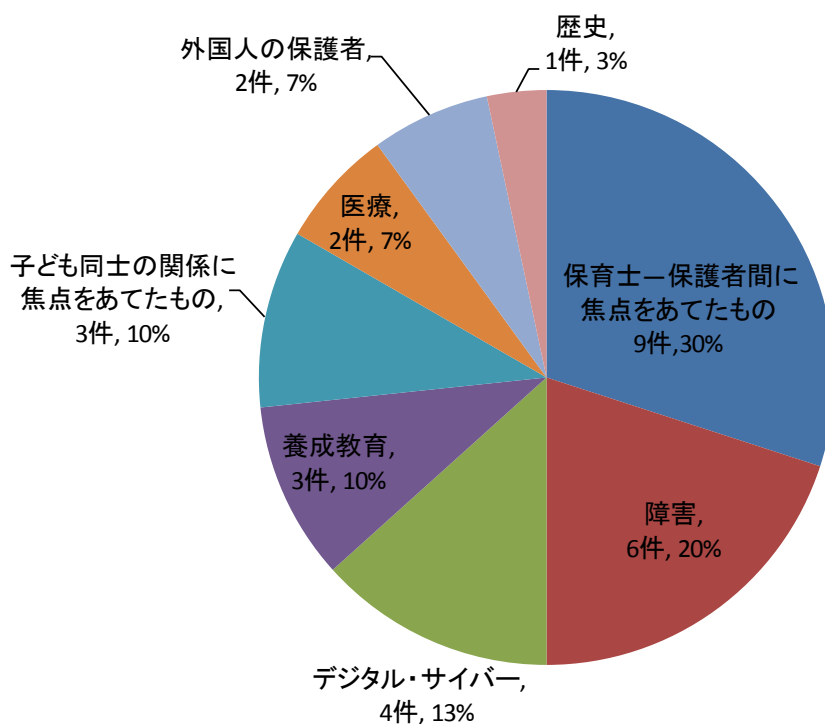


図2-2 保育領域における連絡帳研究の内訳（筆者作成）

件数の多い順に、本研究と同じく保育士—保護者間の関係性に焦点化した研究が9件見られた。その次に障害を持つ子どもの連絡帳に関する研究が6件、デジタル連絡帳など紙媒体でない連絡帳に関する研究が4件、養成教育において連絡帳を取り上げた研究、子ども同士の関係性に焦点化した研究が各3件、医療や外国人の保護者など特定のテーマにより連絡帳を捉えた研究が各2件、連絡帳の歴史を取り上げた研究が1件と続いた。

3. 保育士—保護者間の関係性に焦点化した研究

本研究と同じく、保育士—保護者間の関係性に焦点化した9件の論文一覧については表2-4に示した。さらに、各論文の連絡帳に対する捉え方、研究目的、研究方法、結果と考察、本研究との共通点・相違点についてまとめたものが表2-5である。

表2—4 分析対象となる先行研究リスト

No	文献名	著者	雑誌名、巻、号	発行年
1	保育者と保護者の相互交流--連絡帳を通して	広沢 洋子, 清水 玲子, 他	運動・健康教育研究 6(1), 8-14,	1996
2	保育における育ちをとらえる視点に関する一考察: 「つなぐ」行為から	西垣 吉之, 山田 陽子, 他	中部学院大学・中部学院大学短期大 学部研究紀要 5, 41-56,	2004
3	保育者と保護者の連携: 0歳児~2歳児の連絡帳のメッセージ分析を通して	剣持 安里, 山内 紀幸	山梨学院短期大学研究紀要 26, 43-53,	2005
4	連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程	林 悠子	乳幼児教育学研究 (18), 121-132,	2009
5	保育者-保護者間のコミュニケーションと信頼--保育園における連絡帳のナラティブ分析	二宮 祐子	福祉社会学研究 (7), 140-161,	2010
6	0歳児保育において連絡帳で何がかわられているのか: 連絡帳の意義・再考に向けた探索的研究	森本 美絵, 加用 美代子	京都橋大学研究紀要 (42), 73-90,	2015
7	保育所と家庭を結ぶ連絡帳: 対人コミュニケーション機能に注目して	高 向山, 若尾 良徳	常葉大学健康プロデュース学部雑誌 9(1), 93-98,	2015
8	保育所における幼児連絡帳にみる保育者と保護者の関係変容プロセス	半澤 幸恵	中部教育学会紀要 (15), 30-39,	2015
9	保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義	林 悠子	保育学研究 53(1), 78-90,	2015
10	保育ソーシャルワークのツールとしての連絡帳活用の可能性について	丸目満弓	保育ソーシャルワーク学研究 (1), 25-40	2015

表 2-5 連絡帳に関する分析対象論文の概観

	著者	連絡帳に関する表現・捉え方	目的	方法	結果・考察	本研究との共通点、相違点
1	広沢・清水他 (1996)	・保育者と保護者の相互交流		20保育所の保育者、保護者に対して質問紙調査と、保育者25名、保護者24人に対する聞き取り面接調査を行った	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳は乳児組ではおむね使用されているが、幼児組の使用はごく少ない ・保護者は全園児に使用してほしいという要望が強い ・保育者は口頭での伝達や掲示で十分と捉えている ・連絡帳の種別や形式は様ではない ・記入項目は、健康状態が主で、自由記述は各園の工夫が見られる ・子どもの成長記録としての保育指導に活用される ・家庭で大切に保管される ・家庭で記入者は母親が多く、子どもの見方、接し方の参考になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・共通点は特になし ・現状把握を目的としており、意識的に活用を試みる本研究の捉え方とは異なる
2	西垣・山田他 (2004)	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭からの連絡事項、園から家庭への連絡事項という二つの側面を持つ ・保育における様々な記録の中の一つ ・子どもの育ちを保障するために、家庭と園が有効な連携をとるためのもの 	三つのテーマ ①保育における育ちの特質、 ②つなぐ行為と育ちの関連、 ③子どもの育ちを保障する保育の手立てや保育者の援助の観点について明らかにする	保育や子育ての場における子どもの育ちに関わるエピソードを抽出し、複数人の視点より解釈的な検討を行う	(連絡帳に関連する箇所のみ) 指導上困ったことを家庭に伝える際にも、子どもの成長をお互いに喜びあえる関係を形成するために、子どもの行為の意味を肯定的まなざしで捉える姿勢が大切である ・連絡帳は“育ち”というキーワードをもとに子どもと家庭・保育者とを子どもの発達を保障するためにつなげていくものである	<ul style="list-style-type: none"> ・共通点は特になし ・研究全体が子どもの育ちに主眼をおいていること、連絡帳がメインのテーマではなく、検証方法の一つとして連絡帳が用いられている点で本研究とは異なる
3	剣持・山内 (2005)	・保育者と保護者が信頼関係を築き、連携を深めていくためのツール	連絡帳に記入されるメッセージの内容の構成をつかみ、特に保育者側の記述スタイルの特徴を明らかにする	0歳から3歳未満児までの12人の保護者との約19700メッセージの内容分析を行う	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者のメッセージで一番多いのは「家庭での出来事」である ・保育者のメッセージで一番多いのは、「園での出来事」である ・要望や質問は、両者ともに少ない ・マイナスの記述はほとんど見られず、事実の記述が受容的・共感的な解釈を加えたものがほとんどである ・中には保護者に不安を与え、うまく情報を共有できない場面が見られる一方、詳細な事実説明と保育者のプラス解釈を加えたメッセージは保護者との連携を促進する 	連絡帳に書かれている内容の分類は本研究でも行っている ・「信頼関係」「連携」に焦点化されており、それらを前提とした「実際の支援」に着目する本研究とは着眼点異なる
4	林 (2009)	・保護者と保育者の関係構築のツール	・保護者と保育者の対話の深まりと両者の関係性の変容過程を明らかにする	担任保育士の立場として、担当児の中で最も保護者の記述が多かった1人の幼児連絡帳の記述内容を分析した	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳の記述内容が時間的経過とともに、重層化していくとともに、保護者、保育者の関係は共感的関係に変容している ・連絡帳を通じて、保育者と保護者のそれぞれが成長していく過程を確認した 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳が保護者支援のあり方の一助となる、という視点は本研究と共通する点がある ・保護者支援を行ううえでの「前提条件」として保護者と保育者の連携を深めることに主眼がおかれており、「問題解決」「支援」そのものに焦点化する本研究とは相違点がある。

5	二宮 (2010)	・コミュニケーション メディア	保育者の書き方と 保育者－保護者間 の信頼と相互作用 との関係を追究す る	0～5歳時児クラスに3 年以上通園させた経 験があり、対面でのや りとりが少ないこと、保 育時間が10時間以上 かあるいは保護者以 外の人による送迎、な どの条件を満たし、保 護者からの提供があ った子ども14人の 名義となる連絡帳を、 保護者からの高い信 頼を獲得・維持したク ラスとそうでないク ラスとの連絡帳のナ ラティブを比較	・高信頼クラスは、特有な 書き方により、「発達型」の プロットが明示され、保護 者側に関連づけながら反 復し、保育者－保護者間 で「交渉」的に「組織化」さ れている ・低信頼クラスは、保護者 側プロットが「明瞭な発達 型」に組織されるようはた らきかけがなく、不安定な まま放置され「苦境型」に 変容したり、保護者が記述 をやめてしまう ・保育者の書き方の違い により、信頼関係のあり方 に違いが生じている	・コメント数の比較 や、保護者の記述へ の応答性など、本研 究が着目する観点と いくつか共通したも のがある ・「信頼と相互作用」 に主眼がおかれてお り、本研究の「保護 者が抱える問題の 解決」とは着目点が 異なっている
6	森本・ 加用 (2015)	・家庭と保育所と の連携システムの うち、もっとも身近 なものの一つ ・子どもを育てあう 連携の糸口	基本的生活にかか わる事項(食べる・ 寝る・排泄等)と子 どもの姿について、双 方が何をどのように 記述しているかを分 析し、それらが子 どもを連携して育て るうえでどのような役 割を果たしているか を具体的に探る	保育者にアンケート調 査を実施するととも に、4か所に所属する 7名の子どもの連絡帳 のうち、年間3期のう ち、4、5月の2か月、9 月の2週間、3月の2週 間、全体で373日分 について、様式や保 育者と保護者の記入内 容と特徴、両者の関 連を分析した	・一目で子どもの24時間の 生活を直感的・瞬間的に 把握できる構造や記入上 の工夫がなされている ・記述量は保護者より保 育者の方が記述が多い ・保育者の頻出語は「食 べる」「遊ぶ」「友だち」 である ・保育者は行為の背景とし て子どもの内側で動い ている気持ち、思いをあ わせて記述する特徴が ある ・保護者の記述から子 どもの見方を広げている 場面がある ・保育士へのアンケート では、連絡帳により子 どもの状態把握に加え、 保護者の子育て状況 の把握も行っていた	・質、量の両面から 連絡帳を捉えようと する点、連絡帳にお ける記述量、保育者 に対するアンケート で意識を問う点な ど、本研究と共通し た部分がある ・対象年齢が0歳児、 基本的生活に関わ る事項に限定してい る部分で本研究と研 究対象や視点が異 なっている
7	高・若 尾 (2015)	・一種のコミュニ ケーション行動	保育者が保護者との 相互理解を図る ために連絡帳利用 にどのような工夫を しているか、連絡帳 に書かれた言語的 メッセージがどのよ うな対人コミュニ ケーション機能を果 たしているか明らか にする	4歳児と3歳児の2人 の幼児クラスにお ける連絡帳において、 保育者と保護者との 間で実際に交わされ た言語的メッセージ の内部構造を質的に 分析した	・記入率について、幼児 クラスでは、100% に近い乳児クラスの 記入率に比べて低 く、50～80%台と ばらつきがあったが、 行動の環境や背景に 影響される ・連絡帳における コミュニケーション 行動では、①確 実性の高い情報だけ での文書化、②構 造化されたルール (意図性)、連絡 帳により、親子間 のコミュニケーション が促進されたり、 幼児の姿や気持ち に対して保護者が なんらかの気づき を得ている、③文 書伝達と口頭伝達 の使い分け(容認 性)、の三つの特 徴が確認された	・②の意図性に関 する視点は、本研 究でも着目点とし て共通性がある ・幼児の連絡帳を 対象にしているこ と、ツールの捉え 方が本研究とは 異なる
8	半澤 (2015)	・乳児の連絡帳は 毎日の成長記録 が主な使用目的 である ・幼児の連絡帳は 保護者との相互理 解を深め、そこ から信頼関係形成 へと繋がる、重 要なコミュニケーション ツールの一つ	保育者と保護者の 関係変容に関して 保護者側の立場 で着目し、信頼 関係の形成に繋 がるやりとりは どのようなもので あるかを明らかに にする	著者の第二子の幼 児連絡帳(1年間) の内容をカテゴリー 分類し、分析を行 った	・保育者は幼児の 連絡帳を通して、 客観的事実のみ を伝えるのではなく、 保育者の主観的事 実を伝えることが 保護者の保育者 に対する信頼へと 繋がる ・信頼関係形成の ツールとして活用 することが連絡帳 の有用性である	・幼児の連絡帳は 使い方次第で保護 者支援の保護者支 援のツールとして 活用できるという 視点は共通してい る ・研究対象が異 なる。乳児と幼児 では連絡帳の意 味づけが異なると しており、幼児 の連絡帳に焦点 をあてている

9	林 (2015)	保護者と保育士の相互理解の進展の記録 コミュニケーションツールの一つ	保育の家庭の質を構成する保護者と保育者の関係性の視点から連絡帳の記述に焦点をあて、連絡帳の意義を明らかにする	研究協力者1名の連絡帳のうち、初めて保育所を利用した年(1歳児クラスの5月～翌年3月)の1年分の記録内容をKJ法、さらに時間経過において分析	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳は保育者と保護者の相互理解の記録である ・子どもを軸として、保護者と保育者が変化しあっている ・連絡帳が意義あるものとなるには保育者の資質、さらには保育者間の共有が必要である ・連絡帳は保護者支援の重要な方法の一つとなりうる ・連絡帳が保護者支援の役割を果たすために、保育の実施条件の保障が必要である 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳を保護者支援に活用する視点は、本研究と共通している。 ・支援の前提条件である「相互理解」に主眼がおかれており、本研究の「保護者が抱える問題の解決」とは着目点が異なっている
10	丸目 (2015)	ケアワーク・ソーシャルワークの両方の意味をもつツール	①連絡帳の記入業務の実態、②連絡帳に対する保育士の意識、③連絡帳の記入内容におけるソーシャルワーク機能、の3点を明らかにする	園長・主任・連絡帳業務を行っている保育士60人に対するアンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳はソーシャルワークのツールとして活用できる可能性は高い ・保育士にとって連絡帳はソーシャルワークのツールであるという認識はない ・連絡帳業務の標準化、教育内容の構築が必要である 	
その他、本研究と関連した視点をもつ研究						
11	松本 (2010)	保護者との連携を図るツール	保育学生に連絡帳の意義と役割を学ばせ、文章表現能力の強化をはかる	連絡帳における対応の苦手意識を感じる部分や原因について、研修会において保育士から提出された事例三つの分析とともに、保育専門学校生58名にアンケート調査を行った	<ul style="list-style-type: none"> ・事例から、保護者との間にある「距離感」が見えてきた。その溝を深めてしまった失敗談から、うまく埋めていくために繰り返し学ぶ必要性、失敗した際の保育士同士の連携や園としてのフォローが必要である ・学生の調査からは、文章力のなさからくる不安が大きかったため、何度か「連絡帳を書く作業」を実際に試みて、コツやポイントをすると変化が大きく、負担感から期待感に変化した 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者支援のツールとする視点は本研究と共通している ・養成課程の学生に対するアプローチを研究のメインとしている点、書き方の改善や学生の苦手意識の払拭など、実際の支援に対する土台づくりに着眼しており、本研究における、「実際の連絡帳業務における支援そのもの」という着眼点とは異なる
12	亀崎 (2015)	保育の専門性を活用した保育相談支援の一形態 ・保育士と保護者をつなぐ重要なコミュニケーションツール	保育士養成課程における「保育相談支援」の教授法に関する検討を行う	全4回の授業実践を通じたあと、受講者による連絡帳作成時の原則について記した「原則カード」の分析を行う	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の連続性に対する配慮、子ども理解に基づく代弁と解説、保護者の視点の獲得、子どもへの肯定的まなざしの獲得などが見られた ・受講者集団によって学びの質にばらつきが生じるといった課題が見られる 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育の専門性を活用した支援のあり方を探る点、保育相談支援の一形態としての連絡帳に着目する点に共通点がある ・養成課程の教授内容に焦点をあてており、研究対象が異なる

このように先行研究を整理・概観した結果、表 2-6 のように連絡帳に関する研究を、年代別に三つのパターンに分類することができた。

表 2-6 連絡帳研究における三つのパターン

	連絡帳の意味づけ	主眼	焦点をあてる連絡帳の記述内容	研究目的	連絡帳の役割・機能	研究
パターン I	保育記録としてのツール	子ども	健康状態、基本的生活に関わる事項	実態の把握	交流	広沢ら(1996)、西垣ら(2004)、剣持ら(2005)、森本ら(2015)、
パターン II	保護者支援のツール	保護者	支援の前提条件(信頼関係など)の整備	実践の検証	連携・コミュニケーション・関係性構築や変容	林(2009)(2015)、二宮(2010)、高ら(2015)、半澤(2015)、
パターン III	保育ソーシャルワークのツール	保護者	保護者の不安や悩みの発見、解決(一部)	実践の意味づけ、意図をもった関わりを志向	支援	丸目(2015)

パターン I は連絡帳を「保育記録のツール」と捉える研究である。主眼は子どもにあり、内容も子どもの健康状態や、基本的生活に関わる事項などに焦点があてられている。実態を把握する研究が多く、その中での連絡帳は「交流」の意味合いが強い。そもそも連絡帳が保育業務の一部であることを考えても、パターン 1 の研究は昔から存在し、これからも存在すると推測される。

パターン II は、保育所保育指針において保護者支援概念が出現した直後から見られる。それまでの連絡帳に対する認識は、子どもの成長記録として、保護者への保育指導で活用されるべきものであったが、パターン II では主眼は保護者に移っている。そして連絡帳の果たす役割は、保護者と保育士の連携やコミュニケーション、関係性の構築や変容といった保護者支援を可能性にする前提条件を作り出す役割まで大きく拡大していることがわかる。

パターン III は、保護者に主眼があり、保護者支援のツールと考える点ではパターン II と共通点はあるものの、II の前提保持にとどまらず、保護者支援の具体的方法の一つとしてソーシャルワークの手法を取り入れ、連絡帳を通じた問題発見や問題の一部を解決するといった支援そのものに活用できる可能性を探る意味で、保護者支援の意味合いが異なっている。

第4節 まとめ

本章では、連絡帳を保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとして活用できる可能性を探るべく、第1節において、保育現場における連絡帳の意義を述べ、第2節では保育士が業務を行う上で拠り所となる保育所保育指針解説書において連絡帳がどのように捉えられているかについて、図表化するなど整理・分類を試みた。

さらに第3節では連絡帳に関する先行研究を概観・整理することにより、時代に沿って連絡帳の意義づけが少しずつ変化、発展しつつあることを明らかにした。

保育所保育指針解説書では連絡帳は情報収集のツールとして活用される旨の記述があったが、情報収集にとどまることなく、本研究においては連絡帳の役割をさらに拡大し、保護者支援、ソーシャルワークの一部が行える可能性を持つと捉える。

次章以降では、本章から導かれた「連絡帳は保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとして活用しうる」という仮説に対する検証に入る。現場で働く保育士にとって連絡帳はどのような意識をもって捉えられ、活用されているのか、また実際の連絡帳でどのように活用されているのかについて、量的調査、質的調査の両面から明らかにしたい。

第3章 連絡帳に対する保育士の意識調査

第1節 研究の目的

本研究では、これまで保育領域において保育士のみで保護者支援を担うことに限界があることを述べ、将来的に外部専門職ソーシャルワーカーと協働することが必要であるとする立場に立って論を進めてきた。そして各々の役割分担を考える上で、保育士は自らの専門性を活かした役割を担うことが効果的であり、その意味で、長らく保育のツールとして用いられてきた連絡帳に、新たに保育ソーシャルワークのツールとして意味づけを行い、活用することが有用であると考えた。

本章では、①連絡帳の記入業務についての実態、②連絡帳に対する保育士の意識、③連絡帳の記入内容におけるソーシャルワーク機能の三つを明らかにすることを目的として、保育士を対象に行ったアンケートの調査結果を中心に述べる。

第2節 調査方法

調査対象：近畿エリアにある公立保育所1園、民間保育所4園の計5園

管理職(園長・主任)及び連絡帳の記入を行っている保育士の計60人

(回収率 88.8%)

調査方法：質問紙を各施設に郵送し、回答終了後、施設ごとに返信を依頼した。

調査期間：2014(平成26)年8月27日～9月14日

調査項目：①基本属性に関する項目

勤務形態、資格の取得ルート、キャリア年数、年齢、子育て経験ほか

②連絡帳の記入に関する項目

記入冊数、時間、内容、記入のしやすさ、しにくさ、保護者の悩み発見の有無、対応方法、保護者支援のツールとしての連絡帳の有用性、連絡帳を通じて実践が可能なソーシャルワーク機能ほか

③保護者とのコミュニケーションに関する項目

1日あたりの時間や人数、タイミングほか

倫理的配慮：アンケート調査票に説明文を付記し、①回答は任意であること、②回答は研究のみに使用されること、③個人名が特定されることはないことを明記した。さらに個人情報の取り扱いに十分配慮を行った。

分析方法：回収したデータは、単純集計により全体の状況を把握することを試みた。

さらに一部のデータについては、質問項目間の関係性を調べるために平均値、標準偏差を算出した。

本研究で使用した統計ソフトは、SPSSVer.21 を用いて集計している。

第3節 調査結果

1. 調査を行った保育所について

調査協力を得た保育所は、いずれもクラス担任が児童の午睡中の時間を利用して連絡帳の記入を行うという体制で業務を行っていた。そのため5園中4園は午睡がある乳児クラスのみを対象としており、1園のみが障がいを持つ児童に限り、幼児クラスでも記入を行っていた。なお全ての園には、共通のフォームがあり、その用紙、様式に沿う形で保育士は記入を行っていた。

2. 回答者の属性について

アンケート協力者の属性については表3-1の通りである。

表3-1 回答者(60人)の属性

勤務形態		保育士としてのキャリア年数		年齢	
正職員	44人	1年未満	3人	20～24歳	5人
パート職員	10人	1年以上～3年未満	6人	24～29歳	6人
その他(派遣、契約)	6人	3年以上～5年未満	6人	30～34歳	7人
保育資格の取得ルート		5年以上～10年未満	10人	35～39歳	9人
短期大学	5人	10年以上～	35人	40～44歳	10人
四年制大学	5人			45～49歳	11人
専門学校	13人	子育て経験		50歳以上	11人
保育士試験	36人	あり	29人	無回答	1人
無回答	1人	なし	31人		

3. 日常的なコミュニケーションについて

(1) 保護者とのコミュニケーション

保護者とのコミュニケーションについては図3-1の通りである。

「あまりとれていない」「全くとれていない」を合わせると、25.4%となり、保育士・保護者との日常的なコミュニケーションに関して、約4分の3の保育士はコミュニケーションがとれているとする一方で、約4分の1の保育士はコミュニケーションが不十分であると感じていることがわかった。

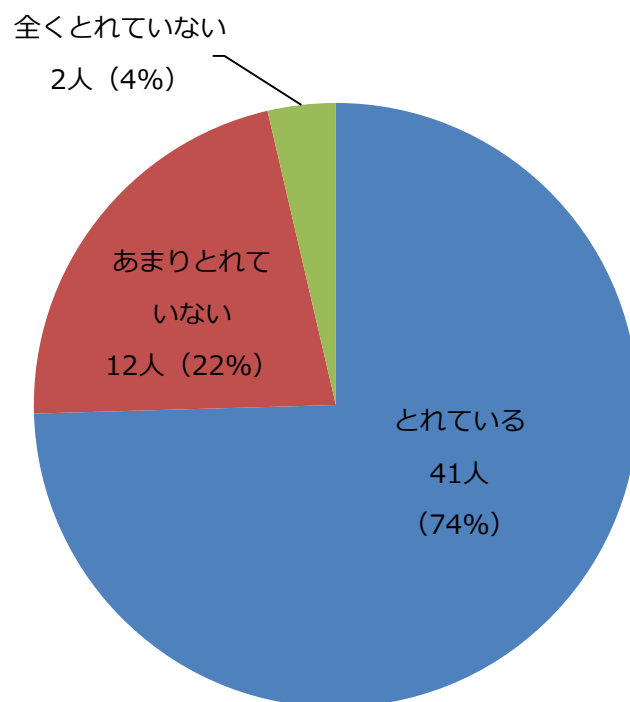


図3-1 保護者とのコミュニケーション

(2) 1日あたりの保護者とのコミュニケーションの時間と人数

1日あたりの保護者とのコミュニケーションの時間については表3-2、1日あたり保護者とコミュニケーションをとる人数については表3-3の通りである。

コミュニケーションの時間や人数については、表3-2を見ると「0分から10分」までの回答が全体の67%を超えている。反対に、表3-3ではコミュニケーションの人数が「10人から50人」までの回答が全体の43%を占める。両者の結果から、「短時間で多人数と」コミュニケーションをとっている図式がうかがえた。

表3-2 1人あたりのコミュニケーション時間

時間 (分)	度数 (人)	パーセント (%)
0	2	5.6
1	3	8.3
2	3	8.3
3	8	22.2
5	4	11.1
8	1	2.8
10	3	8.3
15	3	8.3
20	5	13.9
25	1	2.8
30	2	5.6
60	1	2.8
合計	36	100.0

表3-3 1人あたりのコミュニケーション人数

人数	度数 (人)	パーセント (%)
0人	1	2.7
1人	3	8.1
3人	3	8.1
4人	2	5.4
5人	7	18.9
6人	3	8.1
8人	2	5.4
10人	9	24.3
12人	1	2.7
13人	2	5.4
15人	1	2.7
20人	1	2.7
50人	2	5.4
合計	37	100.0

(3) 保護者とコミュニケーションをとるきっかけ、発言量

保護者とコミュニケーションをとるきっかけについて、保育士側からとることが多いか、保護者側からとることが多いかについて尋ねた項目では図 3-2 の通りとなった。また発言量が多いのがどちらかについても、図 3-3 の通りである。

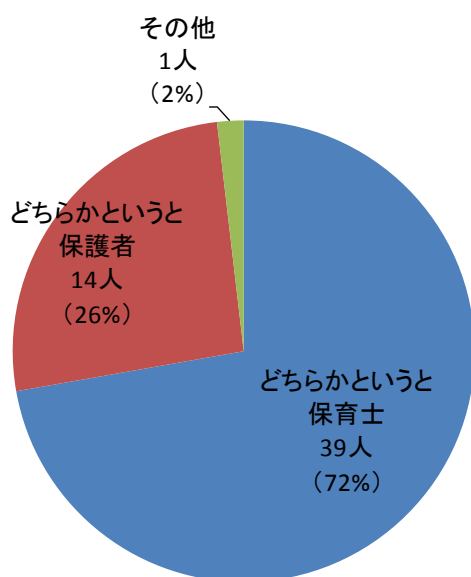


図3-2 コミュニケーションのきっかけ

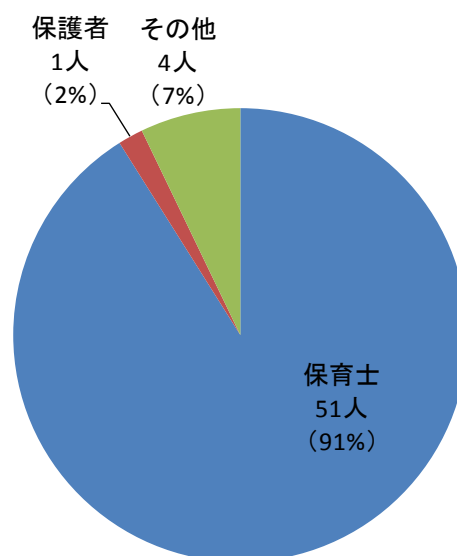


図3-3 コミュニケーションの際の発言量

これらの結果を考え合わせると、本来コミュニケーションがもつ双方向のイメージとは異なり、保育士から保護者に対して行われる“伝達”に近いのが実情であると推測される。

(4) 保護者とのコミュニケーション手段で最も多く用いる手段

保護者とのコミュニケーション手段で最も多く用いる手段については図 3-4 の通りである。

対面でのコミュニケーションが約 6 割を超える一方で、保護者や家庭によっては、結果的に連絡帳が補助的なツールではなく、メインのコミュニケーション手段となっているケースが約 3 割存在することが明らかになった。

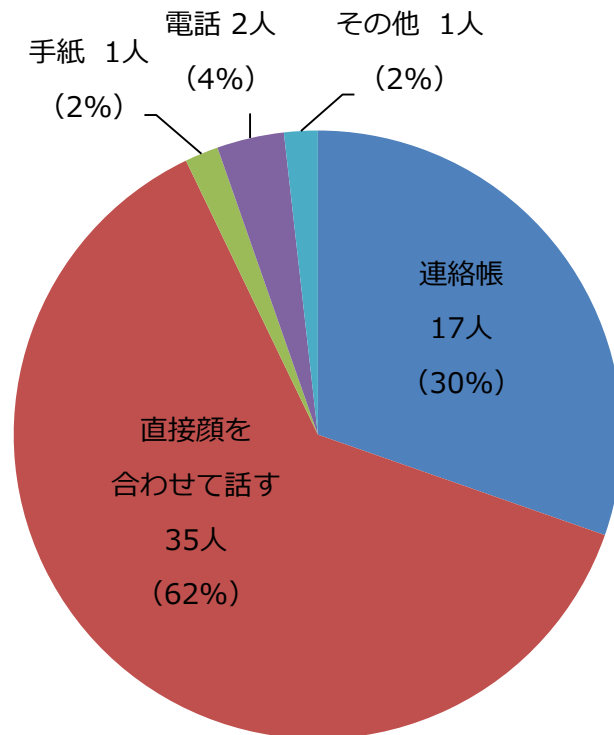


図3-4 コミュニケーションで最も用いる手段

(5) 連絡帳について

① 1回あたりの連絡帳の記入冊数と記入時間

1回あたりの連絡帳の記入冊数は、表 3-4 の通りであり、平均は 5.47 冊であった。また記入時間については表 3-5 の通りであり、平均は 28.52 分となった。

表3-4 1回あたりの連絡帳の記入冊数

冊数 (冊)	度数 (人)	パーセント (%)
3	9	17.6
5	9	17.6
2	7	13.7
4	7	13.7
6	6	11.8
10	5	9.8
7	4	7.8
1	1	2.0
13	1	2.0
17	1	2.0
20	1	2.0
合計	51	100.0

表3-5 1回あたりの連絡帳記入時間

時間 (分)	度数 (人)	パーセント (%)
30	15	30.0
40	10	20.0
15	8	16.0
20	7	14.0
60	4	8.0
3	2	4.0
10	2	4.0
5	1	2.0
45	1	2.0
合計	50	100.0

表3-4、3-5を見ても明らかであるように、記入冊数は3冊から20冊、1回あたりの記入時間についても3分から60分と、最小値と最大値の開きは大きい。

②連絡帳を通した保護者の悩みや困りごとに関する発見の有無とその内容

連絡帳を通じて保護者の悩みや困りごとを発見することは、図3-5の通りである。またその内容については図3-6の通りとなった。

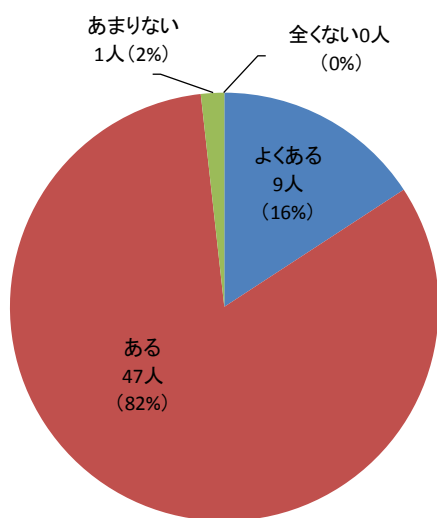


図3-5 保護者の困りごとの発見

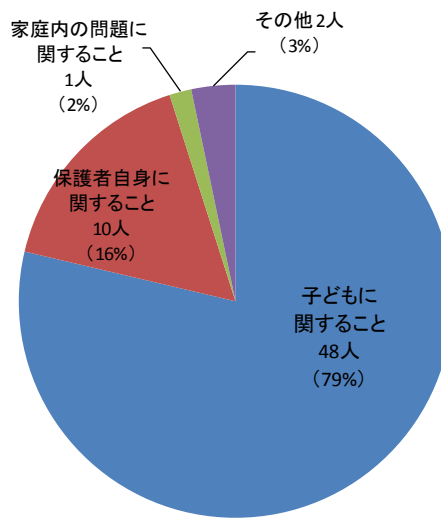


図3-6 困りごとの内容

一人を除く全ての保育士が、連絡帳を通して保護者の悩みや困りごとに気づいていた。その内容の約8割は子どもに関することであるが、一方で保護者自身や家庭内の問題が約2割を占めていることも明らかになった。

③保護者の悩みや困りごとに気づいたときの対応と具体的な対応方法

保護者の悩みや困りごとに気づいた際、「対応する」と57人全員の保育士が回答した(図3-7参照)。また具体的な対応方法については、図3-8の通りである。

「対応しない」と回答した保育士は一人もおらず、連絡帳によるケースの発見が具体的な保護者支援への動きにつながっていた。約1割の回答者が管理職などへ対応を依頼するほか、約8割はケースに気づいた保育士本人が対応している。さらに約半数強の回答者は対面でのコミュニケーションにより保護者にアプローチしている一方で、約4分の1の保育士は連絡帳を通じて対応を行っていることも明らかとなった。

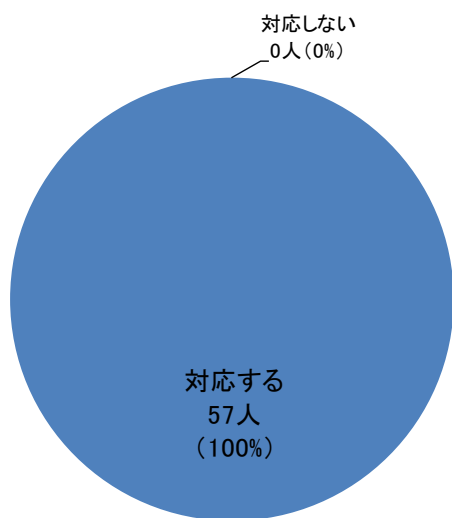


図3-7 困りごとへの対応の有無

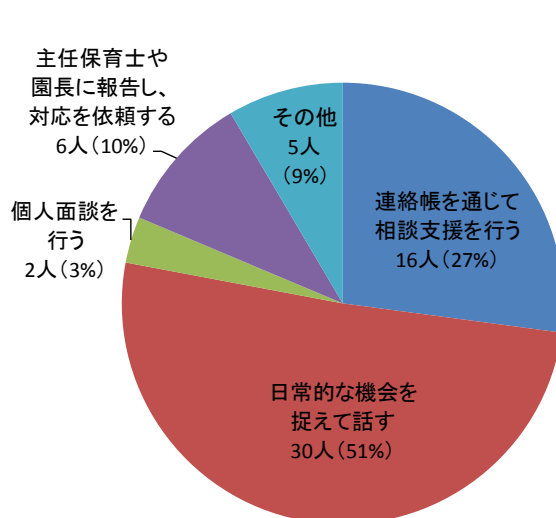


図3-8 具体的な対応方法

④保育ソーシャルワークの連絡帳活用の有用性と有用であると感じる理由

連絡帳を保育ソーシャルワークのツールとして役立っているかどうかについて尋ねた結果が図3-9である。さらに連絡帳が保育ソーシャルワークのツールとして有用であると感じる理由については図3-10の通りとなった。

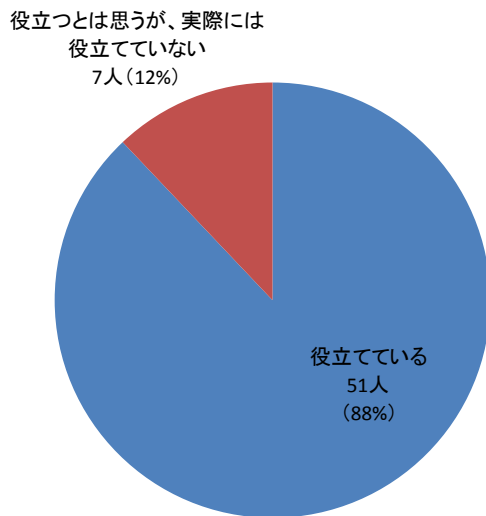


図3-9 保護者支援としての連絡帳活用

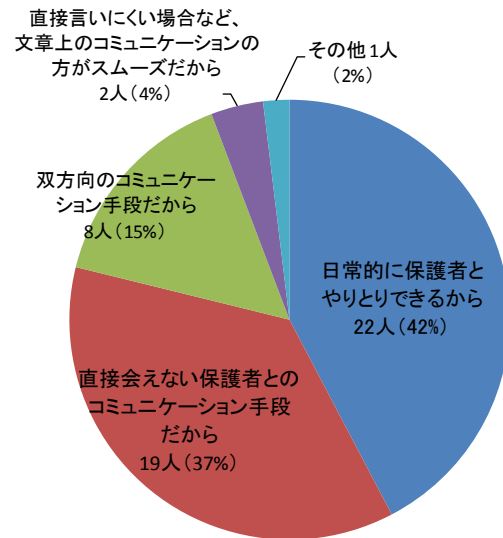


図3-10 連絡帳の有用性を感じる理由

回答者全員が連絡帳はソーシャルワークツールとして「役立つ」と回答している。ただし、役立つと思いながら、実際に役立てられていない、つまり理想と実践に差があるとする回答も約1割強見られた。

また前述したように、対面でのコミュニケーションに対して「補助的」なコミュニケーションツールと捉えられてきた連絡帳であるが、その他にも約4割は「日常的」、約4割弱は「確実に」、約2割弱は「双方向」の支援ができる、強みを持ったツールであると捉えていることがわかった。

⑤連絡帳に関する自由記述

60人中8人と少数ではあるが、連絡帳に関する自由記述の欄に記述があった。記述内容については、表3-6の通りである。

表3-6 連絡帳に関する自由記述

1	保護者が知ることのできない、保育園での子どもの様子が目に浮かぶように書こうと心掛けている。
2	その日の印象に残ったエピソードを書くように伝える。文章でどこまで分かりやすく届けられるのか意識していた。子どもの生活面、遊び等、子ども自身がしんどそうな時、続いたりすると連絡ノートにも記入しつつ、直接会ってもう1度その時の状況を伝えるようにしていた。乳児にとっては、生活・睡眠時間・食事等記入するところがあると保育していて、てきめんにてくるので見えてくるものがある。
3	記入しただけでは伝わりにくい事は必ず口頭で説明等している。
4	保護者の不安や悩みを連絡帳を通じて知ったり、感じたりした場合も保護者とのコミュニケーションは、直接話をする。文章だけではお互いの意図が伝わりづらい。
5	楽しかったエピソードを記入する。保護者の記入したコメントに一言返す。連絡帳では大切な話をあまりせず、直接話すことで保護者の考えがより理解でき、また保護者側の考えも伝えやすい。保護者支援の一つとしての活用はあると思うが、やはりノートだけでは誤解も生まれやすいので対話が重要だと思っています。
6	保護者の記入に関しての一言の返事や共感・専門的な事で伝えられることなど。
7	否定的な意見は書かない。
8	ずっと残るものなので、伝える内容の表現、文章に気をつけています。

従来の“保育のツール”としての記述内容に関する1や2以外は、前項の項目では連絡帳活用の有用性を高く評価している結果とは対照的に、連絡帳を積極的に活用することに否定的であったり、躊躇する様子が感じられた。

3、4、5のように、連絡帳をこれまで考えられてきたように、あくまで補助的なツールとし、直接的なコミュニケーションを重視する考え方や、3、5、6、7のように深い内容を避ける、ポジティブな内容に限定するなど、“当たり障りのない”内容にとどめようとする傾向も見える。その理由として、8にもあるような文章でのコミュニケーションが持つリスクを意識・考慮していると推測される。

(6) 連絡帳を通じて行うソーシャルワークについて

① 質問項目の設定

保育ソーシャルワークという概念に対して、全ての保育士が共通したイメージを持っているわけではない。また保育とソーシャルワークでは専門領域が異なることから、一部のソーシャルワークの文言や概念に対する理解が難しいことが想定された。そのため本調査においては「ソーシャルワーク」という表現そのものを用いず、ソーシャルワーク機能ごとに保育現場においてイメージしやすい文章表現に変換するために、現場の保育士と意見交換を行った。その結果、「困り感がある保護者」に対して行う場合と、「困り感が希薄な場合であっても保育士自身が関わる必要性があると感じている保護者」の二つの場合があり、鶴(2009)の「ソーシャルワークの機能・役割と保育士」を参考にしながら、12の質問項目を作成した(表3-7参照)。

表3-7 連絡帳を通じて行うソーシャルワークに関する質問項目

1	保護者の不安や悩みに気づくこと	保護機能
2	保護者の不安や悩みに寄り添い・共感すること	相談援助機能
3	保護者の不安や悩みに対して、具体的にアドバイスをすること	教育機能
4	保護者の不安や悩みに対して、保育所外の子育て支援サービスの紹介や情報提供をすること	仲介機能
5	子どもの成長・発達を伝え、保護者の不安や悩みを未然に防ぐ(予防する)こと	保護機能
6	子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対して理解を深められるようにすること	教育機能
7	子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対する喜びを実感できるようにすること	支援者機能
8	子どもの成長・発達を伝え、保育所外の子育て支援サービスの紹介や情報提供をすること	仲介機能
9	保育者の子どもに対する関わりを伝え、保護者に保育所や保育士に対する信頼をもってもらえるようにすること	支援者機能
10	保育者の子どもに対する関わりを伝え、家庭と園が連携して子育てができるようになること	連携機能
11	親子の関係がうまくいくように仲立ちすること	代弁・弁護機能
12	保護者同士の関係がうまくいくように仲立ちすること	調停機能

出典：鶴宏史(2009)「保育ソーシャルワーク論－社会福祉専門職としてのアイデンティティ」

あいり出版、p.74を参考に作成

さらに、実際に連絡帳を記入している際にソーシャルワーク機能を行っているかどうか、実践してはいないが、ソーシャルワーク機能が行える可能性があるか、の二つに分け、「よくある」4点、「ある」3点、「あまりない」2点、「全くない」1点の4段階で点数化し、集計を行った(表3-8、表3-9、図3-11、図3-12参照)。

表3-8 実際の連絡帳業務で行っているソーシャルワーク機能

	平均値	標準偏差
気づく	3.16	0.59
寄り添う	3.31	0.51
アドバイス	3.04	0.59
情報提供	2.00	0.95
予防	2.76	0.75
理解促進	3.06	0.63
喜びの実感	3.35	0.56
情報提供2	2.00	0.94
信頼感醸成	3.13	0.61
連携した子育て	3.15	0.58
親子関係の仲立ち	2.69	0.77
保護者関係の仲立ち	1.85	0.80

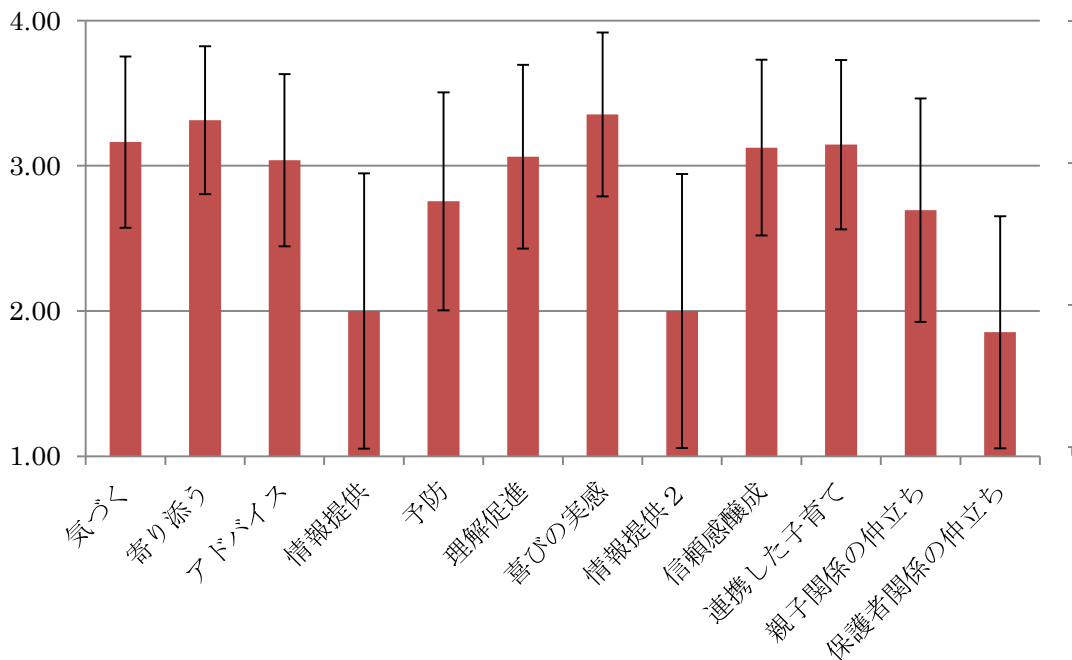


図3-11 実際の連絡帳業務で行っているソーシャルワーク機能

表3-9 連絡帳業務の中で活用できる可能性があるソーシャルワーク機能

	平均値	標準偏差
気づく	3.11	0.63
寄り添う	3.17	0.67
アドバイス	2.96	0.76
情報提供	2.28	0.90
予防	2.85	0.69
理解促進	3.04	0.66
喜びの実感	3.25	0.68
情報提供2	2.21	0.80
信頼感醸成	3.15	0.64
連携した子育て	3.17	0.65
親子関係の仲立ち*	2.85	0.69
保護者関係の仲立ち	1.90	0.87

(*)対応のあるt検定の結果、有意差が見られた項目

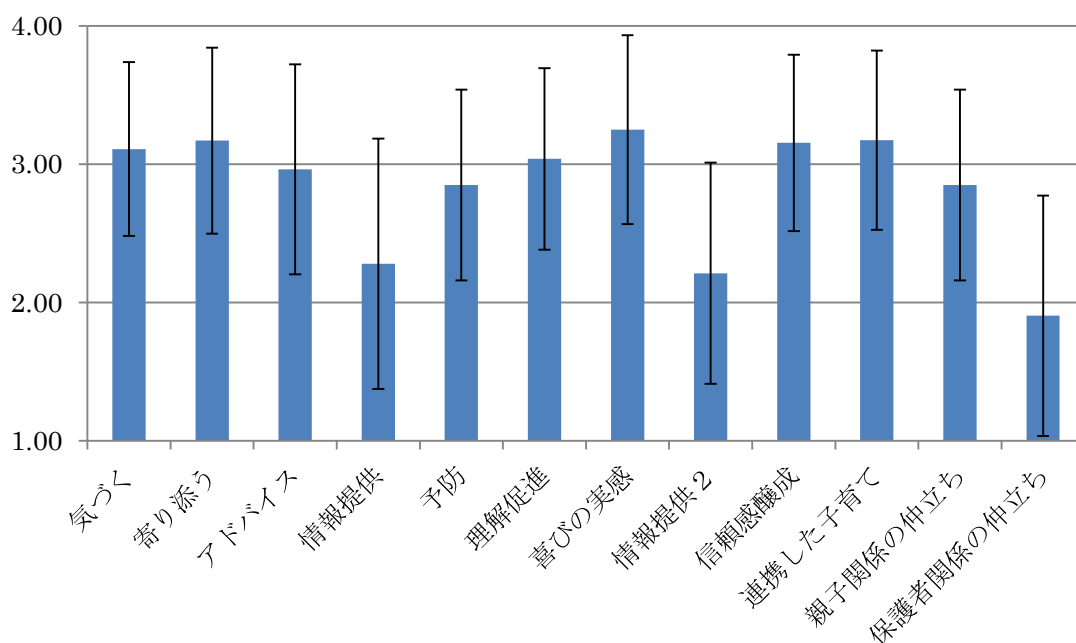


図3-12 活用できる可能性があるソーシャルワーク機能

② 連絡帳を通じて実際に行っているソーシャルワーク機能

a) 平均値の高い上位 3 項目

連絡帳業務を通じて実際に行われているソーシャルワーク機能のうち、平均値が高かった上位 3 項目は、平均値が高い順に支援者機能(保護者が子育てに対する喜びを実感してもらうこと)、相談援助機能(不安や悩みへ寄り添い、共感すること)、保護機能(保護者の不安や悩みに気づくこと)であった。

b) 平均値の低い下位 3 項目

一方で、連絡帳を通じて実践されているソーシャルワーク機能の平均値が低かった下位 3 項目は、調停機能(保護者同士の関係改善のための仲立ちをすること)、仲介機能(保育者が必要と判断した場合に、保育所外の子育て支援サービスの紹介や情報提供をすること)、仲介機能(保護者の不安に対して保育所外の子育て支援サービスについての情報提供をすること)の順となった。

③連絡帳を通じて今後活用できる可能性があるソーシャルワーク機能

a) 平均値の高い上位 3 項目

現状において実践はできていないが、今後活用できる可能性があるソーシャルワーク機能の上位 3 項目については、支援者機能(保護者が子育てに対する喜びを実感してもらうこと)が最も平均値が高く、相談支援機能(不安や悩みに寄り添い、共感すること)、連携機能(家庭と園が連携して子育てができるようになること)が同率で 2 位となった。前項の連絡帳を通じて実際に行っているソーシャルワークと上位 2 項目は同じであった。

b) 平均値の低い上位 3 項目

同様に、今後活用できる可能性があるソーシャルワーク機能の下位 3 項目については、調停機能(保護者関係の仲立ちをすること)、仲介機能(保育者が必要と判断した場合に、保育所外の子育て支援サービスについての情報提供をすること)、仲介機能(保護者の不安に対して保育所外の子育て支援サービスについての情報提供をすること)と続いた。こちらも前項の連絡帳を通じて実際に行っているソーシャルワークにおける下位項目と同じであった。

これらの結果から、実践している、今後活用できる可能性がある項目ともに上位に挙げられる項目は、いずれも子どもに対するケアワークの延長線上にある役割であった。反対に下位に挙げられる項目は、「介入する」「つなぐ」など、専門職であるソーシャルワーカーが本来業務としている役割であった。

④連絡帳業務におけるソーシャルワーク機能の理想と実践の差

各項目間の理想と実践の差を検討するために、対応のある t 検定を行ったところ、代弁・弁護機能(親子関係改善のための仲立ち)について有意差が見られた。すなわち 12 項目の中で、最も理想と実践のギャップが大きかった項目とすることができる。次に、各項目間の得点の標準偏差の大小について検討した。標準偏差の値が大きい項目は、個々の保育士によって実践に違いが見られることを意味しているが、大きい順に仲介機能(保護者の不安や悩みに対する子育て支援サービスの紹介や情報提供)、仲介機能(子どもの成長や発達のみから保育士が必要であると感じた子育て支援サービスの紹介や情報提供)、調停機能(保護者関係の仲立ち)の順となった。活用できる可能性があるソーシャルワーク機能についても同じであった。反対に標準偏差の値が小さく、おしなべて広く保育士が行っているソーシャルワーク業務は、実践および活用できる可能性の両方とも相談援助機能(子育ての喜びを実感させること)、支援者機能(子育ての喜びを実感させること)、連携機能(家庭と園が連携し他子育ての実現)となり、活用できる可能性があるソーシャルワーク機能についても、同じ順となった。これらの結果からは、当然のことながら、項目によって実践には大きなばらつきがあることが確認された。

第 4 節 まとめと考察

1. まとめ

まとめとして、以下の点が明らかになった。

(1)保育士・保護者間のコミュニケーション全般について

- ①保育士と保護者間のコミュニケーションについて、約 4 分の 1 の保育士はコミュニケーションがとれていないと感じている。
- ②保育士が「短時間で多人数」の保護者とコミュニケーションをとっている現状からは、保育士から保護者への一方向的な“伝達”というイメージに近い。
- ③対面でのコミュニケーションが約 6 割を超える一方で、連絡帳が主たるコミュニケーションの手段となっているパターンも約 3 割存在している。

(2)連絡帳業務について

- ①連絡帳の記入冊数や 1 冊の記入時間は、個々の保育士により大きく異なる。
- ②連絡帳を通じて、ほぼ全ての保育士が保護者の悩みや困りごとを発見し、それらのお気付きに対して全員が何らかの対応を行っている。

(3)連絡帳に対する保育士の意識について

- ①回答者全員が連絡帳はソーシャルワークツールとして役立つと回答している。
- ②役立つと考える反面、実際には役立てられていないという回答が約1割あった。
- ③保育士は連絡帳に対して、「日常的」「確実」「双方向的」ツールであると様々なメリットを感じている。

(4)連絡帳を通じて行うソーシャルワークについて

- ①連絡帳を通じて行われているソーシャルワーク機能のうち、保育士によって最も行われているもの、行われる可能性が高いものは、ケアワークの延長線上にある役割である。
- ②連絡帳を通じて行われているソーシャルワーク機能のうち、保育士によって最も行われにくいもの、行われる可能性が低いものは、「つなぐ」「介入する」などソーシャルワーク本来の役割である。

2. 考察

本調査の研究目的であった、①連絡帳の記入業務についての実態、②連絡帳に対する保育士の意識、③連絡帳の記入内容におけるソーシャルワーク機能について概ね明らかにできたと考える。以下では調査結果に対する考察を行う。

(1) 専門職が行う業務の一つとして連絡帳業務の標準化、教育内容の構築が必要である

前項の(2)の①、④から、連絡帳業務は個々の保育士によって大きく異なる。業務実態が異なるということは、記入内容という質的な部分にもばらつきが大きく出ることが想像に難くない。高(2013)の「(連絡帳そのもののあり方は)実質的には個々の現場に任せられる形となっている」という現状の指摘を改善すべく、専門職が行う業務の一つとして、連絡帳業務の質的、量的あわせた標準化が必要である。

(2) 連絡帳はソーシャルワークのツールとして活用できる可能性が高い

前項の(2)の②、③、④から、連絡帳がソーシャルワークのツールとして活用できる可能性は高いといえる。連絡帳はケアワーク業務を妨げずに、ソーシャルワークが実践できるという貴重なツールであり、ぜひ活用に向けての取り組みを開始することが必要である。

(3)連絡帳により、すべてのソーシャルワーク機能が担えるわけではない

一方で(3)の①、②からもわかるように、連絡帳によって全てのソーシャルワーク機能をカバーできるわけではない。今の段階では、例えば下位3項目について、それが文章

上のコミュニケーションでは実現しにくいのか、連絡帳業務に限らず、保育士が担いにくいのか、という検証まではできておらず、今後は連絡帳を用いて支援可能な機能、そうでない機能の整理・分類が必要である。

(4)保育士にとって連絡帳はソーシャルワークのツールであるという認識は乏しい

前項のまとめの(2)の⑤から、連絡帳を従来の保育のツールとして考えている記述のほか、連絡帳をソーシャルワークのツールとして活用することに積極的でない意見も見られた。時間をかけながら、保育士の意識改革から始めることが必要である。

以上のように、アンケート調査の結果から、保育ソーシャルワークのツールとして活用できる可能性と課題が同時に見えてきた。次章では、実際の連絡帳の記述内容を分析することで、意識と実践との関連、連絡帳をツールとした支援が実際に行われているかどうかの検証を行う。

第4章 連絡帳における保護者支援の実態調査～記述内容に関する分析 を通して～

第1節 研究の目的

前章では、保育士の連絡帳業務に対する意識、業務実態、そして連絡帳の記入内容におけるソーシャルワーク機能についての明確化を試みた。

本章では、保育所で実際に記入されている連絡帳の記述内容を分析することにより、保育士が連絡帳を通じて行っている保護者支援、保育ソーシャルワークの実態把握を行う。具体的には①記述文字数、②記述内容のカテゴリー分類、③保育士と保護者の応答率、④記述内容におけるソーシャルワーク的関わりの有無の四つについて明らかにする。

第2節 研究の概要

1. 調査対象

(1) 分析の対象データ

大阪府内の民間保育所 A 園において調査の同意を得た、2015(平成 27)年度に在籍する 0 歳児 8 名、1 歳児 16 名、2 歳児 7 人の合計 31 人を分析対象とした(表 4-1 参照)。

データの記録時期は 2015(平成 27)年 4 月 1 日～7 月 30 日の内容としているが、一部は、4 月と 7 月に限定している。その理由として、新年度や入所間もない、最も保護者の不安が高いと予想される 4 月と、数ヶ月が経過し、子どもも保育所での生活に慣れ、保護者も保育士との関係が構築できている 7 月を概観することで、連絡帳の使われ方がより重層的に把握できると考えたからである。

なお、データ収集を行う際、予め保育所側に児童のクラス、何番目の子どもであるか、保護者の育児不安の高さについて、3 段階で尋ねた情報も同時に得ている。

A 園の特徴としては、「0 歳児クラス」を除き、異年齢保育を実施している。年齢が異なる園児で構成される“縦”クラスの活動と、同じ学年の園児で構成される“横”クラスの活動が存在し、基本的には“縦”クラスによる活動が中心である。0, 1, 2, 3 歳児は「乳児 A」、「乳児 B」、「乳児 C」クラス、3, 4, 5 歳児は「幼児 A」、「幼児 B」、「幼児 C」クラスに在籍している。子どもの発達状況に応じてクラス移行を行うシステムをとり、0 歳児は歩行、3 歳児は着替え、排泄などの自立が可能になった時点で 0 歳児クラスから乳児クラス、乳児クラスから幼児クラスへ移行する。

本調査における調査協力園児の内訳は、乳児 A クラス 7 人(23%)、乳児 B クラス 16(52%)人、乳児 C クラス 8 人(26%)である。そして第一子が 18 人(58%)、第二子が 12 人(39%)、第三子が 1 人(3%)となった。育児不安については「高い」18 人(23%)、「普通」18 人(58%)、「低い」が 6 人(19%)であった。

(2) A 園について

A 園は、大阪のベッドタウンである B 市にある私立の認可保育所である。保育所の周辺には大きな工場があり、古くから居住する住民がいる一方、近年は大型マンションが多く建設され、転居してくる子育て世帯が増えている。通園児のほとんどは周辺地域に住んでいる一方、特色ある教育を提供する A 園に入所を希望して校区外から通園する家庭もある。

(3) A 園における連絡帳

A 園では、「0 歳児クラス」および「乳児クラス」の児童を対象に連絡帳の記入を行っている。連絡帳は、0 歳児クラスおよび乳児クラスの担任が記入し、幼児クラスに移った時点で終了となる。記入は午睡の時間に行われ、0 歳児クラスは 5 人、乳児クラスは 1 クラスにつき 3 人の担任が記入する。市販の B6 サイズのノートに、①食事、②排泄、③午睡の時間が所定の記入事項とされ、その後に自由記述の欄が設けられている。加えて乳児クラスのみ、保育所でも家庭でも一日の生活リズムを書くことになっている。そのため 0 歳児クラスの保護者は前述したように家庭での生活リズムを書くことが必須となっているが、乳児クラスの保護者は連絡帳に対する記述は任意となっている。

2. 倫理的配慮

調査の実施にあたり、保育園には口頭および書面にて説明を行い、調査の協力に関する同意書を得た。次に、保護者に対しては本調査の目的と趣旨について書面で説明を行い、同意や協力が得られた園児の連絡帳を対象とした。

その際、プライバシー保護の観点から、個人情報の取り扱いには細心の注意を払い、一部のデータについては個人が特定されないため、内容に支障がない程度にデータの加工を行っている。なお、本調査は大阪総合保育大学研究倫理委員会の審査、承認を得て調査を実施した(児保研-003)。

表4-1 調査協力園児

調査対象園児	年齢	クラス	第何子	親の育児不安
1	0	B	2	2
2	0	A	1	2
3	0	A	1	3
4	0	B	2	2
5	0	B	1	2
6	0	A	1	1
7	0	B	1	3
8	0	B	2	2
9	1	C	2	2
10	1	C	3	2
11	1	A	2	3
12	1	C	2	2
13	1	A	1	2
14	1	B	1	1
15	1	B	2	2
16	1	C	2	2
17	1	B	2	2
18	1	B	1	2
19	1	C	1	1
20	1	A	1	1
21	1	B	2	3
22	1	C	1	3
23	1	B	1	1
24	1	A	2	2
25	2	B	1	2
26	2	B	1	3
27	2	B	2	2
28	2	C	1	1
29	2	C	1	1
30	2	B	1	2
31	2	B	1	2

育児不安…高い1、普通2、低い3

第3節 調査結果

1. 記述文字数

まず、全体的な傾向を把握するために、4月から7月にかけての全ての記述について、①年齢、②月、③子ども、④クラス、⑤保護者の記述量、⑥育児不安の高さの別に、記述文字量を測定した。

(1) 子どもの年齢別に見る保育士の平均記述量

年齢別に見た平均記述量は、月ごとの差はそれほど見られなかったものの、0歳児が137.6文字、1歳児が174.6文字、2歳児が166.9文字であり、一番記述量の多い1歳児と一番記述量の少ない0歳児を比較すると約20%の差が見られた(表4-2、図4-1参照)。

表4-2 年齢別、月別平均記述量 (単位：文字数)

	4月	5月	6月	7月	平均記述量
0歳児平均	142.1	124.9	143.4	140.1	137.6
1歳児平均	173.0	170.3	177.5	175.9	174.2
2歳児平均	162.5	168.1	169.8	167.1	166.9

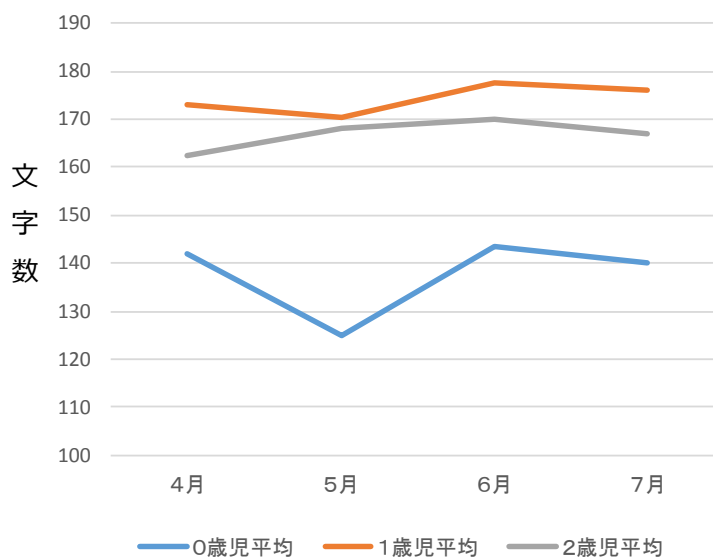


図4-1 年齢別、月別平均記述量

(2) 子どもごとに見る保育士の平均記述量

子どもごとの平均記述量は、表4-3、図4-2の通りである。子どもによって、記述量に大きな差が見られ、記述量が最も多い子どもは平均すると206.8文字、少ない子どもは115.3文字となり、その差は91.5文字と大きく異なっていた。

表4-3 子どもごとの記述量 (単位:文字数)

		4月	5月	6月	7月	平均
記述量が多い	A	221	182	200	224	206.8
	B	215	219	207	179	205.0
	C	196	199	209	185	197.3
記述量が少ない	D	166	128	119	115	132.0
	E	135	116	122	128	125.3
	F	115	115	112	119	115.3

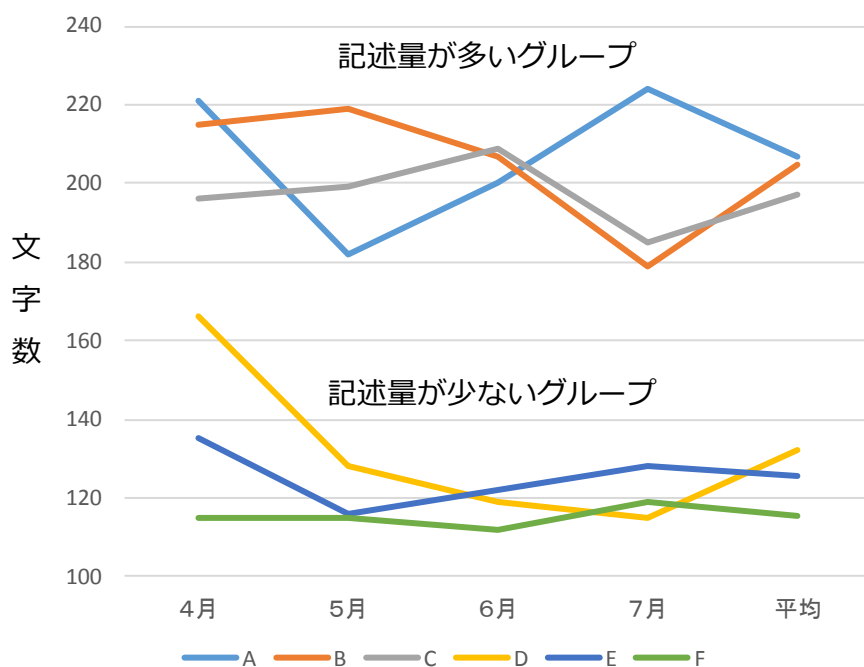


図4-2 子どもごとの記述量

(3) クラスごとに見る保育士の平均記述量

クラスごとの記述量を示したものは表4-4、図4-3である。各クラスの平均記述量は0歳児クラス 139.8文字、乳児Aクラス 192.2文字、乳児Bクラス 169.5文字、乳児Cクラス 164.8文字であった。

クラス間に平均記述量の差が見られ、一番記述量の多いクラスと少ないクラスでは、最大 52.4文字の差が見られた。

表4-4 クラスごとの記述量
(単位：文字数)

0歳児組	139.8
乳児A組	192.2
乳児B組	169.5
乳児C組	164.8

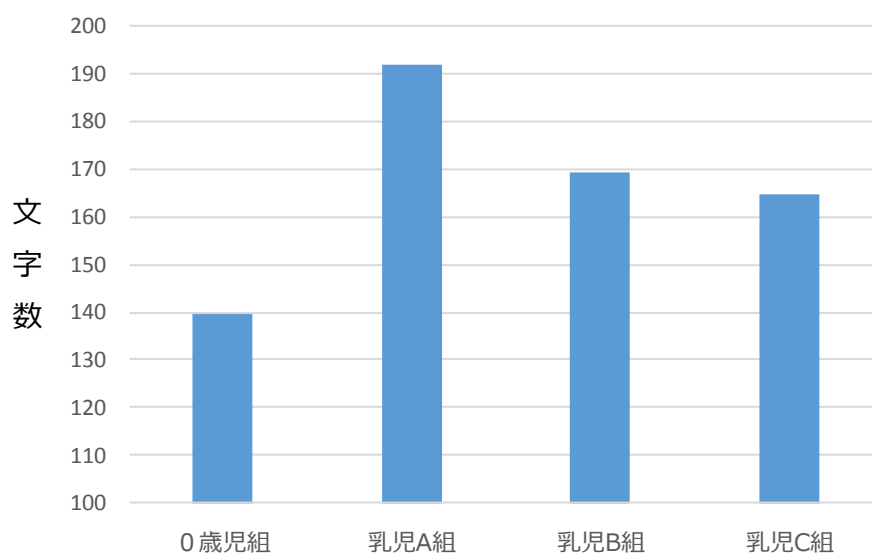


図4-3 クラスごとの記述量

(4) 保護者の記述量に見る保育士の記述量

保護者の記述量と保育士の記述量の関係を示したものが表4-5、図4-4である。このようにみると、保護者の記述量と保育士の記述量には、あまり関連は見られなかった。

表4-5 保育所記述と保護者記述における記述量の関係 (単位：文字数)

		日付																														
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
保育所記述	133	161	135	158	115	171	135	144	160	170	186	159	208	209	168	174	159	168	164	195	159	152	175	177	168	173	151	174	176	165	171	
保護者記述	52	56	120	85	0	127	93	137	17	93	0	0	16	191	145	72	5	148	68	112	5	0	189	14	203	0	25	86	85	85	104	

250

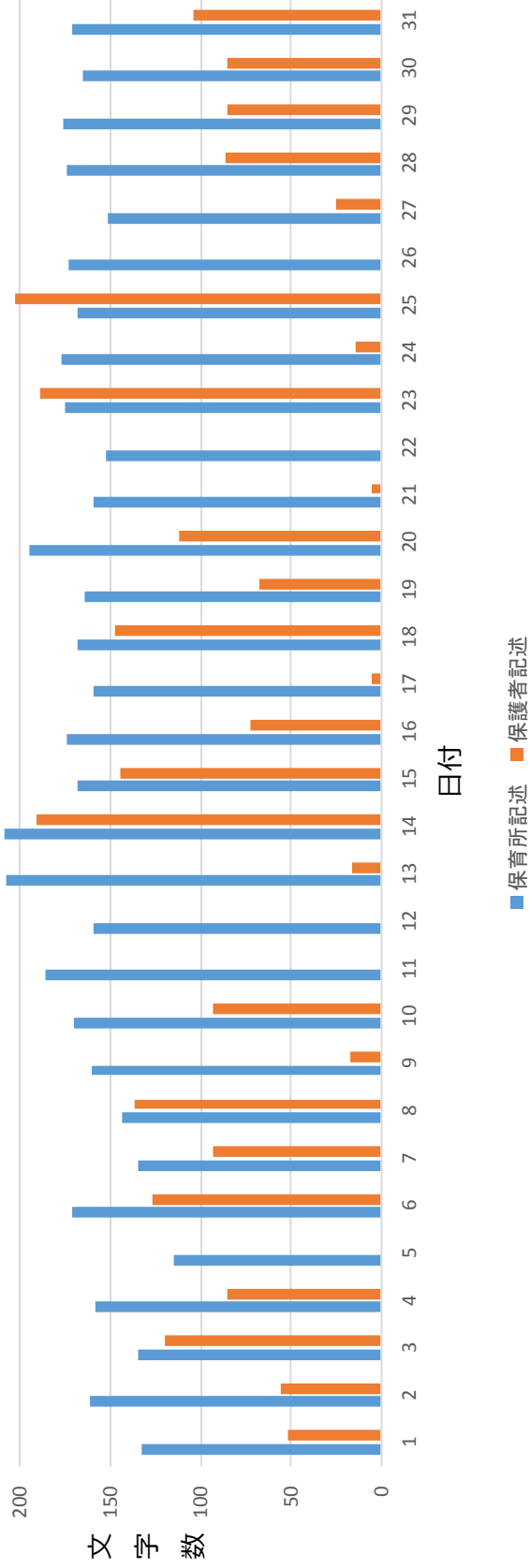


図4-4 保育所記述と保護者記述における記述量の関係

(5) 保護者の育児不安に見る保育士の記述量の関係

保護者の育児不安と保育士の記述量の関係を示したものが、表4-6、図4-5である。育児不安が高い保護者の平均記述数は175.7文字、育児不安が普通の保護者は159.6文字、育児不安が低い保護者は161.7文字であった。

保育士は育児不安の高い保護者に対して、そうでない保護者よりも約15文字記述量が多いことがわかった。

表4-6 育児不安と記述量
(単位：文字数)

育児不安が高い	175.7
普通	159.4
育児不安が低い	161.7

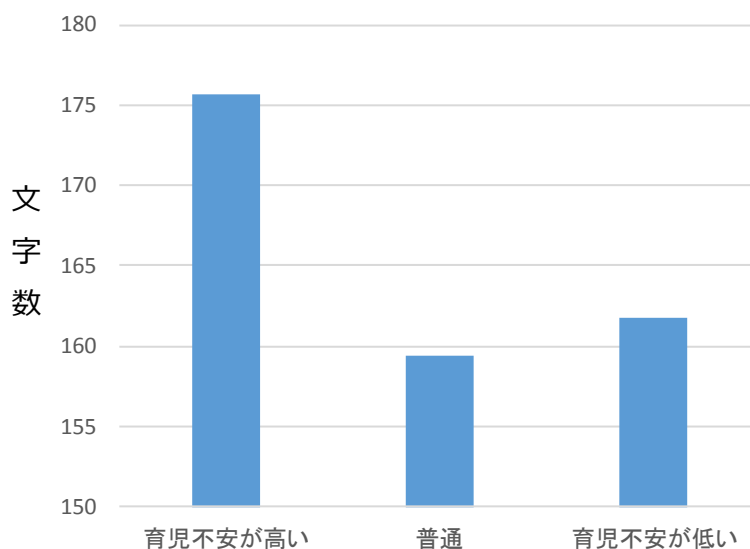


図4-5 育児不安と記述量

(6) 記述文字数に関するまとめ

以上の調査結果から、記述量は一様ではなく、保育士側、子ども側など、様々な要因、その組み合わせにより影響を受けていると推測される。

0歳児の連絡帳について研究を行った森本・加用(2015)による、「保育者平均字数は106

字～186字)、「保育者の記述量に保護者の記述量が影響を受けているとはいえない」の結果とも概ね合致していた。

記述量が多いことが良い、記述量が少ないことが悪いということは一概にいえない。しかし記述量の差は、保護者が得られる情報量の差といいかえることもできる。その違いが生じる要因について、次項以降で丁寧に探る必要がある。

2. 記述内容のカテゴリー分類

連絡帳に書かれている記述内容について把握するため、4月および7月の記述を表4-7の通りカテゴリー分類した。

表4-7 記述内容に関する分類項目

保 護 者	1	子どもの発達に関して
	2	家での遊び(活動)に関して
	3	保護者と子どもとの関わりについて
	4	子ども同士の関係について
	5	家庭での養育に関して
	6	子どもの表情、発言、つぶやきに関して
	7	生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して
	8	健康や病気に関して
	9	①～⑧以外の、保育者のコメントに対する応答
	10	保護者が抱える不安や悩みについて
	11	その他
	12	コメント無し
保 育 士	1	子どもの発達に関して
	2	保育所での遊び(活動)に関して
	3	保育士と子どもとの関わりについて
	4	子ども同士の関係について
	5	家庭での養育に関して
	6	子どもの表情、発言、つぶやきに関して
	7	生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して
	8	健康や病気に関して
	9	①～⑧以外に対する、保護者への応答
	10	保護者の不安や悩みに対する返答
	11	その他
	12	コメント無し

(1) 保育士および保護者の記入内容

保育士および保護者が連絡帳の自由記述欄に記入した内容については、表4-8、表4-9、図4-6、図4-7の通りとなった。

表4-8 保育士が連絡帳の自由記述欄に記入した内容 (単位：%)

	4月	7月
子どもの発達に関して	71.8	85.7
家での遊び(活動)に関して	69.3	77.4
保護者と子どもとの関わりについて	46.3	56.9
子ども同士の関係について	29.1	28.5
養育に関して	1.2	0.3
子どもの表情、発言、つぶやきに関して	57.0	69.8
生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して	34.0	30.4
健康や病気に関して	7.5	7.1
①～⑧以外の保護者のコメントに対する応答	2.9	12.7
その他	19.8	16.9
コメント無し	7.7	6.1

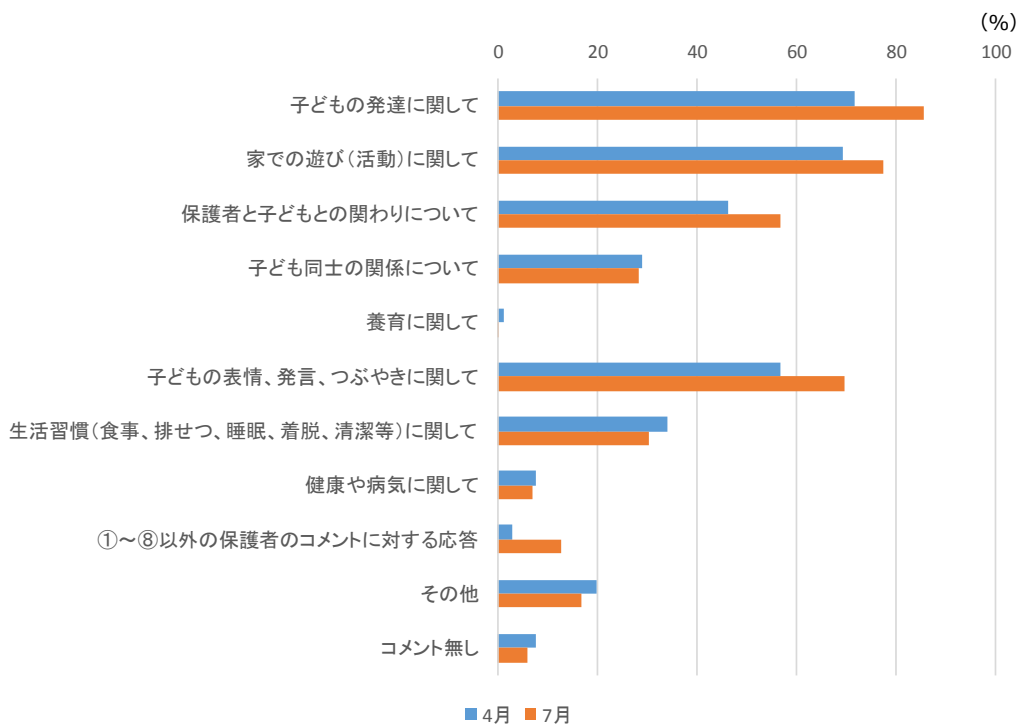


図4-6 保育士が連絡帳の自由記述欄に記入した内容 (単位：%)

表4-9 保護者が連絡帳の自由記述欄に記入した内容 (単位：%)

	4月	7月
子どもの発達に関して	20.5	29.5
家での遊び(活動)に関して	15.2	13.3
保護者と子どもとの関わりについて	13.3	18.8
子ども同士の関係について	4.4	6.3
養育に関して	3.7	1.4
子どもの表情、発言、つぶやきに関して	18.5	29.5
生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して	23.5	18.3
健康や病気に関して	12.3	17.8
①～⑧以外の保育者のコメントに対する応答	1.9	19.3
保護者が抱える不安や悩みについて	10.3	10.0
その他	22.6	26.9
コメント無し	42.0	31.9

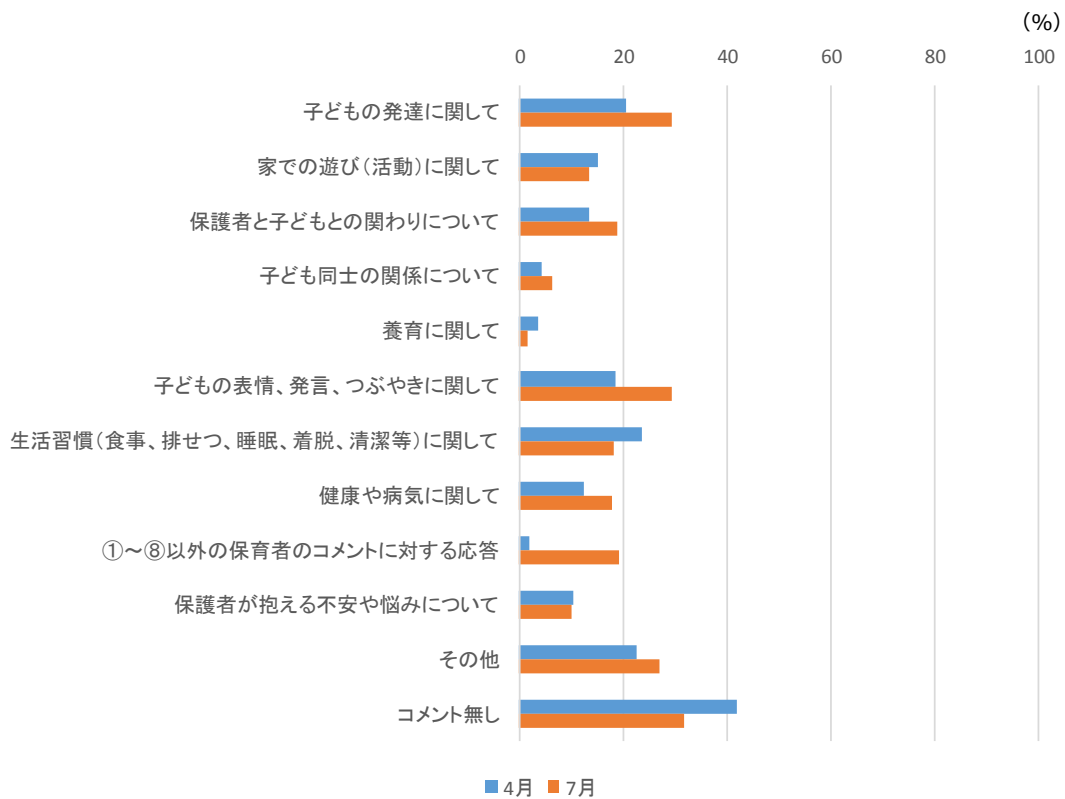


図4-7 保護者が連絡帳の自由記述欄に記入した内容 (単位：%)

保育士の記入内容の中で最も多かったものとして、4月、7月ともに、①子どもの発達に関して、②保育所での遊びや活動に関して、③子どもの表情や発言、つぶやきに関して、の順となった。保護者の記入内容では、4月は①生活習慣に関して、②子どもの発達に関して、③子どもの表情、発言、つぶやきに関して、という順となったのに対して、7月は①子どもの表情、発言、つぶやきに関して、②子どもの発達に関して、③保育者の記述に対する応答、と記述内容に変化が見られた。

(2) 記述内容のカテゴリー分類に関するまとめ

保育士の記入内容は4月、7月ともに変化がなかったことから、連絡帳に記入する内容は、保育士間で一定のパターンが存在すると推察される。一方で保護者の記入内容は、子どもの成長、または子どもが保育所での生活に慣れ、保護者も保育所での生活が把握できてきたこと、あるいは保育士との信頼関係が構築されたことにともない、保育者の記述に対する応答が増えているとも考えられる。

0歳児から2歳児の連絡帳のメッセージ分析を行った剣持・山内(2005)の研究では、乳児クラスの連絡帳の内容構成として保育者は「園での出来事」「健康」「家庭での出来事」の順であり、保護者は「家庭での出来事」「健康」「園生活」の順となっていた。質問項目の違いがあるので一概にはいえないが、本調査では健康に関する記述の比重はそれほど高くなかった。

3. 保育士—保護者間の応答性

(1) 調査結果

4月から7月までの全ての保育士と保護者の記述を対象に、保育士の記述内容に対する保護者の応答、そして保護者の記述内容に対して保育者がどの程度応答しているかをパーセンテージで表したものが表4-10、図4-8である。

保護者、保育士ともに、平均すると約3割前後の応答率であった。保護者の方が、わずかではあるが、応答率が高い。保護者、保育士ともに、4月よりも、それ以降の月の方が応答率が高くなっていることが明らかとなった。

表 4 - 10 保育士 - 保護者間の応答率

(単位 : %)

	保育士	保護者
4月	23.2	27.5
5月	33.6	32.9
6月	28	33.3
7月	27.7	33.9
平均	28.1	31.9

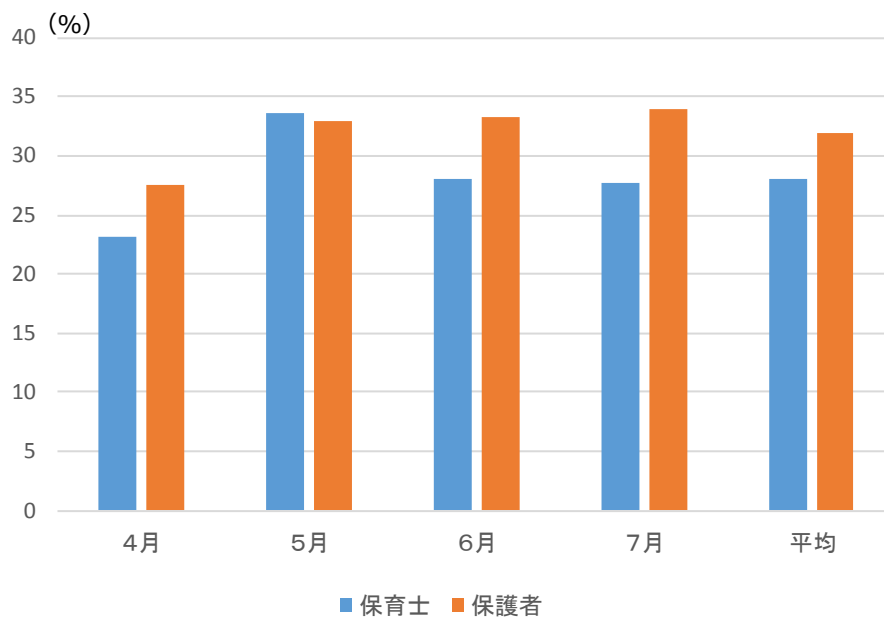


図 4 - 8 保育士 - 保護者間の応答率

(2) 個別の連絡帳ごとに見た応答率

個別の連絡帳ごとに見た応答率としては表 4 - 11 の通りとなった。

保育士の応答率は 10.6~58.9%、保護者の応答率は 10.0%~89.8%とかなりの開きがあることが明らかとなった。

保育所では、保護者も記述するよう推奨されているものの、31人中20人(65%)は記述を行い、11人(35%)が記述していない。すなわち「応答がない」パターンが約3分の1強も見られたということである。応答がない11人のうち、第一子は4人(36%)、第二子は7人(約64%)、第三子0人(0%)であった。育児不安については、「高い」が0人(0%)、「普通」が7人(64%)、「低い」が4人(36%)という内訳であった。

表 4-11 個別の応答率

調査対象 園児	年齢	クラス	第何子	親の育児不安	保育士の 応答率	保護者の 応答率
1	0	B	2	2	41.0	20.0
2	0	A	1	2	39.6	20.9
3	0	A	1	3	58.5	23.8
4	0	B	2	2	33.3	66.6
5	0	B	1	2		
6	0	A	1	1	38.6	24.5
7	0	B	1	3	51.2	50.6
8	0	B	2	2	35.2	25.3
9	1	C	2	2		
10	1	C	3	2	41.1	18.2
11	1	A	2	3		
12	1	C	2	2		
13	1	A	1	2		
14	1	B	1	1	45.4	36.5
15	1	B	2	2	18.0	10.0
16	1	C	2	2	10.6	30.6
17	1	B	2	2		
18	1	B	1	2	47.6	39.0
19	1	C	1	1	28.7	50.6
20	1	A	1	1	58.9	37.3
21	1	B	2	3		
22	1	C	1	3		
23	1	B	1	1	37.9	52.1
24	1	A	2	2		
25	2	B	1	2	47.7	21.0
26	2	B	1	3		
27	2	B	2	2		
28	2	C	1	1	38.9	89.0
29	2	C	1	1	30.9	89.8
30	2	B	1	2	25.0	86.4
31	2	B	1	2	52.7	47.7

注：保護者のコメントが書かれていない、極端に少ない等の理由で応答率が10%以下の場合は割愛した

(3) 保育士—保護者間の応答性に関するまとめ

保護者の方が保育士に比べて応答率が高いのはある意味で当然である。保育士がその日の出来事を中心に記入する連絡帳の場合、発信する側は保育士であるため、その内容に対して保護者が記入する、というパターンが最も多いからである。

そして4月以降の方が、応答率が高いことについても、4月は新入園、新しいクラスでの生活が始まるため、保育士、保護者ともに当初は連絡事項が多くなることが予想される。また連絡帳の中で気軽に質問や相談できるようになるのは、信頼関係が構築された後であることが多く、時間の経過とともに応答率が上がることは理に適っている。

ただし約3割という応答率が高いか低いかについて、一様に論じることは難しい。特に保育士の場合は、限られた時間の中で記入できる量に限界があり、保護者の記述の全てに応答することは実際に難しい。また前項でも述べたように、保育士の間で連絡帳に関する書き方のパターンが存在すると推察されること、その日のうちに保育士から保護者に伝えたい内容が明確に存在する場合は、その内容を優先させる必要があることも予想される。今後、施設間による比較、経験年数間による比較など、もっとデータ数を増やして分析を続ける中で、より望ましい応答率が見出せる可能性もある。

また応答が全くない保護者の存在が第一子、第二子ともに見られた。考えられる可能性として挙げられるのは、第二子の場合が6割を超えていたことから、育児に疲れている、または育児に追われて記述する時間がないことなどが推察される。第一子についても、同様に時間がない、もしくは育児に疲れて記述できないなどの理由が考えられる。育児不安との関係では、「育児不安が高い」保護者は全員記述があり、記述のない保護者の約6割強は「育児不安が普通」であった。先ほどと同様に育児に不安がないために保育士に特に尋ねることがないという理由も考えられる。残る約4割弱の「育児不安が低い」保護者も、育児に慣れているという理由のほか、育児に関心が薄い可能性もないとはいえない。

一方で、個別の応答率を見た場合、その差はあまりにも大きい。応答率は読み手が書き手の記入内容についてしっかりと受け止めているかどうか表れるため、一定の高さは求められるべきである。一番低い値で約11%というケースに課題はないのかを内容と合わせて考える必要がある。

調査結果から、最終的に(1)保育士の応答率が高いが保護者の応答率は低い場合、(2)保護者の応答率が高いが保育士の応答率が低い場合、(3)保育士、保護者ともに応答率が

高い場合、(4)保育士、保護者ともに応答率が低い場合、の四つのパターンが見えてきた。内容の把握や他の調査結果と考え合わせ、最終的に保育士—保護者の関係性を説明する一つの手がかりが見えてきたと考えられる。

4. 保育ソーシャルワークのツールとしての連絡帳による支援

4月および7月の自由記述の中から、前章でも用いた12の機能について、連絡帳を通じてソーシャルワーク的役割を果たしていると考えられる事例を取り上げた(表4-12参照)。

表4-12 連絡帳を通じて行うソーシャルワーク (表3-7の再掲)

1	保護者の不安や悩みに気づくこと
2	保護者の不安や悩みに寄り添い・共感すること
3	保護者の不安や悩みに対して、具体的にアドバイスをすること
4	保護者の不安や悩みに対して、保育所外の子育て支援サービスの紹介や情報提供をすること
5	子どもの成長・発達を伝え、保護者の不安や悩みを未然に防ぐ(予防する)こと
6	子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対して理解を深められるようにすること
7	子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対する喜びを実感できるようにすること
8	子どもの成長・発達を伝え、保育所外の子育て支援サービスの紹介や情報提供をすること
9	保育者の子どもに対する関わりを伝え、保護者に保育所や保育士に対する信頼をもってもらえるようにすること
10	保育者の子どもに対する関わりを伝え、家庭と園が連携して子育てができるようになること
11	親子の関係がうまくいくように仲立ちすること
12	保護者同士の関係がうまくいくように仲立ちすること

出典：鶴宏史(2009)「保育ソーシャルワーク論—社会福祉専門職としてのアイデンティティ」
あいら出版、p.74を参考に作成

(1) 保護者の不安や悩みに気づくこと

連絡帳の中には、保護者が抱えている不安や悩みを記入しているケースが非常に多い。明確に質問や相談という形を取ることもあるが、答えを求めている文体が大半であるため、保育士が保護者の記述を丁寧に読み、保護者の不安や悩みにいち早く気づくことは重要である。

事例 1

0 歳児

(母)慣れない環境でなのか、お昼は今までより長い時間寝るようになりました。最近、朝ごはんを少ししか食べず、気分がのらないとご飯をぐちゃぐちゃしたり、ぐちゃぐちゃしだしたら食べません。食器を投げようとするので、声掛けはしているものの、どこまで遊び食べをさせてよいのか悩んでいます。

保育所に入所して、今までの午睡の時間と時間数に変化があったことを述べた後、食事に言及している。ご飯で遊ぶこと、食事の摂取量が少ないという二つの悩みが書かれているが、質問という形で保育士の意見を求めている記述は見当たらない。しかし悩んでいるという文章表現があるため、保護者が悩みを抱いていることに比較的気づきやすい。

事例 2

2 歳児

(保育士)

幼児C組での活動に飽きてこられたのか、ときどきB組に行く時もあるので、「終わったら帰ってきてね」と言っています。見慣れない環境は魅力的なようで、B組の先生と一緒に手をつないでC組に連れて来てくれます。

(母)

あまり、じっとすることができないので、ご迷惑をおかけしています。いつか集中して取り組んでくれるようになるのでしょうか。

クラス活動中に立ち歩き、隣のクラスに行ってしまうエピソードの紹介であるが、ネガティブな言葉を使わずに保育士がその理由を推測し、隣のクラスの保育士の対応も、子どもの気持ちを大事にしながら、再び集団行動への適応を促していることが伝わってくる記述である。否定的ではないトーンであることも関連してか、保護者が普段から気になっている集中力のなさや立ち歩きについて不安を自然に表出できている事例である。

事例 3

1 歳児

(母)昨日の夜、珍しく夜泣きを 2 時間ほどしました。本人、親ともにつらかったですが、泣き疲れて寝ました。疲れているのか、体調が悪いのか、様子をみたいと思います。

夜泣きに関する記述である。普段は夜泣きをしない子どもが夜泣きをしたこと、2 時間という長い時間泣き続けたことに対して、理由がわからないという困惑の気持ちも見取れる。「様子をみたい」と、一見すると保護者の中で完結しているようにも見えるが、「つらかった」という表現から、保護者の苦悩が感じられる記述である。

事例 4

1 歳児

(母)

4/27 の夜から 39℃～40℃の熱が続き保育園を休ませていました。病院を受診すると気管支炎とのことでした。4/30 にようやく熱がおさまり、食欲も戻ってきました。久しぶりの保育園なので、いつもより泣いてしまうのではと心配しています。体重測定の結果を教えてください。食事を食べる割にはなかなか体重が増えていかないので…

(母)

体重も身長も 2 月にはかった時からほとんど増えておらず心配しています。風邪をひいたり、体調を崩すことも多かったことも影響しているのかもしれませんが、成長曲線から外れてきているのが気になります。連休明けでいつもよりたくさん泣いてしまうかもしれません。いつもお手数をおかけして申し訳ありませんが、よろしくお願ひします。

ゴールデンウィーク前後に体調を崩し、長期欠席していた園児の連絡帳である。欠席理由や体調の移り変わりが書かれた後、保育所で行った体重測定の結果を教えてくださいという依頼の記述がある。一見、事務的な内容に近い伝達事項のように見えるが、日をおかずして体重への言及が続いている。

体調を崩したことで、保護者が日ごろから気になっている体重についての悩みをさらに強く感じていることがわかる。

(2) 不安や悩みに寄り添い、共感すること

(1)で気づいた不安や悩みに対して、保育士は何らかの対応をすることが望ましい。不安や悩みの性質によっては、解決が必要であるというよりも、むしろ保育士が寄り添い、共感することで、保護者は気持ちが切り替えられ、再び子育てに向き合えるものもある。

事例 5

0 歳児

(保育士)

先週は、お熱・咳など大変でしたね。小さいうちは体調を崩してしまうことも多いですが、3歳くらいになると風邪もひきにくくなる場合が多いようです。

その前の週に体調を崩して欠席続きであった園児が週明けに登園した日に書かれた記述である。保護者の言葉を受けているわけではないが、保育士が保護者の立場に思いを寄せ、病気のわが子を見ることの辛さや仕事を休んで看護することの大変さを労っている。そして保育士としての経験から、子どもの成長とともに体調不良の回数は減少してく見通しを伝え、保護者の育児に寄り添う気持ちが伝わってくる記述である。

事例 6

0 歳児

(母) 離乳食、十分がゆを1さじあげてみましたが、すぐにべーっと吐き出していました。

ミルクのトラウマがあるので、すぐにあきらめました

(保育士)

M ちゃん、最初は少しずつでいいですよ。ゆっくり見守っていきましょう！保育園では、みんなが食べている様子をじっと見ていることがあります。いつか興味が出てくるのでしょね。

離乳食を始めた保護者が、子どもが吐き出してしまったことにより、気持ちが後ろ向きになっている記述である。さらに文面からは、授乳に関しても、以前うまくいかなかったエピソードがあることがうかがえ、その体験から早々に「あきらめる」という気持ちに向かっていると推測される。

それに対し、保育士は保護者の気持ちを受け止めている記述から始まっている。ペースは子どもや保護者の気持ちに合わせたものでよいことを伝えながらも、保育所でのエピソードを紹介することで、園児が食べ物に興味をもち、食べたいという意欲につながることから考えると、食べる時期が近づいているという見通しをさりげなく伝えている。そして諦めるのではなく、焦らず取り組み続けることを促している。

事例 7

2 歳児

(母)

保育園でのバイバイの時はまだ泣いてしまいますが、少しずつ慣れてほしいと思います。本日もよろしく願いいたします。

(保育士)

K くん、よく頑張っていますよ。笑顔も見られるようになってきました。昨日までは次にすることを先生が変えてくれるのをじっと待っていたのですが、今日は次のことがしたくなったら自分で片付けてしたいものを運んでこられましたよ。昨日したかった粘土を今日はして、星形の型抜きをたくさんしていました。

(母)

昨日はお仕事中に笑顔が出たと読み、すごくうれしいです♪家でも次のものを持ってくる前に自分でお片付けができるようになり、成長に驚いております。いつか笑顔で朝もバイバイできる日を楽しみに…。本日もよろしく願いいたします。

4 月の登園が始まって間もない時期に、別れ際に子どもが泣くことに対し、母親も辛い気持ちになりながら子どもを預け、仕事へ向かう心情が書かれた表現である。それに対し、直接受け止めている表現ではないものの、園児が母親のいない場面でも笑顔で過ごしていること、母親がいる時に見せる甘えた面だけでなく、早くも集団生活の中で自分のすべきことを見つけ、しっかりと取り組んでいる様子を保護者に伝えている。

保護者はわが子が笑顔で過ごしていることに安心し、さらに家庭で見られる成長と、保育士の紹介したエピソードがつながり、保育所への信頼も深まっていると推察される。そして子どもが泣いていたとしても、それまでとは違った気持ちで、安心して子どもを預け、仕事に向かうことができる様子が伝わってくる。

(3) 保護者の不安や悩みに対して、具体的にアドバイスをする

連絡帳では、(1)で気づいた不安や悩みに対して、保育士が保護者に対して具体的にアドバイスを行うこともしばしばなされている。そのことで、保護者の不安や悩みは軽減や消失につながることもある。

事例 8

1 歳児

(母)

最近、食事の時などお茶を飲むことを嫌がることが多いのですが、保育園ではそのようなことはありませんか？コップやストローは嫌がり、スプーンで何とか 2・3 口飲む程度です。

(保育士)

お茶の件ですが、コップを口まで持っていくと、噛むようにですが飲まれています。

(母)

お茶、飲めているようでよかったです。コップだとこぼすことも多いですが、家でも練習していきます。

初めての子育てでは、わからないことや迷うこと、不安になることが日常的に出てくる。本事例もその一つであり、深刻ではないが、「コップで水分をとること」について、保護者がそれまで問題と感じていなかったことが子どもの成長とともに、うまくいかなくなっていることに気づき、疑問を保育士に投げかけていると推測される。

その問いに対し、保育士は「口まで持っていくこと」、「噛むようにする」という二つの条件により、コップから水分が取れていることを伝えている。

保護者はコップで飲めていることに安心しつつ、家でも同様の方法を取り入れて練習を続けようと考えている記述が見られる。

事例 9

0 歳児

(保育士)

とってもご機嫌でうつぶせ練習もたくさんしました！！手を前に置くように寝かせてあげると、少しだけ腕をつっぱって体を支えていましたよ。おしりもむくむくたくさん上にあげて動かそうとしていました！！

(母)

うつぶせ、家でも練習してみたところ、お尻上げてました！手は前に出したくないようで、泣いて訴えてました。ぼちぼちやっていきます。

子どもの成長には大切な「はいはい」につなげるために、うつぶせの姿勢を意識的に取らせている保育士の関わりについて書かれた記述である。様子が目に浮かぶような具体的な記述を行うことで、保護者の家庭での練習に取り組みにもつながっている。そして泣いてはいても、その理由が手を前に出したくないからであろうと理由が推測でき、保育所と同じ「お尻を上げた」ことに確信を持って、練習を続けていこうという前向きな気持ちでいることが伝わってくる。

事例 10

0 歳児

(保育士)

Nくんの下痢、少しずつ良くなってきているようで、本当によかったです。今日も給食は消化の良いものだけを食べています。お家でのごはんで、ひじきご飯を食べているようでしたが、ひじきは消化がよくないので、控えてもらった方がいいと思います。うんちに消化していない状態でそのまま出てきています。あと、ヨーグルトや果物全般も控えてもらった方がいいですね。ただ、リンゴはすりおろしてくださいね。腸を助ける物質が含まれているそうなので、食べても大丈夫だと思います。ミルク、母乳で栄養はまだとれていると思いますので、栄養不良等をご心配されることもないと思います。

下痢が続いている園児の連絡帳に関して、前日に母親が食べたものを書いており、そ

の中にひじきご飯が含まれていること、当日の便の様子などから、保育士が家庭での食事内容に関して具体的なアドバイスを行っている記述である。他にも、保育所で食事内容を体調面に合わせて個別対応していること、もし食事量が少なかったとしてもミルクや母乳で栄養がとれており、量が多くとれることよりも、体に負担をかけない食事内容に気がつけた方がよいことなども合わせてアドバイスとして書かれている。

(4) 保護者の不安や悩みに対して、保育所外の子育て支援サービスの紹介や情報提供をすること

この項目に該当する内容は、連絡帳の記述には見つけることができなかった。

(5) 子どもの成長・発達を伝え、保護者の不安や悩みを未然に防ぐこと

保育士が子どもの成長・発達を伝えることで、それまで感じていた保護者の不安や悩みが消失する場合や、不安や悩みを持つことそのものを未然に防ぐ場合がある。

事例 11

2 歳児

(保育士)

新しいお友達が泣いているのを見て、「どうぞ」と自分がしていたブロックを差し出してあげていた H くんでした。優しいですね。

(母)

お友達に優しくしている様子を聞いて、うれしく思います。私がお迎えに行くと、必ず近くにいるお友達を引っ張ったり押ししたりして、泣かせてしまっているのです。ほかの時もみんなに乱暴していないか心配しています。何かありましたら、遠慮なくおっしゃってくださいね。

(保育士)

引っ張ったり、押しったりされるのは、何か理由があると思いますが、まだ自分の言いたいことを思うように話せる年齢ではないので、できるだけ、H くんのお気持ちも相手の気持ちも大人が代弁してあげるようにしていきますね。

(母)

ありがとうございます。よろしく申し上げます。

保育所の日常的な場面の中で、園児同士のやりとりを保護者に伝える記述である。

泣いている子を心配する気持ち、自分のしている遊びを譲って慰めようとしているエピソードを保護者に伝えたことで、保護者はむしろ逆の心配ごとを日ごろから感じていたことを返答する中で表出している。わが子と他園児との関わりで気になる場面を書いている内容に対して、さらに保育士は子どもの立場から見えているであろう、保護者とは異なる捉え方を提示している。その上で、保育士としての関わり方を伝えることで、保護者がわが子に接する際のモデルの提示にもつながっている。

保護者は保育士に対する信頼感が増すとともに、普段感じていた不安や悩みが保育士と共有できたことで軽減に向かっていると推測される。

(6) 子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対して理解を深められるようにすること

子どもは、年齢や月例に応じて刻々と変化し、その時期にしかない成長や発達を見せる。保護者にとって毎日接しているわが子の変化は気づきにくい場合もあり、また初めての子育ての場合は、その時々成長や発達課題が何であるかを知らない場合も多い。子育ての専門知識をもつ保育士により、連絡帳を通して気づきを促し、子育てに対する理解を深めることが可能である。

事例 12

2歳児

(保育士)

今は、どんどん言葉を知りたがっている時期ですね。今日も、いろんな言葉を書いたカードを出して、野菜の名前、楽器の名前、車の名前を教えてあげると、何度も繰り返して覚えようとされていました。

(母)

〇〇(保育園の名前)に行くようになって、急に言葉が増えました。文章で話すようになって、びっくりしています。

子どもが言葉に対して興味が高まる時期であることを知らせる記述から始まっている。

時期を捉えた保育士の関わりにより、その興味をさらに高めていること、その取り組みに子どもも意欲的な反応を見せている様子が書かれている。このように成長・発達につながる取り組みを具体的に紹介することが、保護者の子育てに対する理解を深めることにつながっている。

(7) 子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対する喜びを実感するようにすること

保育士が子どもの成長や発達を伝えることは、ずっと感じていた不安や悩みが軽減、解消され、喜びにつながることもある。また、家では見られにくい成長や発達の場면을連絡帳を通じて実感できる。また、この喜びが保護者の子育てに対する次への原動力となることもある。

事例 13

1 歳児

(保育士)

白いご飯が大好きな R 君、今日も最初にお茶碗に入れた時から山盛りだったのですが、ぺろりと食べて、ご飯粒をきれいに寄せてほしい時は、スプーンとお茶碗を持ってこられます。お茶碗の中がきれいになったら、おかずのカボチャ、リンゴ、お汁と全部食べ、「あっあっ」おかわりのアピールをされるので、「どうぞ」と伝え、自分でごはんのおかわりを入れに行っていました。

(母)

連絡ノートを読んで、主人も私もうれしくて感動しました。私は涙が出ました。家でも白いご飯が大好きで、おかわりします。最近、ふりかけをかけて食べたりしますが、なにもかけなくても白ご飯のみを食べるので、おかずと交互に食べて、おみそ汁も交互だよ、というのですが、なかなかできません。ごはん、汁、おかずと1つ1つ食べ終わるまで、食べています。そのうちできるようになりますかね！でも、給食をいっぱい食べてくれるのは、七夕の短冊にも願いことを書いたので、うれしかったです。家でもスプーンやフォークで取りにくいのは、やって、とアピールしてくるので、同じようにしているんだな、と食べているところを見てみたくなりました。

食事の摂取量が少ないことに悩んでいる保護者は、園児が保育所では食欲旺盛に食べている様子を知り、とても嬉しい気持ちで受け止めている。またご飯とおかずを交互に食べることができないことについては、若干気になるものの、食事量が多くとれていることに保育士がフォーカスしていることで、また大きな問題ではないと切り替えているようにもうかがえる。

事例 14

2歳児

(保育士)

今日はリズムをしました。「ひげじいさん」「先生とお友達」などいろいろな歌に合わせて体を動かしました。少しずつ、先生の動きや友達の姿を見て、真似をし、取り組んでいましたよ！ズボン、パンツも少しずつ自分で下げようと頑張っていますよ。

(母)

家でもリズムに乗ることはあっても、そんなに踊ったりするわけではないので、まねてくれるようになるとうれしく思います。着替えは時間が許す時は極力、自分でさせるようにしたいと思います。

子どもはしばしば、家庭と保育所では異なった顔を見せる。保育士は、保護者と離れているという状況、また集団生活という場面でこそ見られる子どもの成長を親に伝える。本事例では、「同年代の子どものマネをする」という行動に保護者は喜びを感じている。そして同じく着替えについても同様の行動(マネ)が見られていることを知り、家庭でも取り組む気持ちが出てきていることが伝わってくる。

(8) 子どもの成長・発達を伝え、保育所外の子育て支援サービスの情報提供をすること

この項目に該当する内容は、連絡帳の記述には見つけることができなかった。

(9) 保育士の子どもに対する関わりを伝え、保護者に保育所や保育士に対する信頼をもってもらえるようにすること

保育士の子どもに対する関わりを知ることは、保護者にとって、とても安心でき、信頼感が増すことにつながる。

事例 15

1 歳児

(保育士)

今日は今までと比べて泣くことが多かったです。一つの遊びが終わっては、先生のところにだっこしてもらいに行っていました。そしてまた、別の遊びに行く、という感じでした。先生に甘えられるようになったということで、これも一つの成長の証ですね。慣れてきてくれたんだと思います。笑顔も増えてきて、お友達が言っていることにニコッとしている場面も見られるようになってきているので安心してくださいね。

入所して間もない時期、親も不安な気持ちで保育所に預けていることが多いと想像される中で、子どもが頻繁に保育士に抱っこを求め、保育士もしっかりとそれを受け止めている様子を記述している。子どもが抱っこに満足し、安心感を持つことで次の行動に移行できている様子を伝えていることは、母親が安心感をもてるよう意識して伝えていると考えられる。

(10) 保育士の子どもに対する関わりを伝え、家庭と園が連携して子育てができるようになること

保育士が子どもに対する関わり方を伝えることで、同じ課題に対して、家庭と園が方向性を一致させ、子どもに関わることができる。

事例 16

2 歳児

(保育士)

今日は、ボタンの練習をしました。ボタンホールにボタンを通すのが難しかったようで、先生と一緒に3つのボタンを外しました。ボタンが外れると、机が見えるので「つくえだねー」と話しながらお仕事をしました。

(母)

家ではまだ、ボタンをはずしたりすることがないので、これから家でも挑戦してみますね。

本事例では、保育士がボタンの練習をしていることを伝えたことがきっかけとなり、母親は「ボタンかけ」が取り組むべき課題であることを認識している。そして家でも同様に、日常生活の中でボタンをかけるという取り組みをしようと考えていることがわかる。

事例 17

2 歳児

(保育士)

お昼ごはんも「スプーン使おうね」と声をかけると、スプーンを使って食べていました。

(母)

家ではお食事の時、まだ手が先に出るので、スプーンで上手に食べれるよう、お手伝いしながらではありますが、練習中です。きょうもよろしくお願いします。

(保育士)

ご家庭でもスプーンの練習をしてくださりありがとうございます。保育園でも声をかけながら見守っていきますね。

前の事例と似ているが、保育士の記述に対する保護者の返答により、既に家庭でも「スプーンを使っての食事」に取り組んできたことがわかり、同じ課題に向かって取り組んでいることがお互いに確認できている。

(1 1) 親子の関係がうまくいくように仲立ちすること

この項目に該当する内容は、連絡帳の記述には見つけることができなかった。

(1 2) 保護者同士の関係がうまくいくように仲立ちすること

保育士の記述内容には、この項目に該当する内容は見られなかったが、保護者の記述内容には、他の保護者に対する言及があった。

事例 18

1 歳児

(母)

かみつきの件、いつも申し訳ありません。けがをさせてしまったお友達、お母様に謝らせていただく機会を頂ければ、と思います。

(保育士)

かみつきの件、先方のお母様にお聞きしてまたお伝えします。

かみつき行動をした子どもの保護者から、かみつかれた子どもの保護者に謝罪をしたという内容が記入されており、このことに対する言及はその後なかったため、口頭での対応に切り替え、対応がなされたと推測される。

第4節 まとめと考察

1. まとめ

まとめとして、以下の点が明らかになった。

(1) 記述文字数について

- ①保育士が行う連絡帳の記入実態は、年齢別、子ども別、クラス別により、記述量に差が見られた。
- ②月別や保護者の記述量による記述量の差は見られなかった。
- ③育児不安の高い保育者には保育士の記述量は少し多く、保育士は育児不安の高い保護者に対して他の保護者よりも丁寧に対応していると考えられる。

(2) 記述内容の内訳

- ①保育士の記述内容は、月による変化は見られなかった。このことから、保育士による連絡帳の記入内容には、一定のパターンが存在すると考えられる。
- ②保護者の記述内容は、月によって記述内容が変化し、保育士への応答が増加している。これは時間の経過によって、保護者の保育士に対する信頼関係が構築されていると見られることもできる。
- ③保護者による記述の中には、連絡帳に不安や悩みを表出している場合があり、連絡帳は保護者の支援ニーズを把握できるツールとなりうると考えられる。

(3) 連絡帳に見る保育士—保護者間の応答性

- ①全体的な応答率は、保育士、保護者ともに、相手の記述への応答は約3割である。
- ②保育士よりも保護者の方が、応答率はわずかに高い。
- ③個別の応答率では、保育士、保護者ともに応答率は1～9割と大きな差が見られる。
- ④大別すると、保育士と保護者双方の応答性が高い場合、双方の応答性が低い場合、保護者の応答性が低く、保育士の応答性が高い場合、保育士の応答性が低く、保護者の応答性が高い場合の四つのパターンが見られる。
- ⑤応答のない保護者が全体の約35%に見られた。
- ⑥応答のない保護者11人のうち、第一子の保護者が4人、第二子の保護者が7人であり、育児不安が「普通」の保護者が7人、「低い」保護者が4人であった。
これについては、育児に慣れておらず記述する時間がない、育児に疲れて記述ができない、育児への関心が薄く記述の必要性を感じないなど、様々な理由が考えられる。

(4) 連絡帳を通じたソーシャルワーク的支援について

- ①保育士は連絡帳を通じて、保護者の育児に関する不安や悩みに対してソーシャルワーク的支援を行っており、問題への気づきに始まり、一部は問題の解決や軽減にもつながっている。ただし保育士が意識して行っているかどうかは確認できない。
- ②支援が必ずしも連絡帳上で完結しているとは限らず、連絡帳では問題の気づきを得て、実際に保護者と直接コミュニケーションを取って、その後の支援が行われていると推測されるものもある。反対に支援が行われていないことも可能性としてはあるが、確認する手段がない。
- ③連絡帳を通じて行っている支援と行っていない支援があった。
- ④記述内容は子どもに関することがほぼ全てであり、保護者自身の抱える問題、家庭の問題に関する記述は見られなかった。連絡帳は子育てに関することのみを書くものであるという固定概念が根強いとすれば、子育てに関連しない不安や悩みを表出できる場が他にあるかどうか、さらに調べる必要がある。

2. 考察

本調査の目的であった、保育士が連絡帳を通じて行っている保護者支援、保育ソーシャルワークの実態を把握するために、①記述文字数、②記述内容のカテゴリ分類、

③保育士と保護者の応答率、④記述内容におけるソーシャルワーク的関わりの有無の四つについて明らかにした。以下では調査結果に対する考察を行う。

(1) 連絡帳を用いた保護者支援は可能であり、実際に保育士は連絡帳を活用してソーシャルワーク的支援を行っている。

前項の(1)の③、(2)の②、③、(4)の①、②より、保護者による支援ニーズの表出ができてきていること、また時間の経過や連絡帳でのやりとりを重ねて信頼関係が構築されていることが明らかとなった。また保育士側も不安や悩みの気づきが行えているだけでなく、連絡帳を通じて問題の解消や軽減に向かうなど、実際の支援も行っていた。

(2) 連絡帳業務は非常に個別性に富んでおり、現段階では標準化された業務とはいえない。

前項の(1)の①、(3)の③から、連絡帳業務は個別性に富んでおり、どの保育士も同様の支援が行えるという現状には程遠い。

もっとも個別性に富む要因は、保育士側だけでなく、子どもや保護者の側にもある。

子ども側の要因として考えられるのは、自己アピールの強さ、発達課題の有無などに代表されるような、子ども自身が持つ注目のされやすさの度合いである。次に保護者側の要因として考えられるのは、保護者の育児不安の度合い、保護者の記述量の多さ、保護者自身が持つ課題の有無、などである。そして保育士側の要因として、観察力、文章表現力など、インプット、アウトプット両面の能力のほか、問題に気づく、解決するなどのソーシャルワーク視点や能力も関係している。

対人援助はそもそも個別性が大きいことが前提であるが、一方で保育士側の要因については標準化できる要素が大きい。個別性と標準化のバランスを取りながら支援が行われるべきである。

(3) 連絡帳により、すべてのソーシャルワークが担えるわけではない。

前項の(3)の④、⑤、(4)の②、③、④から、連絡帳で行える支援には一定の限界があることは明らかである。保育士が支援を行う意識や意欲があつたとしても、応答が希薄な場合や、応答がない場合は、そもそも支援が成立しにくい。

また、連絡帳で行える支援と行えない支援があることは、アンケートによる意識調査

と、実際の連絡帳の分析による調査のどちらにおいても明らかであった。この点については、今後、さらに整理・分類を重ねる必要がある。

(4) 保護者にとって、保育士は子育てに関する相談を行う存在であるという認識が強い

前項の(4)の④からは、保護者にとって保育所は子どもを託す場であり、保育士は子育てを支援してくれる存在であるという認識から、育児に関することは相談できるが、育児以外の相談について相談ができる存在とは捉えられていないことが明らかになった。しかし考え方によっては、子育て以外の不安や悩みがあったとしても、相談する場がないということも考えられる。もし、子育て以外の不安や悩みがある場合、どのように解決しているのかについても考える必要がある。

前章の量的調査の結果と合わせた総合的な考察については、終章で述べる。次章では、保育士—保護者間のコミュニケーションの状況についての調査を概観することにより、連絡帳を用いた保護者支援、保育ソーシャルワーク支援の必要性を検証したいと考える。

第5章 保護者支援の前提となる保育士—保護者間のコミュニケーションの現状

第1節 研究の目的

保育士と保護者間のコミュニケーションとしては、本研究で扱う連絡帳のような文章を通じたコミュニケーションと、直接顔を合わせて行うコミュニケーションとの二つにより成り立つ。

第3章、第4章では、前者である連絡帳が保育のツールにとどまらず、保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとしても活用が可能かという問いへの検証を行ってきたが、第5章では、後者である直接的なコミュニケーションに焦点をあて、保護者を対象に行ったアンケート調査を検証することで、保育現場におけるコミュニケーションの現状を明らかにし、連絡帳による文章を通じたコミュニケーションとの関係について検討する。

第2節 研究の概要

調査対象：大阪府内の民間保育園 B に通園する園児の保護者 143 名

有効回答 101 名（回答率 71%）

調査期間：2013(平成 25)年 2 月 5～19 日

調査項目：①基本属性に関する 10 項目

記入者と子どもとの関係、記入者の年齢、仕事形態、降園時間、主な送迎者、身近な育児の援助者、育児の援助体制の満足度、子どもの年齢、通園している子どもの数、保育園の利用年数

②子育ての不安や困りごとに関する 6 項目

育児の不安感の有無、具体的な悩みや困りごとの有無、不安の具体的な内容、育児相談の希望、相談したい相手、実際に相談する相手

③保育士との日常的なコミュニケーションに関する 8 項目

担任保育士とのコミュニケーション(時間、頻度などを含めた保護者の認識)、1ヶ月につきコミュニケーションをとる回数、1回につきコミュニケーションをとる時間、コミュニケーションをとるタイミング、コミュニケーションが始まるきっかけ、コミュニケーションの内容、コミュニ

ケーションに対する満足度、満足していない場合の理由、日常的なコミュニケーションに関する自由記述

④保育園の育児支援体制に関する 7 項目

育児相談の希望、実際の育児相談の有無、相談に至らなかった場合の理由、相談したいことがある時の行動、保育園内で相談したい相手、相談したい具体的内容、保育園が行う育児相談支援に対する自由記述

倫理的配慮：調査の実施に関しては、調査の趣旨と、回答は個人を特定できないように集計した上で公表すること、回答の協力は任意であることなどを、予め文書で説明し、同意を得られた保護者のみ回答を求めている。調査は無記名で実施し、さらに個人の特を避けるため、回収 BOX に自由に投入できるように配慮を行った。

分析方法：分析 1 においては、質問項目にそって調査結果全体を概観した。ただし質問項目が多岐にわたっているため、本論文のタイトルにもあるコミュニケーションに関連する箇所を中心に調査結果を示している。分析 2 では日常的なコミュニケーションに関する自由記述で得られた回答内容に対して、SCAT の手法を用いて分析を行った（SCAT とは、Step for Coding and Theorization の略であり、小規模データにも適用可能な質的データの分析手法の一つである）。具体的には、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それをいいかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考案して付していく 4 ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリーラインと理論を記述する手続きからなる。なお、具体的手順については、分析 2 の調査結果の部分において述べることとする。

第 3 節 研究結果

1. 分析 1 の調査結果

(1) 調査対象者の属性

①保育園への主な送迎者と回答者と園児の関係

本アンケート調査の回答者と園児の関係については、母親 96 人(95%)、父親 4 人(4%)、その他 1 人(1%)であった。また、保育園への主な送迎者は母親 88 人(87.1%)、父親 9

人(8.9%)、祖父母4人(4%)という結果であった。回答者と保育園への送迎者は、どちらも母親であるパターンが多いことがわかる。

②回答者の年代と就労形態

回答者の年代については、20歳代が6人(5.9%)、30歳代が67人(66.3%)、40歳代が28人(27.7%)と、30歳代が最も多かった。

さらに就労形態については、フルタイムが59人(58.4%)、パートタイムが31人(30.7%)、その他が11人(10.9%)となっている。

③通園している子どもの年齢と子どもの数

通園している子どもの年齢は、0歳児3人(3.0%)、1歳児15人(12.9%)、2歳児17人(16.4%)、3歳児19人(16.4%)、4歳児29人(25%)、5歳児33人(28.4%)であった。子どもの数については、1人が79人(78.2%)、2人が22人(21.8%)であった。

④保育園の利用年数

保育園の利用年数は、1年未満が18人(17.8%)、1年以上2年未満が15人(14.9%)、2年以上3年未満が18人(17.8%)、3年以上4年未満が11人(10.9%)、4年以上5年未満が11人(10.9%)、5年以上が28人(27.7%)であった。概ね、前出の園児の年齢と利用年数は対応しているが、最も回答が多かった「5年以上」が約3割弱おり、第一子に引き続いて、第二子が通園しているケースが含まれていると考えられる。

⑤回答者の迎えの時間帯(降園時間)

回答者が子どもを迎えに来る時間帯、すなわち降園時間については図5-1に示した。16時台が15人(14.9%)、17時台が51人(50.5%)、18時台が32人(31.7%)、無回答が3人(3.0%)であった。

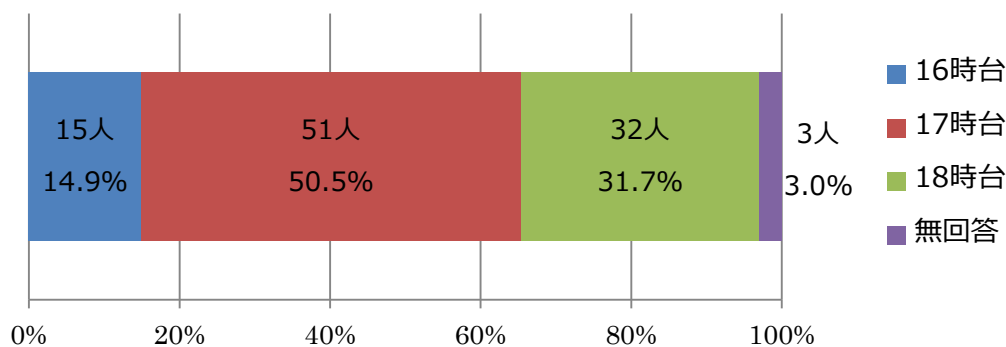


図5-1 回答者の迎えの時間帯(降園時間)

(2) 子育ての悩みや困りごとについて

① 育児に関する不安

育児に関する不安については、「かなり感じる」8人(7.9%)、「少し感じる」49人(48.5%)、「あまり感じない」40人(39.6%)、「全く感じない」4人(4.0%)であった(図5-2参照)。

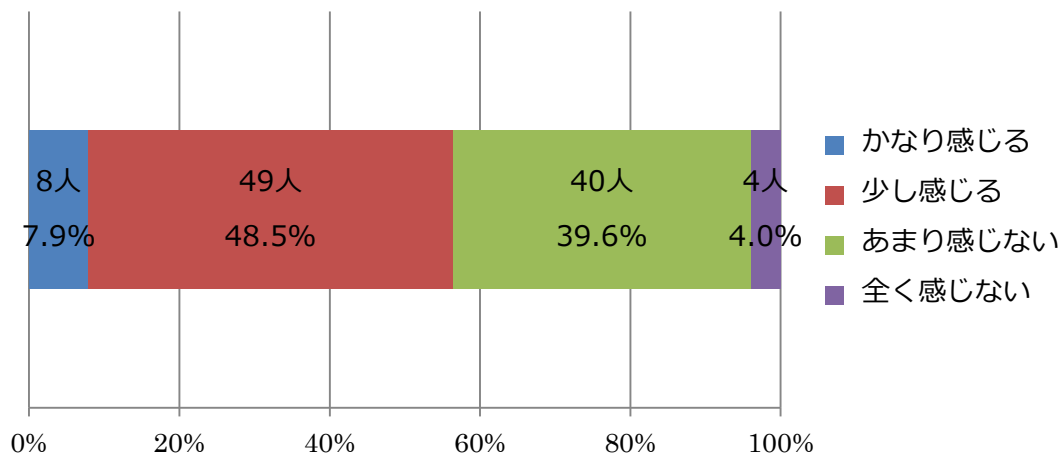


図5-2 育児に関する不安

② 育児の悩みや困りごと、および具体的内容

育児の悩みや困りごとについては、「よくある」8人(7.9%)、「たまにある」61人(60.4%)、「あまりない」29人(28.7%)、「全くない」2人(2.0%)であった(図5-3参照)。

約6割弱の保護者が育児不安を、約7割の保護者が育児の悩みや困りごとを抱えながら、日々の子育てを行っている実情がうかがえる。

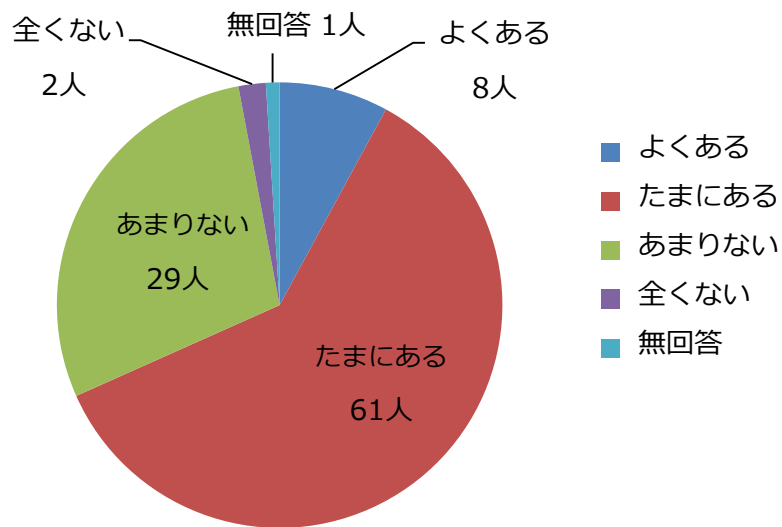


図5-3 育児の悩みや困りごと

悩みや困りごとの具体的内容については、表5-1の通りである。回答の多い順に「しつけ」37件、「食事や排泄など生活上のこと」28件、「子どもへの関わり方」24件、「教育」22件、「仕事との両立」21人、「発達や成長」20人、「子どもの対人関係」14人、「健康や病気」12人、「育児サポートに関すること」6人、「自身の健康問題」4人、「育児上の人間関係」4人、「きょうだいとの関係」3人、「その他」1人であった。

また表1では、保護者が抱える悩みや困りごとについて、子育てそのものに関する悩みが約8割を占める一方、「仕事との両立」、「保護者自身の健康問題」のように、保護者自身の問題、また「育児のサポートに関すること」、「育児上の人間関係」など育児の環境に関する内容など、子育てに関連して生じる問題も全体の約2割見られた。

表5-1 悩み・困りごとの具体的内容

具体的内容		度数 (件)	パーセント (%)
子育てそのものの悩み	しつけ	37	18.8
	食事や排泄、睡眠など生活上のこと	28	14.3
	子どもへの関わり方	24	12.2
	教育	22	11.2
	発達や成長	20	10.2
	子どもの対人関係	14	7.1
	健康や病気	12	6.1
	きょうだいとの関係	3	1.5
生 関 子 じ 連 育 る して 悩 みに み	仕事との両立	21	10.7
	育児サポートに関すること	6	3.1
	育児上の人間関係	4	2.0
	自身の健康問題	4	2.0
その他		1	0.1
合計		196	100.0

③育児相談の有無

前述した育児の悩みや困りごとについては、「悩みを相談する」56人(55.4%)、「悩みを相談しない」16人(15.8%)、無回答29人(28.8%)であった(図5-4参照)。

また、相談しない理由については、自由記述で「話せる人がいない」「相談する相手がない」「相談する時間がとれない」という回答があった。

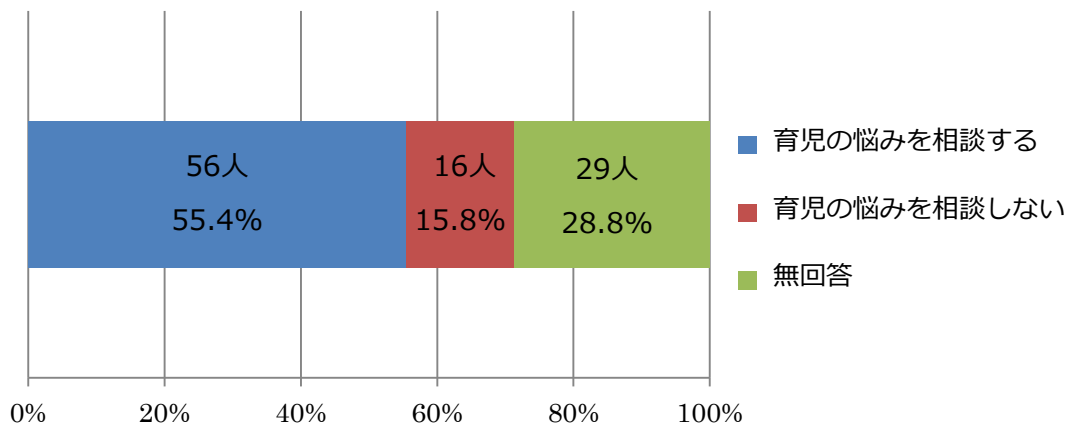


図5-4 育児相談の有無

図5-4から、育児に関する悩みや困りごとについて、実際に他者に相談する保護者は約半数である。自らの意志で相談しないケースも予想される一方で、自由記述にて相談しない理由を尋ねたところ、「相談相手がいない」、「相談する時間がない」などの回答が複数見られた。いいかえると、相談しないのではなく、相談したくても相談できないパターンが一定数含まれているといえる。

④相談したい相手

育児の悩みについて相談したい相手は、表5-2の通りである。「配偶者」41人(32.5%)、「回答者の父母」22人(17.5%)、「回答者の兄弟姉妹」11人(8.7%)、「保育園の友人」10人(7.9%)、「保育園外の友人」18人(14.3%)、「保育園」10人(7.9%)、「子育て相談の専門機関」14人(11.0%)となった。

また、実際に育児の悩みを相談する(した)相手が表5-3である。「配偶者」46人(36.5%)、「回答者の父母」25人(19.8%)、「回答者の兄弟姉妹」10人(7.9%)、「保育園の友人」11人(8.7%)、「保育園外の友人」24人(19.0%)、「保育園」8人(6.3%)、「子育て相談の専門機関」2人(1.6%)であった。

表5-2からわかることとして、保護者が相談したい相手は、概ね非専門職、専門職に大別できる。約8割の保護者は、配偶者や父母、兄弟など、身近な存在である前者に相談したいと考える一方で、約2割は後者、つまり子育て相談の専門機関や保育園など専門機関・専門職への相談を望んでいた。

表5-2 相談したい相手

	度数 (人)	パーセント (%)
配偶者	41	32.5
記入者の父母	22	17.5
記入者の兄弟姉妹	11	8.7
保育園の友人	10	7.9
保育園外の友人	18	14.3
保育園	10	7.9
子育て相談の専門機関	14	11
合計	126	100

表5-3 実際に相談した(する)相手

	度数 (人)	パーセント (%)
配偶者	46	36.5
記入者の父母	25	19.8
記入者の兄弟姉妹	10	7.9
保育園の友人	11	8.7
保育園外の友人	24	19
保育園	8	6.3
子育て相談の専門機関	2	1.6
合計	126	100

さらに、この専門職に対する相談ニーズが実際の相談に結びついているかどうかについて調べたものが表5-4である。送迎のため、毎日のように保護者が足を運んでいるにもかかわらず、4割の保護者が実際の相談に結びついていない。子育て相談の専門機関については、約9割弱の保護者がニーズを持ちながらも相談できていないことが明らかとなった。

表5-4 専門職に対する相談のニーズと実現性

単位 人(%)

	相談したいと 考え、実際に 相談ができた	相談したいと 考えたが、実際に 相談できなかった	合 計
保育園	6 (60.0%)	4 (40.0%)	10 (100.0%)
子育て相談の専門機関	2 (14.3%)	12 (85.7%)	14 (100.0%)
合 計	8 (33.3%)	16 (66.7%)	24 (100.0%)

⑤保育園内で相談したい相手と相談したいときの行動

保育園内で相談したい相手については、「担任の保育士」が93人(87.7%)、「主任保育士」3人(2.8%)、「園長」8人(7.5%)、その他2人(1.9%)であった(図5-5参照)。

また保護者が保育園や保育士に対して相談したいことがある時の行動としては、「相談したい旨を話し、相談日時を予約する」が5人(4.7%)、「登降園時に担任保育士に声をかけ、その場で話す」が67人(63.2%)と一番多く、次に「担任保育士に声をかけられたら話す」19人(17.9%)、「連絡帳に記入する」10人(9.4%)、「園長先生の朝立ちタイム(園門前)で相談する」1人(0.1%)であった(表5-5参照)。

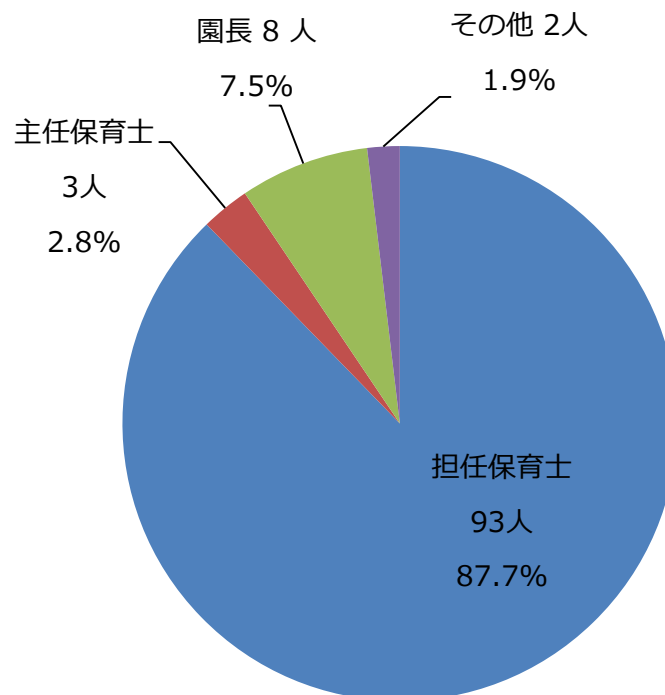


図5-5 保育所内で相談したい相手

表5-5 相談したいことがある時の行動

	度数 (人)	パーセント (%)
相談したい旨を話し、相談日時を予約する	5	4.7
登降園時に担任の保育士に声をかけ、その場で話す	67	63.2
担任の保育士に声をかけられた時に話す	19	17.9
連絡帳に記入する	10	9.4
園長の朝立ちタイム(園門前)で相談する	1	0.1
その他	4	3.8
合計	106	100

図5-5では、保育園内で相談したい相手として、約9割の保護者が担任保育士を挙げている。やはり、一番子どもの状況を把握し、“顔の見える間柄”である担任保育士に相談したいと考える保護者が圧倒的に多いことを表している。

表5-5では、保育士に相談したいことがあるとき、「相談したい旨を話し、相談日時を予約する」という、他領域において相談支援をする際の一般的なスタイルはむしろ少数で、“担任保育士に会えた時”、“担任保育士から声をかけられた時”などのように、タイミングやシチュエーション、さらには保育士のアプローチ次第で、相談が実現・成立している傾向が特徴的である。

(3) 保育園・保育士との日常的なコミュニケーションについて

①担任保育士とのコミュニケーション(時間や頻度などを含めた回答者の認識)

担任保育士とのコミュニケーションについては、「よくとれている」10人(9.9%)、「とれている」58人(57.4%)、「あまりとれていない」31人(30.7%)、「全くとれていない」2人(2.0%)という結果となった(図5-6参照)。

図5-6において、保護者と保育士の日常的なコミュニケーションに関して、約7割の保護者が「コミュニケーションがとれている」とする一方で、約3割の保護者が「コミュニケーションがとれていない」と感じていることがわかった。

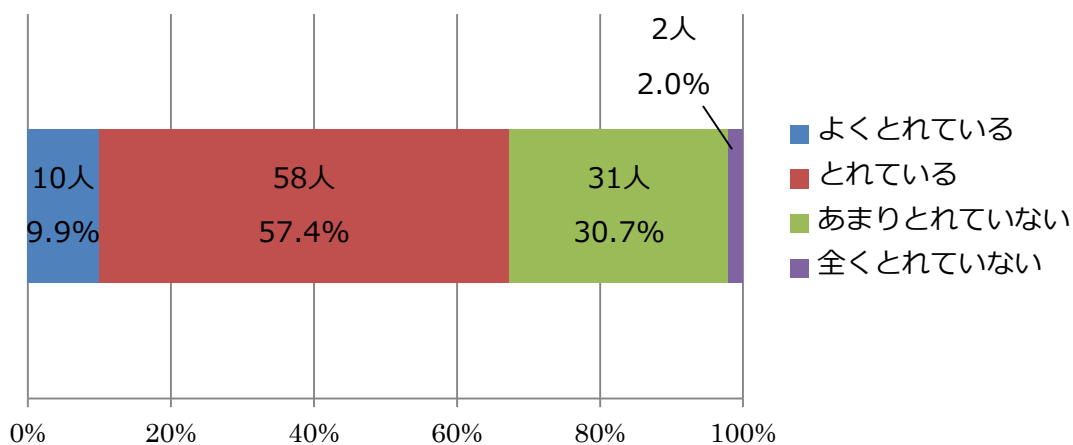


図5-6 担任保育士とのコミュニケーション

②1ヶ月につきコミュニケーションをとる回数、1回につきコミュニケーションをとる時間

担当保育士と保護者がコミュニケーションをとる回数は表5-6の通りである。「0回」3人(3.0%)、「0.5回」1人(1.0%)、「1回」6人(5.9%)、「2回」17人(16.8%)、「3回」20人(19.8%)、「4回」5人(5.0%)、「5回」9人(8.9%)、「6回」6人(5.9%)、「8回」4人(4.0%)、「10回」10人(10.0%)、「12回」1人(1.0%)、「15回」4人(4.0%)、「17回」1人(1.0%)であった。

表5-7は、コミュニケーションの1回あたりの時間である。「0回」2人(2.0%)、「1回」6人(5.9%)、「2回」7人(6.9%)、「3回」23人(22.8%)、「4回」2人(2.0%)、「5回」35人(34.7%)、「10回」13人(12.9%)、「無回答」13人(12.9%)となった。

表5-6では、コミュニケーションの回数について、1ヶ月のうち、1回も保育士と関わりを持たない0回から、ほぼ毎日に近い頻度でコミュニケーションをとっている17回まで、かなりのばらつきが見られる。平均は「月に3回」である。「4回」以下、すなわち週1回以下と回答した保護者が全体の約5割を占めており、毎日足を運んでいる頻度から考えても、全体的に少ない印象がある。表5-7は1回あたりのコミュニケーションの時間であるが、多い回答として「5分」、次に「3分」の両者を合わせて半数を超えている。あいさつを交わす程度と推測される「0分」から、最大でも「10分」と、1回あたりのコミュニケーション時間についても、回数と同様に短い印象がある。

表5-6 コミュニケーションの回数

月平均の回数	度数(人)	パーセント(%)
0	3	3.0
0.5	1	1.0
1	6	5.9
2	17	16.8
3	20	19.8
4	5	5.0
5	9	8.9
6	6	5.9
8	4	4.0
10	10	9.9
12	1	1.0
15	4	4.0
17	1	1.0
無回答	14	13.9
合計	101	100.0

表5-7 コミュニケーションの時間

時間(分)	度数(人)	パーセント(%)
0	2	2
1	6	5.9
2	7	6.9
3	23	22.8
4	2	2
5	35	34.7
10	13	12.9
無回答	13	12.9
合計	101	100

③コミュニケーションのタイミング・コミュニケーションが始まるきっかけ・内容

コミュニケーションのタイミングについては、「登園時」16人(14.3%)、「降園時」88人(78.6%)、「行事のとき」4人(3.6%)、「その他」4人(3.6%)であった(表5-8参照)。

コミュニケーションのきっかけについては、「保育士から声をかけられる」65人(64.4%)、「保護者から声をかける」15人(14.9%)、「両方」19人(18.8%)、「その他」2人(2%)であった(表5-9参照)。またコミュニケーションの内容については、「子どもの園での様子」95人(94.1%)、「子どもの家庭での様子」3人(3.0%)、「その他」3人(3%)であった(表5-10参照)。

表5-8 コミュニケーションのタイミング

	度数(人)	パーセント(%)
登園時	16	14.3
降園時	88	78.6
行事のとき	4	3.6
その他	4	3.6
合計	112	100

表5-9 コミュニケーションのきっかけ

	度数(人)	パーセント(%)
保育士から声をかけられる	65	64.4
保護者から声をかける	15	14.9
両方	19	18.8
その他	2	2
合計	101	100

表5-10 コミュニケーションの内容

	度数(人)	パーセント(%)
子どもの園での様子	95	94.1
子どもの家庭での様子	3	3.0
その他	3	3.0
合計	101	100

これら表5-8、5-9をもとに、コミュニケーションのタイミングときっかけについてクロス表に整理したものが表5-11である。表からも明らかであるように、最も多いのは「降園時に保育士から保護者に話しかける」パターンである。それゆえ表5-10のように、約9割という高い確率で「子どもの園での様子」がコミュニケーションの内容となると推測される。すなわち、双方向のコミュニケーションというより、保育士から保護者へ伝えるという一方の、いわば“伝達”に近いイメージが実情に近いと考えられる。

表5-11 コミュニケーションのタイミングときっかけ 単位 人 (%)

	先生から 声をかけられる	自分から 声をかける	両方	合計
登園時	10人(10.2%)	2人(2.0%)	4人(4.1%)	16人(16.3%)
降園時	54人(55.1%)	11人(11.2%)	15人(15.3%)	80人(81.6%)
行事の時	1人(1.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	1人(1.0%)
その他	0人(0.0%)	1人(1.0%)	0人(0.0%)	1人(1.0%)
合計	65人(66.3%)	14人(14.3%)	19人(19.4%)	98人(100.0%)

④コミュニケーションに対する保護者の満足度および満足していない理由

保育士とのコミュニケーションに対する保護者の満足度は、「かなり満足」27人(26.7%)、「おおむね満足」57人(56.4%)、「あまり満足していない」17人(16.8%)、「全く満足していない」0人(0%)となった(図5-7参照)。

「かなり満足」と回答した人以外の「おおむね満足」「あまり満足していない」を選択した回答者に満足していない理由を尋ねたものが表5-12である。回答の多い順に「保育士に会えない」35人(47.3%)、「時間が足りない」22人(29.7%)、「回数が足りない」9人(12.2%)、「自分の話したいことが話せない」5人(6.8%)、「その他」3人(4.1%)と続いた。

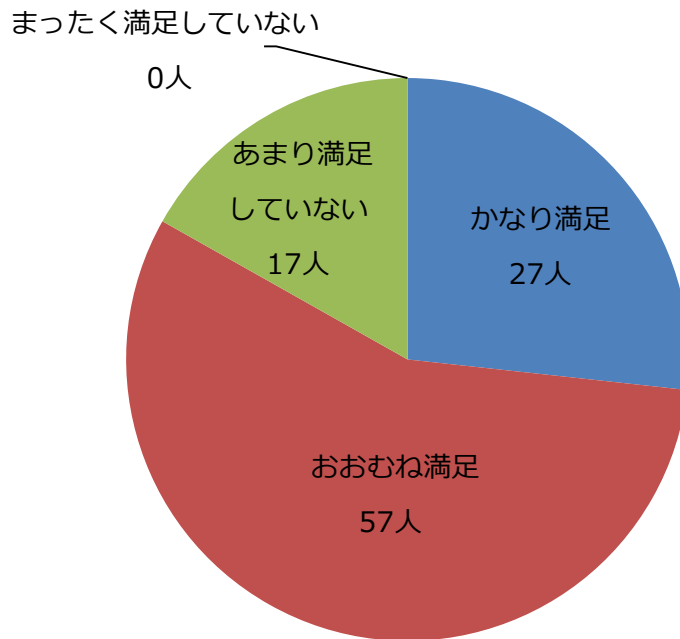


図5-7 コミュニケーションの満足度

表5-12 「おおむね満足」「あまり満足していない」保護者口が満足していない理由(複数回答)

	度数(人)	パーセント(%)
保育士に会えない	35	47.3
時間が足りない	22	29.7
回数が足りない	9	12.2
自分の話したいことが話せない	5	6.8
その他	3	4.1
合計	74	100

図5-7より、約8割を超える保護者が満足であると回答していることが明らかになった。しかし一方で、表5-12からは、現状のコミュニケーションに満足していない理由として、コミュニケーションのチャンスのなさ、時間や回数の不足、さらに「自分の話したいことが話せない」と内容面を理由として挙げる回答があった。

(4)各質問項目の関係性

保護者による担任保育士とのコミュニケーション、および満足度を中心に、回答者の属性等と各質問項目とのクロス集計およびカイ2乗検定を用いて検討した。統計ソフトはSPSSを用いて行い、有意水準は $P=0.05$ とした。

関連性のあったのは、以下の項目である。

- ① 降園時間と担任保育士とのコミュニケーション(時間、頻度を含めた保護者の認識)
降園時間と担任保育士とのコミュニケーションについて、有意な差が認められた(カイ2乗値=10.71, 自由度=2, $p < .01$)。

残差分析の結果、18時台に子どもを迎えにくる保護者は、16時台や17時台の保護者よりもコミュニケーションがとれていないと感じる回答が多かった。

- ② コミュニケーションの時間とコミュニケーションの満足度

コミュニケーションの1回あたりの時間とコミュニケーションの満足度について、有意な差が認められた(カイ2乗値=14.89, 自由度=6, $p < .05$)。

- ③ 担任保育士とのコミュニケーションとコミュニケーションの満足度

担任保育士とのコミュニケーションとコミュニケーションの満足度については有意な差が認められた(カイ2乗値=35.081, 自由度=1, $p < .01$)。

なお、上記①から③についてのクロス表は、表5-13、表5-14、表5-15の通りである。

表5-13 降園時間と担任保育士とのコミュニケーション

		担任保育士とのコミュニケーション		合計
		とれている	とれていない	
降園時間	16時台	13	2	15
	17時台	39	12	51
	18時台	15	17	32
合計		67	31	98

表5-14 コミュニケーションの1回あたりの時間と満足度

		コミュニケーションの満足度			合計
		かなり満足	おおむね満足	あまり満足していない	
コミュニケーションの 1回あたりの時間	0分	0	0	2	2
	1分	2	2	2	6
	2分	1	5	1	7
	3分	3	16	4	23
	4分	0	2	0	2
	5分	13	17	5	35
	10分	5	8	0	13
合計		24	50	14	88

表5-15 担任保育士とのコミュニケーションと満足度

		コミュニケーションの満足度			合計
		かなり満足	おおむね満足	あまり満足していない	
担任保育士との コミュニケーション	よくとれている	9	1	0	10
	とれている	16	41	1	58
	あまりとれていない	2	15	14	31
	全くとれていない	0	0	2	2
合計		27	57	17	101

①では、降園時間が遅くなるにつれて、コミュニケーションがとれないと認識する保護者が多くなる傾向が確認できた。

次に②において、コミュニケーションにおける1回あたりの時間が多くなるほど、コミュニケーションの満足度が高くなるという関連性が確認できた。

最後に③では、保育士とコミュニケーションがとれていると感じている保護者が高い満足感を持ち、コミュニケーションがとれていないと感じる保護者の満足感が低くなるという関連が確認できた。

その他、園児の年齢や保育園の利用年数、コミュニケーションの回数、コミュニケーションのきっかけなど他の項目とコミュニケーションについては有意差は見られず、関連性は認められなかった。

2. 分析2の調査結果

分析2では、29人の保護者から得られたコミュニケーションに対する自由記述について、SCATの手法を用いて分析を行った。SCATについては既に説明した通りであるが、その中でもアンケートの自由記述欄の記述のような、ごく短い言語データがある場合に有効であるとされているSCAT活用法の一つを採用した。すなわち、29人の保護者の回答ごとに一つのセグメントと見なしてテキスト欄に書き込んでいき、<1>から<4>に向かってコーディングし、その後<4>を見ながら、各行をグループ化する方向で縦方向に並べ替え、再度、すべての行の<1>から<4>までを検討し直し、最終的に<4>に基づいてストーリーラインと理論記述を書くという手順にそって分析を行っている。

前述の手續きに基づいて行った分析結果が表5-16である。

表5-16 SCATの4ステップコーディングの例（一部抜粋）

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念	<5>疑問・課題
1	忙しそうだったり、お会いできないので、なかなかコミュニケーションがとれない。	忙しそう、お会いできない、コミュニケーションがとれない	保育士の多忙さ、声のかけにくさ、接点のなさ	保育士の多忙な勤務状況 保育士と保護者が会えない コミュニケーションがとれない	コミュニケーションが十分にとれていないとする保護者の認識がある。 コミュニケーション不足には複数の原因がある。	保育士の多忙な勤務状況は、個人レベルで解決できる問題ではない
3	こちらから声をかけないと、話す機会がありません。	こちらから、声をかけ、話す機会	コミュニケーションのきっかけ、保育士からの声かけの乏しさ、話す機会の少なさ	コミュニケーションのきっかけとして保育士からとることは少ない 結果として話す機会が少ないという保護者の認識	保育士からの声かけが乏しい現状がある。 保育士からの積極的な声かけを望んでいる。 話す機会が今よりも増えてほしいと望んでいる。	
5	先生方がお忙しそうで、声をかけるのが申し訳なく感じる時がある。各クラスに相談ボックスなどがあれば、先生方にお時間があるときに見てもらえるのかなと思う。	忙しそう、声をかけるのが申し訳なく感じる、相談ボックス、時間があるときに	保育士の多忙さ、声のかけにくさ、相談したいというニーズ、保育士の負担がかからない方法、代替案	保育士の多忙な勤務状況 保護者の声のかけづらさ、ためらい 保護者の相談したいというニーズ 対面コミュニケーション以外の手段の可能性	保育士の勤務状況に対する一定の理解をしている。 相談したい時、保育士に必要な最小限の負担で済むような、現状に対する改善策を望むニーズがある。	
7	話したいことや聞きたいことはたくさんあるが、お忙しい様子や、逆に自分が急いでいたりでタイミングが合わない。早くお迎えに行ける保護者だと担任と会う機会も多いのと思う。どうしても聞きたいことがあるときは、連絡帳を活用している。もう少し日常的に細かい話をできる状況になればと思う。	話したい、聞きたい、忙しそう、タイミングが合わない、連絡帳を買うよう、日常的な細かい話	コミュニケーション時間に満足していない、保育者の忙しさ、保護者の時間のなさ、タイミング、顔を合わせるチャンス、聞きたいことが十分に聞けていない、優先順位の高いものに絞ってコミュニケーションをとっている現状	保護者のニーズ(話したい、聞きたい) 保護者の生活状況の余裕のなさ 有効なコミュニケーション手段としての連絡帳の存在 文字上のコミュニケーションよりも対面コミュニケーションのニーズが強い	コミュニケーションがとれない原因の一つとして送迎時間など物理的な問題がある。 相談したいことの全てが相談できていない現状がある。 もっとコミュニケーションをとりたいというニーズがある。 連絡帳がコミュニケーションをとる有効な代替的手段として活用されている。 現状の改善を望む気持ちがある。	

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念	<5>疑問・課題
9	仕事の時間などでお迎えの時間が遅いことが多く、先生とお話しができませんままズルズル時間がたつことがあった。先生たちもお忙しいと思うが、定期的に時間をつくってもらえたら助かる。	仕事、お迎えの時間が遅い、先生とお話しができない、ずるずる時間がたつ、定期的に時間をつくってもらえたら	降園時間の遅さ、問題が解決されない状態が継続したまま経過、相談できるチャンス、相談できるチャンス	保護者の要因によるコミュニケーションのとりづらさ 相談したいのに相談できない状態が続いている 保護者の事情に合わせる形でコミュニケーションの機会をもっと増やしてほしいというニーズ	保護者が子育てに対してなんらかの問題を抱えた際、解決されないまま時間が経過している現状がある。 保育士の勤務状況に対する一定の理解がある。 より保護者の実情に合わせた保護者支援への改善を望むニーズがある。	
11	朝早くの登園、18時以降の降園だと先生も少なく、声をかけるタイミングがなくなる。	朝早くの登園、18時以降の降園、先生も少なく、声をかけるタイミング	先生の不在(配置の少なさ)、声のかけにくさ	保護者の要因によるコミュニケーションのとりづらさ、早い時間帯、遅い時間帯の担任保育士の不在	保護者の保育所利用のパターンと保育士の勤務パターンの不一致	保育士の勤務体制そのものを変えないと、状況は改善できない
13	何か問題があった時だけでなく、普段の様子を教えてもらえると思う。保育中はこちから先生に話しかけるタイミングが分からない。	問題があった時だけでなく、普段の様子、保育中、話しかけるタイミング、分からない	保護者が望むコミュニケーション内容と実際のずれ(ギャップ)、ニーズ、声のかけづらさ	保護者が望むコミュニケーション内容と実際のずれ 保護者からの声のかけづらさ	保育士が発信するコミュニケーションの内容と、保護者が望むコミュニケーションの内容にはギャップ・ずれがある。 保育士は問題があった時に保護者にコンタクトをとるが、保護者は普段の様子について教えてもらうのがコミュニケーションと考えている。 保護者は日常の様子を聞きたいというニーズがある。	
15	園での様子というより、特別な出来事(ケガなど)があった時に「報告」をもらう程度。コミュニケーションではなく、連絡業務	特別な出来事、ケガ、報告、コミュニケーションではなく、連絡業務	実際のコミュニケーション内容≠非日常のできごと、コミュニケーション内容に関するギャップ、連絡≠コミュニケーション	保護者が望むコミュニケーションの内容と実際のずれ 連絡事項より、もう少し拡大し教えてほしいというニーズ	保育士が伝達する内容と、保護者の望む内容とのギャップやズレがある。 保護者にとって、報告はコミュニケーションではないという認識がある。	
17	乳児組では、かなり密にコミュニケーションがとれていたが、幼児組になると急に減ってしまうことが残念。3歳や4歳では園での様子を十分に伝えられない。園での子どもの様子が急に見えなくなる感じがする。	乳児組、密に、コミュニケーション、幼児組、急に減ってしまう、残念、園での様子、(子どもは)伝えられない、急に見えなくなる感じがする	子どもの月例・年齢に応じて変化するコミュニケーションの変化、保護者の不安、日常の様子が把握できない	月例や年齢に応じて変化するコミュニケーション体制の変化に対する戸惑いや、物足りなさ	月例や年齢に応じて変化するコミュニケーション体制の変化に対する戸惑いや、物足りなさ 月例・年齢を問わず、コミュニケーションを密にとってほしいという保護者の願いと実際のギャップ 子どもの園での生活が見えないことに対する不安感がある。 幼児組に移行したことでコミュニケーションがとれなくなったと感じている。	
19	0歳児クラスの時に比べて、先生とゆっくりお話しする機会は減っているが、ノートで園での様子を書いてもらっているの、特に問題はない。	ゆっくりお話しする機会、減っている、ノート(連絡帳)、園での様子、特に問題はない	子どもの月例・年齢に応じて変化するコミュニケーションの濃淡、代替コミュニケーションとしての連絡帳	月齢、年齢があがるにつれてコミュニケーションはとれなくなっているという認識、連絡帳というコミュニケーションツールに対する満足感	月例や年齢に応じて変化するコミュニケーション体制の変化に対する認識がある。 連絡帳を活用することで、実際には対面コミュニケーションを十分カバーすることができるという認識を保護者はもっている。	
21	連絡帳で園での様子がわかり、感謝している。いつもよく見ていただいていると思う。	園の様子、感謝、よく見ていただいている	代替コミュニケーションとしての連絡帳、安心感	連絡帳というコミュニケーションツールに対する満足感	連絡帳をおとして、担任への信頼感がもてている	
23	先生から積極的に子どもの様子を話して下さるの、有難い。	先生から、積極的に、子供の様子、有難い	満足度の高いコミュニケーション内容(積極的な保育士からの声かけ)、園での様子	保育士の積極的な声かけによる保護者の満足感	保育士の積極的な声かけは、保護者のコミュニケーションに対する満足度が高まる。	多忙な勤務状況の中で、保護者にとって満足度の高い関わりができる保育士とできない保育士の違いは何か

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念	<5>疑問・課題
25	子育てにそんなに悩んでいるわけではないが、小さなことでも話を聞いてくれるので、気持ち的にすぐ解決する。子ども一人一人を良く見てくれているので安心。	悩んでいるわけではない、小さなこと、話を聞いてくれる、気持ち的にすぐ解決、一人一人をよく見てくれている、安心	予防的役割、時期を過ぎない関わり(タイムリー)、子どもへの個別のまなざし・関わりを認識、安心感	保育士－保護者間の良好なコミュニケーションが育児支援に果たす大きな役割、問題予防、早期解決	保育士－保護者間の良好なコミュニケーションは、育児支援の大きな役割を果たしており、問題の予防、早期解決につながる。	
27	母が思っている以上に、子どもは園で頑張っている姿を教えてもらっているので、家でワガママでも安心する。ダメな親かも、と自信がなくなっても、こんな感じがいいのかなと思って安心する。	園で頑張っている姿、安心、自信がなくなっても、こんな感じがいいのかな、安心	子どもの頑張り、適訳的役割、安心感	客観的な視線を通した子どもの理解 子育てに対する安心感	保育士の“仲立ち”的な役割による子育てに対する意欲向上 保育士のはたらきかけが保護者の子育てに対する安心感向上につながる。	
29	相談しても、一方的だったり、決めつけたような言い方をされることが多く、相談する気になれない。	一方的、決めつけたような言い方、相談する気になれない	保育士の姿勢・態度、相談意欲の減退	相談のしづらさ	保育者の相談に対する姿勢・態度に問題がある場合がある。 相談意欲が減退することがある。	相談援助(ソーシャルワーク的関わり)に関する教育やトレーニングが不十分である。

そしてストーリーラインとして、以下の A から E までのカテゴリーに分類した。

<カテゴリーA：保育士と保護者間でコミュニケーションが十分にとれない現状、背景と要因>

保護者にとって、保育士と保護者間でコミュニケーションが十分にとれていないと考える理由として「多忙な保育士の勤務状況」を挙げる声が複数見られた。その場合、コミュニケーションがとれない、コミュニケーションがとれても十分ではない、という二つのパターンがある。前者は、保護者から声をかけづらい雰囲気があり、必要なときには、ためらいや遠慮とともに保護者からコミュニケーションをとっていること、それゆえに保育者からの積極的な話しかけを望んでいるにもかかわらず、実際には声かけが乏しい現状がある。後者は、コミュニケーションがとれている場合でも、時間の少なさや、限られた時間の中で内容が深まらない点が指摘された。

一方で、コミュニケーションが十分にとれない要因は保育士側だけでなく、保護者の側にもあった。早い時間帯の登園、遅い時間帯の降園により、担任保育士の勤務パターンと合わないために会えない、もしくは早朝、夕方の遅い時間帯は保育士の配置が少ないので話すことも難しい。また保護者側の忙しさ、余裕のなさからコミュニケーションをとりにくい場合もあった。

コミュニケーションが満足にとれない状況は、保護者の相談に乗ってほしいというニーズに十分に答えられていないことにもつながっていた。不安を抱えたり、問題が解決されないまま時間が経過する、困り感が解決されないまま終わってしまう状況が見られた。

現状に対し、保育士に対する一定の理解を示し、遠慮や諦めの気持ちを持ちながらも、相談箱や連絡帳の活用・充実など、直接的なコミュニケーションの補足、代替案が示され、保育士に可能な限り負担のかからない形を模索しつつ、現状改善を望む声が見られ

た。

<カテゴリーB：保護者が望むコミュニケーションと保育士の実践のずれと一致の要因>

次に、コミュニケーションの内容について、保護者の望む内容と実際にギャップがあることを指摘する声が複数あった。保護者は子どもの普段の様子や日々のできごとを知りたいにもかかわらず、保育士は「問題があった時」、「変わったこと」、「ケガなどの特別なできごと」などを伝えることが多い。また短時間でも、継続的にコミュニケーションをとりたいというニーズが見られた。一方で、コミュニケーションに対する満足感が高いのは、保育士からの積極的な声かけがあり、日々様子や保育士の気づきが細やかに保護者へ伝えられている場合である。保育士の子どもと保護者の“仲立ち”的な役割は、保育士への信頼の高まりとともに、保護者の子育てに対する意欲や自己肯定感の向上につながり、場合によっては、子育て不安の予防や早期発見・解決につながるという育児支援の大きな役割を果たしていた。

<カテゴリーC：月例や年齢に応じたコミュニケーション体制の変化と保護者の戸惑い>

月齢や年齢に応じてコミュニケーション体制が変化することに対する戸惑いを感じる保護者の声も見られた。特に0歳児クラスから乳児クラス、乳児から幼児クラスへの移行の際に、子どもの生活や環境が変化することで、保護者も不安感をいだきやすい。普段よりもコミュニケーションに対するニーズが高まるにもかかわらず、実際には保育士とのコミュニケーションがますますとれなくなっていると感じるパターンが複数見られた。

<カテゴリーD：コミュニケーションツールとしての連絡帳の効果>

連絡帳を保育士とのコミュニケーションツールとして評価している声が複数あった。降園時刻が遅い場合やクラス移行の際など、コミュニケーションがとりづらい環境や、いつも以上にコミュニケーションに対するニーズが高まる時期にも、連絡帳を活用することでカバーできている現状があった。連絡帳を通して担任への信頼感が増すという声もある。幼児組になると連絡帳というコミュニケーションシステムがなくなることに対して、改善を望む声が見られた。

<カテゴリーE：保育士のコミュニケーションスキルの個人差>

一部の保育士の雰囲気、姿勢や態度などにより、コミュニケーションのとりにくさ、相談のしづらさを指摘する意見が少数見られた。

第4節 まとめと考察

1. まとめ

まとめとして、以下の点が明らかになった。

(1)分析1のまとめ

①子育ての悩みや困りごとについて

- 1) 育児不安や悩みを抱えながら、子育てを行っている保護者が少なからず存在する。
- 2) 育児の悩みや困りごとの中には、子どもに関するだけでなく、保護者自身や育児環境など、子育てに関連する問題も広く含まれていた。
- 3) 育児の悩みを抱えながら、相談しないのではなく、相談できない保護者がいる。
- 4) 子育てに関する専門機関へ相談したいというニーズがあるにもかかわらず、実際は相談につながっていない。
- 5) 保育園の場合、タイミングやシチュエーション、さらには保育士のアプローチが、相談の実現を左右している。

②保育士—保護者間のコミュニケーションについて

- 1) 保育士と保護者間の日常的なコミュニケーションは概ね良好であるが、約3割の保護者はコミュニケーションがとれないと感じている。
- 2) コミュニケーションがとれない原因は、機会のなさ、回数の少なさ、時間の少なさ、内容に関する事、など複数あり、それらが影響しあっている。
- 3) 本来コミュニケーションとは、双方向のメッセージの伝達をさすが、概して保育士から保護者への一方向的なメッセージの伝達にとどまっている。
- 4) 降園時間、1回あたりのコミュニケーションの時間の長さが、保育士と保護者間のコミュニケーションや満足度に大きな関連があることが明らかになった。
- 5) それ以外の要素との大きな関連は見られず、コミュニケーションのあり方に決まった傾向やパターンは存在しなかった。

(2)分析 2 のまとめ

①保育士と保護者間でコミュニケーションが十分にとれない現状、背景と要因

- 1)保護者と保育士間のコミュニケーションが不十分な場合、①コミュニケーションが「とりにくい」ケースと②「とれない」ケースがある。
- 2)コミュニケーションが「とりにくい」要因としては、保育士の多忙な勤務状況が最も大きい。
- 3)保育士の多忙な勤務状況が、コミュニケーション機会の少なさ、時間の少なさ、内容の乏しさにつながっている。
- 4)コミュニケーションが「とれない」要因は、保護者の登降園時刻と大きな関連がある。
- 5)保護者(園児)の登降園時間によっては保育士の勤務パターンが合わず、そもそも顔を合わせる機会がほとんどない。
- 6)保護者は現状に対する一定の理解を持ちながらも、保育士の負担が過度にかかり過ぎないことに配慮しつつ、しかし保護者の事情に合わせた改善を望んでいる。

②保護者が望むコミュニケーションと保育士の実践のずれと一致の要因

- 1)コミュニケーションの内容については、保護者と保育士に大きなギャップが見られる。
- 2)保護者は保育士側から行う現状のコミュニケーションより、さらに広範な内容を望んでいる。
- 3)コミュニケーションに対する満足度が高いのは、積極的な保育士からのアプローチがあること、コミュニケーション内容が日常的な園生活に関連する場合などである。
- 4)良好なコミュニケーションは、保護者が抱える問題の早期発見、予防的な役割を果たすなど育児支援にもつながっている。

③月例や年齢に応じたコミュニケーション体制の変化と保護者の戸惑い

- 1)クラス移行など、子どもの生活や環境の変化は保護者の不安にもつながる。通常よりも濃密なコミュニケーションのニーズが高まるにもかかわらず、むしろ月齢や年齢に応じてコミュニケーション体制は階段式に縮小されるため、戸惑いを感じる保護者が存在する。

④コミュニケーションツールとしての連絡帳の効果

- 1)連絡帳をコミュニケーションツールの一つとして評価する声は高く、コミュニケーションにとどまらず、連絡帳を通じた保護者支援も見られる。
- 2)連絡帳の効果的活用は、現状の問題点(コミュニケーションのとりづらさ)を解決でき

る可能性がある。

⑤保育士のコミュニケーションスキルの個人差

- 1)高いコミュニケーションスキルを持ち、多忙な中でも保護者が満足するコミュニケーションがとれている保育士もいる一方で、保護者がコミュニケーションをとりづらさを感じるなど、課題を抱える保育士も存在し、個人差が大きい。

2. 考察

これまで本章の研究目的であった、保育現場におけるコミュニケーションの現状を明らかにした。以下では、調査結果に対する考察を行う。

(1)保護者は支援ニーズがあるにもかかわらず、保育所や保育士を含めた相談先にうまくつながっていないケースがある

子どもや保護者の生活は時代とともに複雑化、多様化しており、保護者が日々の子育てを行う中で不安や悩みを抱えた時、子育ての専門的な知識や技術を持つ保育園や子育ての専門職に相談したいというニーズが一定の割合で存在することが明らかとなった。

その点で、毎日のように保護者が足を運ぶ保育園、そこで働く専門職である保育士の存在は大きい。アクセスのしやすさ、相談のタイミングがはかりやすいことはもちろん、調査結果からは、日常のコミュニケーションの中で保育士から保護者へ行う声かけは、アプローチによって相談につながるケースも多く、保育士の行う保護者支援の重要性が改めて確認できた。

しかし同時に、次項であげるコミュニケーションが不十分な状況にも関連し、保護者支援のニーズに対して実際の相談につながりにくいことも明らかとなった。現状改善に向けて具体的な解決方法を模索することが必要である。

(2)保育士—保護者間の直接的なコミュニケーションは十分とはいえない難い場合がある

保育士と保護者にとって、直接的なコミュニケーションが最も望ましい形であることは間違いないものの、調査からは回数や時間が少ない、また双方向ではなく一方向からの情報にとどまっているなど、決して十分とはいえない難い実態がうかがえた。

その要因として、保育士の多忙な勤務状況、そして降園時間に表れる保護者の生活状況など、保育士と保護者の双方にあることも明らかとなった。

保育士側の要因を解決するためには、個人レベルを超え、勤務時間の見直しなど保育士が勤務する組織全体としての取り組み、さらには保護者との関わりに専念できる体制づくりなど、保育士の業務内容や働く環境設定など保育士が働く枠組みを規定する行政レベルでの取り組みが必要である。一方、保護者側の要因も同様に、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現に向けて、個人レベルのみならず、むしろ企業や行政を含めた社会全体での取り組みが必要である。どちらも長期的な視点で解決に向けて取り組むことは必要不可欠であり、現状として直ちに改善に向かうとは考え難い。

(3)直接的なコミュニケーション以外のツールも活用する必要がある

直接的なコミュニケーションに関する現状の問題点の多くをカバーできるツールとして、改めて連絡帳の意義が大きいことが明らかとなった。保育のツールとしてのみならず、保護者支援、保育ソーシャルワーク的支援を含めた効果的な活用のあり方を模索することは大きな意義がある。

(4) 二つのコミュニケーションツールを使いこなせる保育士のスキル向上が必要である

調査からは、保護者とのコミュニケーションにおいて保育士の個人差があることについて明らかとなった。一方で、そもそもコミュニケーションのあり方には決まった傾向やパターンが存在しないため、保護者一人ひとりの個別性に応じて、保育士がより良いコミュニケーションのあり方を見出す必要があり、保育士の高度な能力が必要とされている。

直接的なコミュニケーションと、連絡帳などの文字を通じたコミュニケーションの二つのツールを状況に応じて活用できるスキルをはじめ、専門職として一定の質が担保された関わりを行えるようになるために、さらに教育・研修内容を充実させる必要がある。

本章では、保育所における保育士—保護者間のコミュニケーションの状況を明らかにし、改めて連絡帳を用いた保護者支援、保育ソーシャルワーク支援の必要性が増していることを検証できた。次章では、本論文の全体的なまとめとして、総合的考察・本研究の意義、さらに本研究の限界や今後の展開について述べる。

終章

第1節 連絡帳を活用した保護者支援の可能性に関するまとめ

本研究の目的は、保育所の乳児クラスを中心に古くから行われている連絡帳に焦点をあて、保護者支援、さらにいえば保育ソーシャルワークを行うツールとして意味づけを行い、活用できる可能性を検討することにあつた。

その背景として、保育士が働く保育現場は、慢性的な施設不足、人手不足など厳しい勤務環境により、保育業務すら手一杯の状況で、十分に保護者支援が行いにくい事情があつた。また先行研究より、保育と専門性が大きく異なるソーシャルワークの理論をそのまま用いた保護者支援を行うことには様々な困難や課題があつた経緯から、保育士が取り組みやすい、新しい支援のあり方を模索することが必要であると考えた。さらに昨今の保護者や家庭が抱える問題の複雑化、多様化により、就学期においてスクールソーシャルワーカーなどの外部専門職の導入が進んでいることから、いずれ保育現場にも外部専門職が導入され、他職種との協働体制を構築する必要性が出てくることが予想された。

このような状況で、保育の専門性を活かせる支援、そして業務の負担を増さない支援が望ましいことから、保育業務として長らく行われてきた連絡帳に着目し、保護者支援や保育ソーシャルワークのツールとして活用できる可能性があると考えた。

保育現場で行われている保護者支援は、園長や主任など、一部の保育士が中心に担っている側面があり、現場の保育士にとって実践が蓄積されにくい、浸透しにくい問題点がある。しかし連絡帳であれば、新人からベテランまでキャリアを問わず行われている業務のため、保育士が行う保護者支援、保育ソーシャルワーク支援として定着しやすく、その意味でも活用する意義は大きい。

このように活用の可能性や意義が大きいと考えられる連絡帳であるが、実際に第3章、第4章の二つの調査により、連絡帳は保護者支援、保育ソーシャルワークの支援ツールとして活用が可能であると実証された。また第5章の調査により、保護者の一部には支援を受けたいというニーズがあるにもかかわらず、相談につながりにくい場合があること、また、保育士と保護者は毎日の送迎の際に顔を合わせる間柄にもかかわらず、保育士の多忙な状況や保護者の生活状況により、直接的なコミュニケーションが十分にとれていない現状も明らかとなったことで、連絡帳を活用した支援の必要性を検証できた。

以下では、全体を通じた総合的な考察として、本研究で得られた知見について述べる。

第2節 総合的考察

以下では、第3章の保育士に対するアンケート調査、第4章の実際の連絡帳を用いた質的分析、そして第5章の保護者に対するアンケート調査を通じての総合的考察を行う。

1. 第3章の考察

- (1) 専門職が行う業務の一つとして連絡帳業務の標準化、教育内容の構築が必要である。
- (2) 連絡帳はソーシャルワークのツールとして活用できる可能性が高い。
- (3) 連絡帳により、すべてのソーシャルワーク機能が担えるわけではない。
- (4) 保育士にとって連絡帳はソーシャルワークのツールであるという認識は乏しい。

2. 第4章の考察

- (1) 連絡帳を用いた保護者支援は可能であり、実際に保育士は連絡帳を活用してソーシャルワーク的支援を行っている。
- (2) 連絡帳業務は非常に個別性に富んでおり、現段階では標準化された業務とはいえない。
- (3) 連絡帳により、すべてのソーシャルワークが担えるわけではない。
- (4) 保護者にとって、保育士は子育てに関する相談を行う存在であるという認識が強い。

3. 第5章の考察

- (1) 保護者は支援ニーズがあるにもかかわらず、保育所や保育士を含めた相談先とうまくつながっていないケースがある。
- (2) 保育士—保護者間の直接的なコミュニケーションは十分とはいえない難い場合がある。
- (3) 直接的なコミュニケーション以外のツールも活用する必要がある。
- (4) 直接的コミュニケーション、文字を媒介とするコミュニケーションの二つを使いこなせる保育士のスキル向上が必要である。

4. 総合的考察

これまで述べた内容における総合的なまとめや考察については、図 終章—1 の通りとなった(図 終章—1 参照)。

第5章において、保護者は何らかの不安や悩みを抱えながら日々子育てをしており、保育士に対する一定の支援ニーズが認められるものの、保育士—保護者間のコミュニケーション状況は必ずしも十分なものとはいえない。そのため、直接的なコミュニケーション以外の手段、すなわち連絡帳を保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとして活用する可能性を模索する必要性が出てきた。保育士に対する意識調査においても、連絡帳を支援のツールとして活用することが可能だと考えている保育士は多く、実際に連絡帳の記述を分析した調査においても支援が行われていることを確認できた。しかし、実践は個人差も大きいため、今後すべての保育士が専門職として行う業務として確立するためには、業務の体系化・標準化が必要である。そのための教育内容の構築も合わせて行われるべきである。

一方で、連絡帳を活用するにあたり、連絡帳では、保育ソーシャルワーク的支援として行える機能や実現しにくい役割があることも確認され、今後は業務の整理・分類が必要とされる。そして何より保育士にとって、直接的なコミュニケーションがあるべき支援の姿であるという考えは根強く、連絡帳がソーシャルワーク的支援のツールとなりうるという意識も現段階では希薄である。しかし、直接的コミュニケーションが十分でない場合もあるという現状をふまえると、対面、文字という二つのコミュニケーションツールを状況に応じて使い分けられるよう、意識やスキルの向上が必要である、という結論に至った。

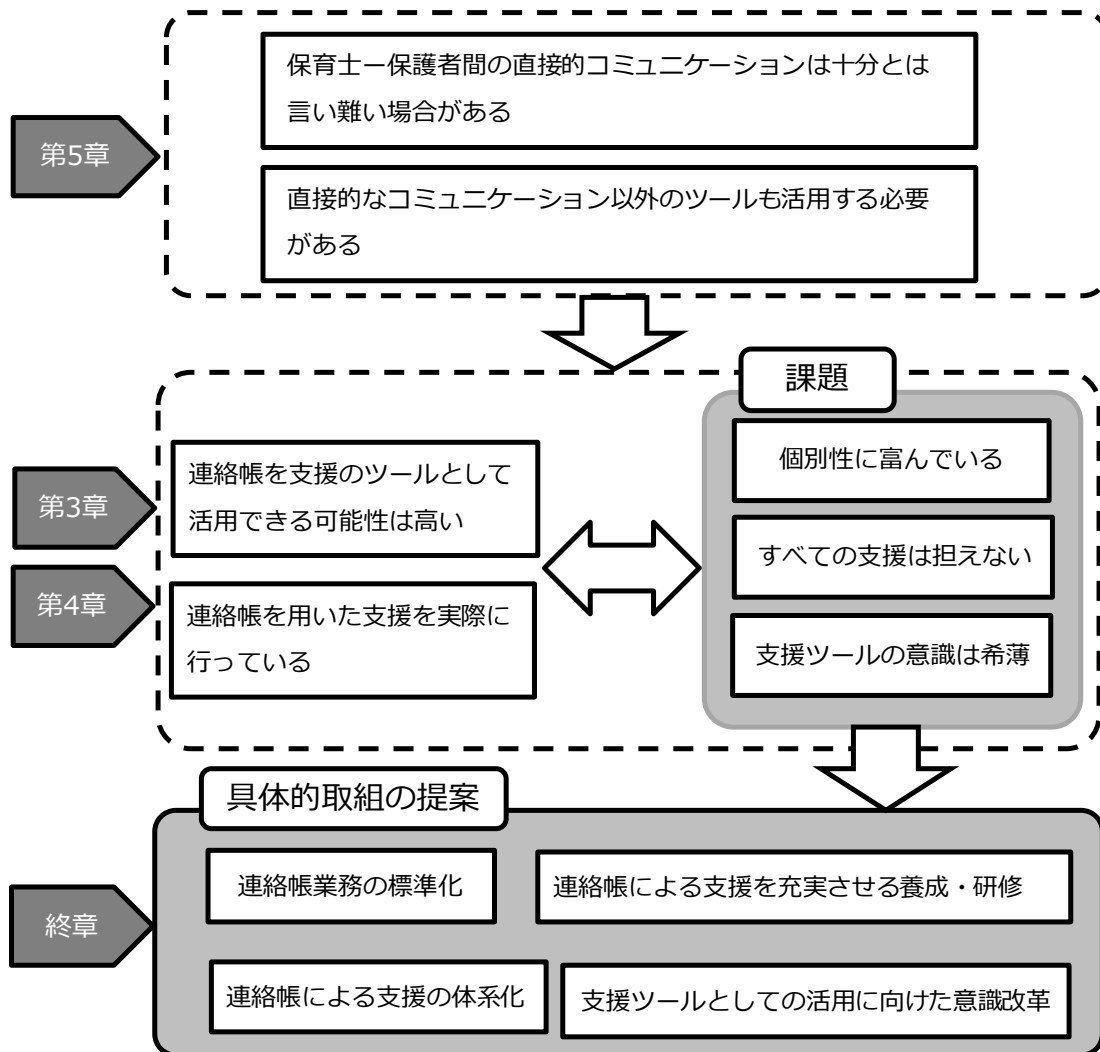


図 終章－1 総合的考察

第3節 文字を媒体とする支援の限界

連絡帳が支援のツールとして活用できることが明らかとなった一方で、文字を媒体とする支援の限界にも留意しておく必要がある((図 終章－2 参照)。

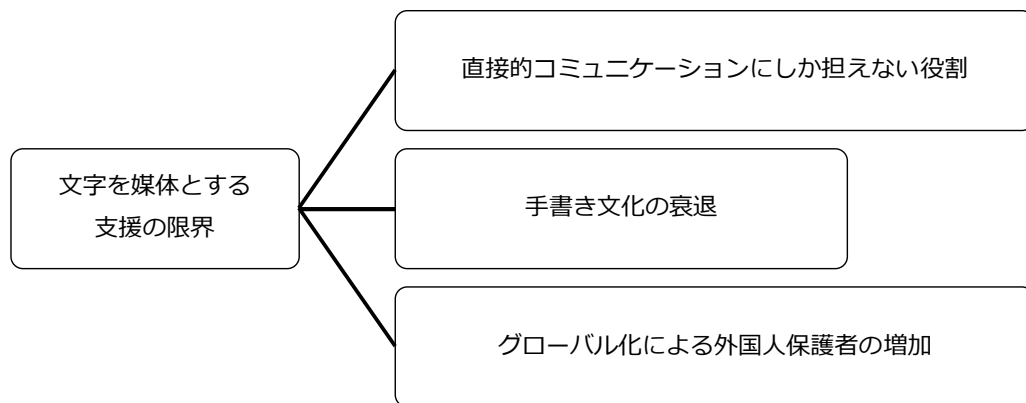


図 終章－2 文字を媒体とする支援の限界

本研究は、連絡帳という文字を媒体としたコミュニケーションによる支援のあり方を模索したものであったが、一方では本論で繰り返し述べているように、文字を通じた支援には一定の限界がある。第3章、第4章の調査結果から、連絡帳により支援が可能な役割と、そうでない役割が明確に存在していた。すなわち、これは「直接的なコミュニケーションにしか担えない役割」があることを意味している。

また、時代の変化によりメールやパソコンなどがコミュニケーション手段として利用されることが飛躍的に増え、昨今は手書き文化の衰退が顕著になっている。文化庁が行った2014(平成26)年度の「国語に関する世論調査」において、日常生活において、文字を手書きする機会があるかとの問いに、「よくある」と回答したのは38.2%、「時々ある」34.4%、「余りない」が20.9%、「ない」が6.4%、「分からない」が0.1%であった。「よくある」を除いた、約6割強が文字を日常的に書かない生活だとすれば、今後保育士・保護者の双方に書くことを苦手とする人の増加が予想される。

また、日本に暮らす外国人や国際結婚の増加などにより多文化保育の機会も増加している。富谷ら(2012)の研究において、外国人保護者にとって連絡帳は心理的、実質的な負担がかかることが明らかとなっているように、一定の割合で連絡帳が支援のツールとはなりにくい状況が予想される。

これらの状況に応じ、個々に望ましい支援のあり方を模索していく必要があることはいうまでもない。

第4節 本研究の限界と今後の課題

本研究における限界として、まずは量的、質的調査ともにデータが少なかったことが挙げられる。そもそも連絡帳は、子ども、時には保護者や家庭に関するプライベートなことが内容のほとんどを占める。そのため倫理的にも非常に慎重である必要があり、データ収集が非常に難しい実情があった。データの数的不足は地域性の偏りにもつながり、その普遍性には当然限界がある。今後はさらにデータの数を増やし、その所在地も含め広げていくことも重要な課題として残された。また、本研究は保育所における、紙媒体としての連絡帳を対象としたが、2015(平成27)年4月から施行された子ども・子育て支援新制度により、認定こども園や小規模保育事業など保育に関わる施設は多様化している。さらに、技術の進歩やインターネット文化の普及・浸透にともなって、「電子連絡帳」「デジタル連絡帳」などを活用されている保育施設も今後は増加することが予想される。今後は多様な保育施設、連絡帳の形態にも研究の範囲を広げる必要があると考えられる。

さらに本研究においては、連絡帳が保護者支援、保育ソーシャルワークのツールとして活用可能であるという実証にとどまり、活用に向けての具体的な取り組み方の提示やその検証までには及ばなかった。

そこで、今後の課題として次の2点を挙げる。

連絡帳が保護者支援、保育ソーシャルワーク支援のツールとして活用が可能であることが確認できたことで、1点目の課題となるのが連絡帳を活用した支援をより充実させていくための取り組みである(図 終章—3 参照)。

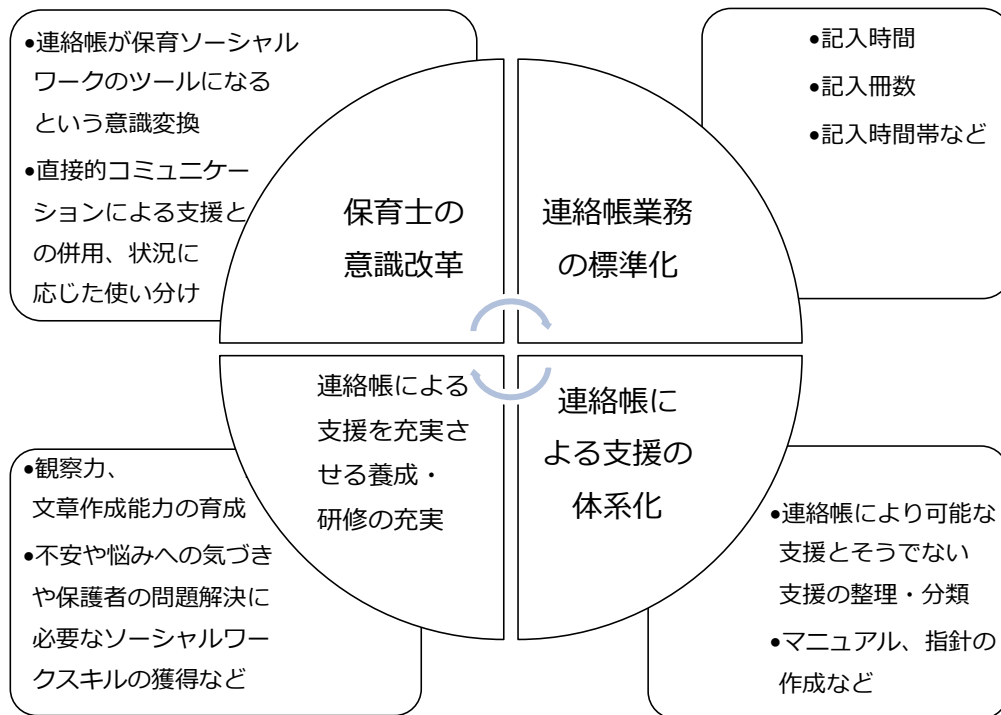


図 終章－3 連絡帳による保護者支援をより充実させていくための取り組み

具体的には、連絡帳の記入にかける時間などをはじめ、連絡帳における業務実態の標準化が必要である。そして連絡帳による支援の体系化として、連絡帳により可能な支援とそうでない支援の整理・分類、表4-12(72頁参照)に示したような連絡帳を通して支援が可能な機能を中心にマニュアルや指針づくりを行うことも有用である。その作業と同時に、教育内容の構築化が行われるべきであり、それらの教育や実践を通して保育士の意識変革は進むと考えられる。もし連絡帳が保育ソーシャルワークのツールであるという認識が浸透すれば、連絡帳は今以上に活用され、保育士が行う保護者支援としても質的に向上することは確実である。

2点目の課題は、他職種との協働体制の構築に向けての模索である。序章の第2節でも述べたように、そもそも連絡帳は、他職種との協働体制を前提とする中で、保育士にしか行えない、保育の専門性を活かした保護者支援のあり方を探るために着目したものである。

保育所保育指針解説書(2008,pp.12-13)においては「保育の専門性」について、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する

技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術、と列挙されている。

やはり保育士が担うべき専門性として、第一義的な性格を持つものは①から⑤の保育の部分であり、それらに付随する形としての⑥の位置づけであると理解するならば、現場の保育士にとって、担う範囲を限定せざるをえないのは、ある意味で仕方のないことである。

しかし、現実的に保護者の子育て環境は厳しくなる一方である。前述したように、育児の悩みや困りごとの中には、児童福祉法や保育所保育指針で保育士に求められる「子育てに関する指導」を超えたものも含まれており、当事者の困りごとに誰も対応できないという事態が実際に起こっている。就学期の分野で急速に導入が進められているスクールソーシャルワーカーの存在を参考にしつつ、保育領域においても導入を検討する時期にきていると考えられる。

また、筆者は昨年カナダ・ブリティッシュコロンビア州の保育士を対象に保護者支援に関するアンケート調査を行った(丸目,2015)。9割以上の保育士が保護者の不安や悩みに気づくことは日本もカナダも同じであったが、カナダの保育士は子育てに関する内容よりも保護者や家庭の不安や悩みを聞くことが多いという調査結果を得た。さらにカナダでは保育士が保育所外にある他機関や他職種に「つなぐ」役割を積極的に担っていることも明らかとなった(資料参照)。

移民社会のカナダでは、文化的背景が個々に異なる家庭を支えないと保育が成り立たない事情もあり、子育て支援の範囲は日本より広範に捉えられている。それは日本の保育現場が直面している、家庭に介入しないと子どもの育ちや保育所での保育が成り立たない状況においても、非常に参考となることは間違いない。他国との比較は日本の保育士の保護者支援のあり方を考える上で意義が大きく、今後の研究課題としたい。

引用文献

F

福田 公教・石田 慎二(2005)「保育所におけるソーシャルワーク機能の検討」, 佛教福祉学 (13), pp.71-81

H

半澤幸恵(2015)「保育所における幼児連絡帳にみる保育者と保護者の関係変容プロセス」, 中部教育学会紀要(15), pp.30-39

林悠子(2009)「連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程」, 乳幼児教育学研究 (18), pp.121-132

林悠子(2015)「保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義」, 保育学研究 53(1), pp.78-90

広沢 洋子・清水 玲子他(1996)「保育者と保護者の相互交流--連絡帳を通して」, 運動・健康教育研究 6(1), pp.8-14

I

今堀 美樹(2005)「保育ソーシャルワーク研究 :保育士の専門性をめぐる保育内容と援助技術の問題から」, 神学と人文 : 大阪基督教学院・大阪基督教短期大学研究論集 42, pp.183-191

井上寿美(2010)「保育ソーシャルワーク」における「ソーシャルワーク」のとらえ方に関する一考察―「保育士が行うソーシャルワーク活動」を中心として―, 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 (13), pp.127-135

石田慎二(2006)「保育所の子育て支援に対する意識とソーシャルワーク機能に関する考察」 社会福祉士 (13), pp.109-115

伊藤 利恵・渡辺 俊之(2007)「保育ソーシャルワークの展望」高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要 4(1), pp.29-40

伊藤 利恵・渡辺 俊之(2008)「保育所におけるソーシャルワーク機能についての研究--テキストマイニングによる家族支援についての分析」, 健康福祉研究 5(2), pp.1-26

K

上村 麻郁(2009)「保育とソーシャルワークに関する一考察」 清和大学短期大学部紀要 (38), pp.25-31

河村 裕次・鍋田 耕作・高橋 淳一郎(2013)「保育所における保護者への子育て支援についての一考察」,日本文理大学紀要 41(1), pp.1-8

橋田 康世(2012)「保育所保育士における「保護者に対する支援」の現状と課題」東洋大学大学院紀要 49(社会学・福祉社会), pp.103-127

岸本 美紀・武藤 久枝(2013)「保育所保護者が望む保護者支援についての検討：育児の困り事、相談相手、相談方法に関する質問紙調査による分析」,保育士養成研究 (31),pp.125-134

剣持安里・山内紀幸(2005)「保育者と保護者の連携：0歳児～2歳児の連絡帳のメッセージ分析を通して」山梨学院短期大学研究紀要 26, pp.43-53

高向山(2013)「保育所(3歳未満児クラス)と家庭を結ぶ連絡帳：昭和後期から平成における通時的考察」健康プロデュース雑誌 7(1), pp.39-45

高 向山・若尾 良徳(2015)「保育所と家庭を結ぶ連絡帳:対人コミュニケーション機能に注目して」,常葉大学健康プロデュース学部雑誌 9(1), pp.93-98

厚生労働省(2008)『保育所保育指針解説書』フレーベル館

厚生労働省(2009)「保育士養成課程見直しの経緯」

厚生労働省(2010)「保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)」

M

丸目満弓・立花直樹(2012)『保育士をめざす学生のソーシャルワーク業務に関する意識および意欲についての一考察』兵庫大学短期大学部研究第 46 号,pp.63-77

丸目満弓(2014)「保育とソーシャルワーク」『児童家庭福祉の相談援助』建帛社,pp.35-58

丸目満弓(2014)「保育者養成におけるソーシャルワーク教育」『日本保育ソーシャルワーク学会(編) 保育ソーシャルワークの世界—理論と実践—』晃洋書房,pp.115-116

丸目満弓(2015)「カナダ・ブリティッシュコロンビア州における保育士(Early Childhood Educator)が行う保護者支援の現状について ～日本の保育士との比較を交えて～」,日本保育ソーシャルワーク学会第 2 回大会要旨原稿

丸目満弓(2015)「保育ソーシャルワークのツールとしての連絡帳活用の可能性について」, 保育ソーシャルワーク学研究(1),pp.25-40

宮崎 つた子・梶 美保(2012)「保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究--保育所保育士の保護者支援を中心に～保育所保育士における「保護者に対する支援」の現状と課題～」高田短期大学紀要 30, pp.131-139

宮里 慶子(2008)「保育における子育て支援の課題：求められる新しい理念と技術」, 保育研究 36, pp.15-22

望月 彰・諏訪 きぬ・山本 理絵(2008)「子育て中の父親・母親が保育園に望んでいること」発達 29(114), pp.26-33

森本 美絵・加用 美代子(2015)「0歳児保育において連絡帳で何がかわされているのか：連絡帳の意義・再考に向けた探索的研究」,京都橋大学研究紀要 (42),pp.73-90

N

中平 絢子,馬場 訓子,竹内 敬子他(2016)「保育所におけるソーシャルワークに関する現状と課題」岡山大学教師教育開発センター紀要 6, pp.21-30

中平絢子・馬場訓子・高橋 敏之(2014)「信頼関係の構築を促進する保育所保育士の保護者支援」,岡山大学教師教育開発センター紀要 4, pp.63-71

中村誠文・岡田明日香・藤田千鶴子(2012)『連携』と『協働』の概念に関する研究の概観：概念整理と心理臨床領域における今後の課題」鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要(7), pp.3-13

中山智哉(2015)「保育所保育士の保護者支援スキルが保護者との関係形成に及ぼす影響：保育経験年数別による比較分析」,保育文化研究(1), pp.13-25

日本保育協会(2000)「保育所における家庭・保護者との連携に関する調査研究報告書」
http://www.nippo.or.jp/cyosa/12_04/04_ta.htm(2016年12月1日確認)

日本保育ソーシャルワーク学会「初級保育ソーシャルワーカー養成研修 2016(平成 28)年12月3日(近畿地区)資料」(作成者：鶴宏史氏)

二宮祐子(2010)「保育者-保護者間のコミュニケーションと信頼--保育園における連絡帳のナラティブ分析」福祉社会学研究(7), pp.140-161

西垣 吉之・山田 陽子他(2004)「保育における育ちをとらえる視点に関する一考察：『つなぐ』行為から」中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 5, pp.41-56

西脇二葉(2006)「家庭と保育者との連携における連絡帳の役割に関する研究：保育園児の人間関係に着目して」武蔵野短期大学研究紀要 20,pp.203-209

O

大津泰子(2010)「保育士の専門性を高めるための課題--保育士養成の動向から」,近畿大学九州短期大学研究紀要,第 40 号,pp.13-26

S

柴崎 正行・会森 恵美(2016)「保育所における保護者支援についての検討：

『クラスだより』の分析を通して」,大妻女子大学家政系研究紀要 52, pp.157-162

蘇 珍伊(2008)「保育所におけるソーシャルワークの機能に関する研究--保育士の役割に焦点を当てた質的内容分析」,現代教育学研究紀要(1), pp.79-88

鈴木敏彦・横川剛毅(2010)「保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究--保育所保育士の保護者支援を中心に」『和泉短期大学研究紀要』第 30 号,pp.1-15

T

竹之下典祥・前田佳代子・加納 光子他(2012)「タイムライン調査を中心とした保育所保育士のソーシャルワーク業務分析」保育士養成研究(30), pp.51-60

高野亜紀子(2013)「保育ソーシャルワークと保育士養成に関する一考察」東北福祉大学研究紀要 37, pp.159-174

千葉 千恵美・鑑 さやか・渡辺 俊之(2007)「保育所保育士による家族支援：27 例のケース検討会から」,高崎健康福祉大学紀要 6,pp.91-104

土田 美世子(2006)「エコロジカル・パースペクティブによる保育実践」,ソーシャルワーク研究 31(4), pp.285-294

土田美世子(2010)「保育所によるソーシャルワーク支援の可能性：保育所へのアンケート調査からの考察」龍谷大学社会学部紀要第 37 号,pp.15-27

鶴 宏史(2004)「子育て支援における援助初期の面接技法に関する考察：保育ソーシャルワーク試論(1)」,神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要 1, pp.49-56

鶴宏史(2009 a)『保育ソーシャルワーク論－社会福祉専門職としてのアイデンティティ』
あいり出版,pp.74

鶴宏史(2009 b)「保育所におけるソーシャルワーク実践研究」,博士論文,大阪府立大学,
大阪

鶴 宏史・中谷 奈津子・関川 芳孝(2016)「保育所における生活課題を抱える保護者への
支援の課題：保育ソーシャルワーク研究の文献レビューを通して」,武庫川女子大学大
学院 教育学研究論集第 11 号,pp.1-8

U

上村 裕樹・坂本 大輔(2014)「保育所における保護者支援の実態に関する一考察：
保育所を対象とした質問紙調査より」社会福祉科学研究 3, pp.25-32

Y

山本佳代子(2013)「保育ソーシャルワークに関する研究動向」山口県立大学学術情報 6,
pp.49-59

山本佳代子(2014)「保育所を中心とした地域連携の現状と実践的課題：保育ソーシャル
ワークの観点から(<特集>地域を基盤としたソーシャルワークの展開について)」山口県
立大学学術情報 7, pp.105-120

山本 真実(2000)「保育所機能の多様化とソーシャルワーク (特集 ソーシャルワーク実
践としての家族支援)」ソーシャルワーク研究 26(3),pp.193-200

米山 珠里(2012)「保育所におけるソーシャルワークに関する現状と課題：弘前市内の保
育士に対するアンケート調査結果を中心に」東北の社会福祉研究(8), pp.47-60

資料1：アンケート用紙(保護者対象)

「保育所保育士における保護者支援のあり方」に関するアンケート

(保護者の方向け)

【アンケート記入についての注意事項】

- ・特に注意書きがない場合、回答は1つだけ選んで○をつけてください。
- ・「3つ選択」の場合は、度合の強いものから順に選択してください。
- ・該当部分についてはご記入ください

1. あなたご自身とお子様についてお答えください。

問1. ご記入者とお子様との関係	1. 母親 2. 父親 3. 祖父母 4. その他()
問2. あなたのご年齢	1. 10歳代 2. 20歳代 3. 30歳代 4. 40歳代 5. それ以上
問3. あなたの仕事形態	1. フルタイム 2. パートタイム 3. その他()
問4. お迎えの時間(平均して)	1. 15時台 2. 16時台 3. 17時台 4. 18時台
問5. 主な送迎者	1. 母親 2. 父親 3. 祖父母 4. その他()
問6. 身近な育児の援助者	1. なし 2. あり (間柄:)
問7. 育児の援助体制について	1. かなり満足 2. 満足 3. もう少し援助が欲しい 4. かなり援助が欲しい
問8. お子様の年齢	1. 0歳児 2. 1歳児 3. 2歳児 4. 3歳児 5. 4歳児 6. 5歳児
問9. 現在通園しているお子様	1. 1人 2. 2人 3. 3人 4. それ以上()人
問10. 保育園の利用年数 (※上のお子様からの通算年数)	1. 1年未満 2. 1年以上～2年未満 3. 2年以上～3年未満 4. 3年以上～4年未満 5. 4年以上5年未満 6. 5年以上

2. 子育てに関してお答えください

問11. 育児に対する不安感	1. かなり感じる 2. 少し感じる 3. あまり感じない 4. 全く感じない
問12. 具体的な悩み・困りごと	1. よくある 2. たまにある 3. あまりない 4. 全くない ※1、2と回答された方は問13へ、※※3、4と回答された方は問17へ
問13. 具体的内容について	多い順に、以下から記号を選んで下さい (1)()→(2)()→(3)() 子どもに関連①発達や成長 ②食事や排泄、睡眠など生活上のこと ③健康や病気 ④教育 ⑤対人関係 親に関連⑥しつけ ⑦関わり方 ⑧育児に関する人間関係 ⑨健康問題 育児環境⑩仕事との両立 ⑪育児サポート ⑫兄弟姉妹との関係 ⑬その他()
問14. 育児相談の希望	1. 育児の悩みを相談する 2. 相談しない(理由:)
問15. 相談したい相手	1. 配偶者 2. 父母(子どもからみて祖父母) 3. 記入者の兄弟姉妹 4. 保育園の友人 5. 保育園外の友人 6. 保育園 7. 子育て相談の専門機関 7. その他()
問16. 実際に相談する相手	1. 配偶者 2. 父母(子どもからみて祖父母) 3. 記入者の兄弟姉妹 4. 保育園の友人 5. 保育園外の友人 6. 保育園 7. 子育て相談の専門機関 8. その他()

3. 保育園の先生との日常的なコミュニケーションについてお答えください。

問17.担任の先生とのコミュニケーション	1. よくとれている 2. とれている 3. あまりとれていない 4. 全くとれていない
問18.コミュニケーションの時間(概ね)	1. 月に平均して()回程度、1回につき()分程度
問19.コミュニケーションのタイミング	1. 登園時 2. 降園時 3. 行事のとき 4. その他()
問20.コミュニケーションをとるきっかけ	1. 先生から声をかけられる 2. 自分から声をかける 3. その他()
問21.コミュニケーションの内容	1. 子どもの園での様子 2. 子どもの家庭での様子 3. 保護者自身について 4. その他()
問22.コミュニケーションの満足度	1. 満足 2. 概ね満足 3. あまり満足していない 4. 全く満足していない ※2, 3, 4と回答された方は問23へ ※1と回答された方は問24へ
問23.その理由について	1. 時間が足りない 2. 回数が足りない 3. 先生に会えない 4. 自分の話したいことが話せない 5. その他()
問24.日常的なコミュニケーションに対するご意見(自由記述)	担任の先生との日常的なコミュニケーションについてご意見等がありましたら、何でも自由にお書きください

4. 保育園の育児支援体制について、お答えください

問25. 育児相談の希望	1 相談したいことがある(あった) 2. 相談したいことはない ※1と回答された方は問26へ ※2と回答された方は問27へ
問26. 育児相談の有無	1. 実際に相談する(した) 2. 相談できない(できなかった) ※1と回答された方は問28へ ※2と回答された方は問27へ
問27. 相談に至らなかった理由	1. 相談しやすい雰囲気ではないから 2. 相談できる場所がないから 3. 先生に会えないから 4. 保育園以外で相談する(した)から 5. 相談することがないから 6. その他()
問28. 相談したいことがある時の行動	1. 相談したい旨を話し、相談日時を予約する 2. 登降園時などに担任の先生に声をかけ、その場で話す 3. 担任の先生に声をかけられた時に話す 4. 連絡帳に記入する 5. 手紙を書く 6. 電話する 7. 園長先生の朝立ちタイムに相談する 8. その他()
問29.保育園内で相談したい相手	1. 担任の先生 2. 主任の先生 3. 園長先生 4. その他()
問30.相談したい具体的内容	多い順に、以下から記号を選んで下さい (1)()→(2)()→(3)() 子どもに関連(①発達や成長 ②食事や排泄、睡眠など生活上のこと ③健康や病気 ④教育 ⑤対人関係) 親に関連(⑥しつけ ⑦関わり方 ⑧育児に関する人間関係 ⑨健康問題) 育児環境(⑩仕事との両立 ⑪育児サポート ⑫兄弟姉妹との関係 ⑬その他()
問31. 保育園が行う育児相談支援に対する意見(自由記述)	保育園が行う育児相談支援に対して、ご意見等がありましたら、なんでも自由にお書きください

5. 連絡帳についてお答えください(乳児組の方のみご回答ください)

問 32. 内容の把握について	1. 毎日読んでいる 2. 時々読んでいる 3. 読んでいない 4. その他()
問 33. 保護者からのコメント	1. 書いていない 2. 書いている(だいたい週()回程度)
問 34. 満足度	1. 満足 2. 概ね満足 3. あまり満足していない 4. 全く満足していない ※1、2と回答された方は問36へ ※※3、4と回答された方は問35へ
問 35. その理由について	1. 内容的に不十分 2. 量的に不十分 3. その他()
問 36. 連絡帳に書いて欲しい内容	多い順に、以下から記号を選んで下さい (1)()→(2)()→(3)() ①子どもの成長に関すること ②食事や排泄、睡眠など生活上のこと ③健康や病気に関すること ④子ども同士の関係に関すること ⑤自分が書いたコメントに対する回答 ⑥その他()
問 37. 保護者からの相談や質問	1. 連絡帳に書いたことがある 2. 書いたことはない 3. その他()
問 38. 保育園の先生とのコミュニケーション手段として	1. とても役に立っている 2. 役に立っている 3. あまり役にたっていない 4. ほとんど役にたっていない 5. その他()
問 39. 連絡帳に関する要望(自由記述)	連絡帳の内容などについて、要望・ご意見等がありましたら、自由にお書きください

最後に記入もれがないかご確認いただき、事務所のポストに投函してください。

ご協力いただき、本当に有難うございました！

資料 2 : アンケート用紙(保育士対象)

連絡帳を通した保護者支援に関するアンケート

【アンケートご協力をお願い】

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、この度「連絡帳を通した保護者支援に関するアンケート」を作成いたしました。現場で保育をされている方々を対象に、保育現場で広く活用されている連絡帳に関して、また連絡帳を通して行われる保護者支援の実情についてお尋ねできましたら幸いです。ご記入につきましては任意です。ご多忙な業務の中を恐縮ですが、以下のアンケートにご協力くださいますよう、お願いいたします。

なお、アンケート結果については、無記名のうえ数値で集計され、個人の回答が外部にもれることはありません。また、調査結果が研究目的以外に用いられることはありませんので、どうぞご安心ください。

この調査に関して、ご質問やご意見がございましたら、お手数ですが下記まで宜しくお願い致します。

平成 27 年 11 月 9 日

大阪市東住吉区湯里 6-4-26 大阪総合保育大学大学院
大方美香教授研究室 気付
大阪総合保育大学大学院博士後期課程 丸目 満弓
Tel : 06-6702-0334 Fax : 06-6704-0996
メール : 7149505@jonan.ac.jp

I あなたご自身について、お答え下さい。(すべての設問に一つだけ○をつけて下さい)

1. 勤務形態について ① 正職員 ② パート職員 ③ その他()

2. 保育士資格の取得ルートについて

① 短期大学 ② 四年制大学 ③ 専門学校 ④ 保育士試験

3. 保育士としてのキャリア年数について (※他の職場での勤務経験も含みます)

通算()年、保育士として勤務している

4. 保育所の乳児組を担当された経験年数について (※他の職場での勤務経験も含みます)

通算()年、乳児組を担当したことがある

5. 年齢について

① 20歳未満 ② 20～24歳 ③ 25～29歳 ④ 30～34歳
⑤ 35～39歳 ⑥ 40～44歳 ⑦ 45～49歳 ⑧ 50歳以上

6. 保育士の業務全体に対する意欲について (あてはまる数字に○をつけて下さい)

1 - 2 - 3 - 4 - 5
非常に低い ぶつう 非常に高い

7. 保護者支援業務に対する意欲について (あてはまる数字に○をつけて下さい)

1 - 2 - 3 - 4 - 5
非常に低い ぶつう 非常に高い

8. 連絡帳業務に対する意欲について (あてはまる数字に○をつけて下さい)

1 - 2 - 3 - 4 - 5
非常に低い ぶつう 非常に高い

II 連絡帳に関して、お答え下さい (連絡帳を記入されている方のみ、ご記入下さい)

1. 1日の記入冊数と記入時間について、下線の()に数字をご記入下さい

1日の連絡帳業務につき約()冊を記入し、1冊あたり約()分かけて記入している

2. 連絡帳が記入しにくいと思うことはありますか。一つだけ○をつけて下さい

- ① よくある ② ある ③ あまりない ④ 全くない

※①、②と回答された方は質問の3へ

※③、④と回答された方は質問の4へ

3. 記入しにくい原因は、どのようなことですか。(あてはまるものにすべてに○をつけて下さい(複数回答))

- ① 保育士との関わりが少ない子どもの場合 ② 子どもに特筆すべき事項がない場合
 ③ 対応が難しい保護者の場合 ④ 保護者の応答が少ない場合
 ⑤ 保護者とコミュニケーションがとれていない場合 ⑥ 子どもの行動を把握しにくい場合
 ⑦ 文章化することが難しい場合 ⑧ 書くべきことを覚えきれない場合
 ⑨ その他()

4. あなたが保育士として連絡帳に記入する内容について、以下の該当する番号に○をつけて下さい

	記入頻度 (近いものを選んで下さい)			
	ほぼ毎日	1週間に1~2回	2週間に1~2回	1ヶ月に1~2回
① 子どもの発達に関して	1	2	3	4
② 保育所での遊び(活動)に関して	1	2	3	4
③ 保育士と子どもとの関わりについて	1	2	3	4
④ 子ども同士の関係について	1	2	3	4
⑤ 家庭での養育に関して	1	2	3	4
⑥ 子どもの発言、つぶやきに関して	1	2	3	4
⑦ 生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して	1	2	3	4
⑧ 健康や病気に関して	1	2	3	4
⑨ ①~⑧以外に対する、保護者への応答	1	2	3	4
⑩ その他()	1	2	3	4



5. 2に対して**保護者が**家庭で連絡帳にコメントする内容について、以下の該当する番号に○をつけて下さい

	記入頻度 (近いものを選んで下さい)			
	ほぼ毎日	1週間に1~2回	2週間に1~2回	1ヶ月に1~2回
① 子どもの発達に関して	1	2	3	4
② 保育所での遊び(活動)に関して	1	2	3	4
③ 保育士と子どもとの関わりについて	1	2	3	4
④ 子ども同士の関係について	1	2	3	4
⑤ 家庭での養育に関して	1	2	3	4
⑥ 子どもの発言、つぶやきに関して	1	2	3	4
⑦ 生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して	1	2	3	4
⑧ 健康や病気に関して	1	2	3	4
⑨ ①~⑧以外の、保育者のコメントに対する応答	1	2	3	4
⑩ 保護者が抱える不安や悩みについて	1	2	3	4
⑪ その他()	1	2	3	4

6. 連絡帳を通じて、保護者の不安や悩みに気づくことがありますか。一つだけ○をつけて下さい

- ①ほぼ毎日ある ②1週間に1、2回ある ③1ヶ月に1、2回ある ④1年に1、2回ある
⑤ない ⑥その他()

※①、②、③、④、⑥と回答された方は質問の7へ

※⑤と回答された方は質問の9へ

7. 連絡帳を通して気づく、保護者の不安や悩みはどのようなことが多いですか。一つだけ○をつけて下さい

- ① 子どもに関すること ② 保護者自身に関すること ③ 家庭内の問題に関すること
④ その他()

8. 保護者の不安や悩みに気づいた時、具体的にどのような対応を行うことが多いですか。

一つだけ○をつけて下さい

- ① 連絡帳を通じて相談支援を行う ② 日常的な機会を捉えて話す ③ 個人面談を行う
④ 主任保育士や園長に報告し、対応を依頼する ⑤ その他()

9. 保護者支援の一環として、連絡帳を役立てていますか。一つだけ○をつけて下さい

- ①ほぼ毎日役立てている ②1週間に1~2回役立てている ③1ヶ月に1~2回役立てている
④1年に1~2回役立てている ⑤連絡帳を保護者支援に役立てようと思わない
⑥役立てたいが、実際は役立てていない ⑦その他(()

10. 連絡帳は保護者支援のツールとしてどんな点が強みだと思いますか。それぞれ一つだけ○をつけて下さい

	とても そう思う	そう 思う	あまり 思わない	全く 思わない
① 日常的に保護者とやりとりできる点	1	2	3	4
② 双方向のコミュニケーション手段となる点	1	2	3	4
③ 送りが早い、迎えが遅いなど、直接会えない保護者とコミュニケーションがとれる点	1	2	3	4
④ 内容によっては、対面よりも文章上のコミュニケーションの方がスムーズにとれる点	1	2	3	4
⑤ その他()	1	2	3	4

11. 連絡帳を通して実際に行っている保護者支援について、1～4の数字に一つだけ○をつけて下さい

	よく ある	ある	あまり ない	全く ない
① 保護者の <u>不安や悩みに気づく</u>	1	2	3	4
② 保護者の不安や悩みに <u>寄り添い・共感する</u>	1	2	3	4
③ 保護者の不安や悩みに対して、 <u>具体的にアドバイスをする</u>	1	2	3	4
④ 保護者の不安や悩みに対して、 保育所外の子育て支援サービスの <u>紹介や情報提供をする</u>	1	2	3	4
⑤ 子どもの成長・発達を伝え、 保護者の不安や悩みを <u>未然に防ぐ(予防する)</u>	1	2	3	4
⑥ 子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対して <u>理解を深められるようにする</u>	1	2	3	4
⑦ 子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対する <u>喜びを実感できるようにする</u>	1	2	3	4
⑧ 子どもの成長・発達を伝え、保育所外の子育て支援サービスの <u>紹介や情報提供をする</u>	1	2	3	4
⑨ 保育者の子どもに対する関わりを伝え、保護者に保育所や 保育士に対する <u>信頼をもってもらえるようにする</u>	1	2	3	4
⑩ 保育者の子どもに対する関わりを伝え、 <u>家庭と園が連携して子育てができるようにする</u>	1	2	3	4
⑪ <u>親子の関係</u> がうまくいくように <u>仲立ち</u> する	1	2	3	4
⑫ <u>保護者同士</u> の <u>関係</u> がうまくいくように <u>仲立ち</u> する	1	2	3	4

12. 連絡帳を通して保護者支援が行える可能性について、1～4の数字に一つだけ○をつけて下さい

	活用の可能性は			
	大いに ある	ある	あまり ない	全く ない
① <u>保護者同士の関係</u> がうまくいくように <u>仲立ち</u> する	1	2	3	4
② 保護者の不安や悩みに対して、保育所外の子育て支援サービスの <u>紹介や情報提供</u> をする	1	2	3	4
③ 保護者の不安や悩みに対して、 <u>具体的にアドバイス</u> をする	1	2	3	4
④ 保護者の <u>不安や悩みに気づく</u>	1	2	3	4
⑤ 保護者の不安や悩みに <u>寄り添い・共感</u> する	1	2	3	4
⑥ 保育者の子どもに対する関わりを伝え、保護者に保育所や保育士に対する <u>信頼をもってもらえるようにする</u>	1	2	3	4
⑦ 保育者の子どもに対する関わりを伝え、 <u>家庭と園が連携して子育て</u> ができるようにする	1	2	3	4
⑧ <u>親子の関係</u> がうまくいくように <u>仲立ち</u> する	1	2	3	4
⑨ 子どもの成長・発達を伝え、保護者の不安や悩みを <u>未然に防ぐ(予防する)</u>	1	2	3	4
⑩ 子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対する <u>喜びを実感</u> できるようにする	1	2	3	4
⑪ 子どもの成長・発達を伝え、保護者が子育てに対して <u>理解を深められるようにする</u>	1	2	3	4
⑫ 子どもの成長・発達を伝え、保育所外の子育て支援サービスの <u>紹介や情報提供</u> をする	1	2	3	4

13. 「連絡帳」や「連絡帳を通して行う保護者支援」に関して、自由な意見をお書き下さい

Ⅲ 保護者とのコミュニケーションについてご回答下さい

(今回のアンケートではあいさつのみはコミュニケーションに含まないものとします)

- 保護者とコミュニケーションは、とれていますか。一つだけ○をつけて下さい
 ① 十分とれている ② とれている ③ あまりとれていない ④ 全くとれていない
- 1日のうち保護者とのコミュニケーションにかかる時間と人数について、下線の部分をご記入下さい
 時間： 1日のうち、保護者1人に対して、約 _____ 分 コミュニケーションをとっている
 人数： 1日のうち、クラスの約 _____ 割の保護者とコミュニケーションをとっている
 (※ほぼ全員であれば10割、半分であれば5割というふうに、数字を書いて下さい)
- 保護者とコミュニケーションをとるきっかけは、どちらが多いですか。一つだけ○をつけて下さい
 ① 保育士から声をかける ② 保護者から声をかける ③ その他(_____)
- コミュニケーションの中で、発言量はどちらの方が多くですか。一つだけ○をつけて下さい
 ① どちらかという保育士の方が多い ② どちらかという保護者の方が多い
- 保育士が保護者と直接顔を合わせてコミュニケーションをとる際の内容について、あてはまる数字に○をつけて下さい

	1週間に 1～2回	2週間に 1～2回	1ヶ月に 1～2回	1ヶ月に 1～2回
① 子どもの発達に関して	1	2	3	4
② 保育所での遊び(活動)に関して	1	2	3	4
③ 保育士と子どもとの関わりについて	1	2	3	4
④ 子ども同士の関係について	1	2	3	4
⑤ 家庭での養育に関して	1	2	3	4
⑥ 子どもの発言、つぶやきに関して	1	2	3	4
⑦ 生活習慣(食事、排せつ、睡眠、着脱、清潔等)に関して	1	2	3	4
⑧ 健康や病気に関して	1	2	3	4
⑨ ①～⑧以外に対する、保護者への応答	1	2	3	4
⑩ その他(_____)	1	2	3	4

6. 保育士が意識的に保護者とコミュニケーションをとる必要性を感じるケースについて、あてはまる数字に○をつけて下さい

	強く 感じる	感じる	あまり 感じない	全く 感じない
① 気になる行動や言動のある子ども	1	2	3	4
② 育児不安の高い保護者	1	2	3	4
③ 第一子をもつ保護者	1	2	3	4
④ 弟妹を出産予定、また出産直後の保護者	1	2	3	4
⑤ しんどさ(一人親、貧困、保護者の精神的不調等)を抱える家庭	1	2	3	4
⑥ 保護者の役割が果たせていない家庭(持ちもの、洗濯、食事等)	1	2	3	4
⑦ その他()	1	2	3	4

7. このアンケートに関して、お気づきの点、感じられたことなど、ご自由にお書き下さい

アンケートは以上です。お忙しい中をご協力いただき、本当に有難うございました！



謝 辞

本学位請求論文の執筆に当たりまして、多くの方々のお力添えをいただきましたので、この場をお借りして、お礼を申し上げます。

まずは主指導教員としてご指導くださいました大方美香先生に深く感謝いたします。私に関心を抱く保育ソーシャルワークは、保育とソーシャルワークという二つの学問領域を横断する研究テーマですので、両者の文化や用いる言葉や概念が異なり、お互いが理解し合うことの難しさがありました。

そこで、大方先生によって未知なる保育の世界を一から教えていただくところから研究が始まりました。保育士にとって日常的な保育業務の一つである連絡帳を、支援そのもののツールとして活用する発想を、新たな保護者支援のあり方として提示できたことは、大方先生のご指導なくしては実現できないものと言えます。

副指導教員である山崎高哉学長先生にも、絶えず温かい励ましをいただき、論文の論理性や表記法など細かにご指導いただきました。心から感謝申し上げます。

論文の公開審査に当たり、学外から副査をお引き受けくださいました大阪府立大学准教授の中谷奈津子先生には、丁寧に論文にお目通しいただき、研究者として未熟な点に対して、鋭く的確なご指摘をいただきました。本当に有難うございました。

さらに、玉置哲淳先生、小椋たみ子先生にも折にふれて、様々なお教えをいただきました。瀧川光治先生、渡辺俊太郎先生には、大学院の授業を通して研究手法を3年にわたり、丁寧に教えていただきました。

教務助手の小西由紀子先生は、院生生活を送る上で細やかにサポートしてくださいました。教務課の方にも大変お世話になりました。

アンケート調査では、多くの園の保育士の先生方にご協力いただきました。お忙しい業務の傍ら、真摯にご回答くださり、改めて感謝申し上げます。

連絡帳調査に当たって、快く連絡帳を提供してくださいました保護者の皆さまにも心からお礼申し上げます。

このように、研究は決して一人では行うことができず、何度も難関に突き当たり、挫折しそうになったことも一度や二度ではありませんでした。そんな時、指導教員

や大学院の先生方による温かい激励はもちろん、同じ年に入学した仲山正志さんとお互い励まし合うことで、乗り越えることができました。

最後に、私の最大の理解者であり、協力者として3年間“伴走”してくれた夫、二人の息子たちに心からの感謝を捧げます。